
約束

純らん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【コード】

N1138G

【作者名】

純らん

【あらすじ】

小さい頃交わした約束を守りたい。そんな純愛ストーリーです。

第1話（前書き）

がんばります

第1話

「かつちゃん、こっちだよ」

「みっちゃん、まってよ」

トデッ

夢か…

俺は10年前の事を夢見ていた。

俺は立川 勝弥

今日から俺も高校に入学する。

高校といっても対した高校ではなく、ただ家に近いから選んだだけ。

シャワーを浴びて、朝食のパンを食べていると携帯が鳴った。

「もしもし、勝弥？」

「おう！どうした？」

「今日、初日だから一緒に行かねえか？」

「…いいけど、彼女は？」

「だから、四人で行こうかな！つて。感謝しろ！？」

「…解った。もう少ししたら行くよ」

と、携帯を切った。

電話の相手は俺の中学からな親友である、城川淳だった。

中学のとき、この街に引っ越してきた俺によく声をかけてくれて、テニス部に誘ってくれたのも淳だった。

今では一番の親友だった。

淳はイケメンで話しやすいタイプの人間で誰からも好かれる男だ。まったく俺とは逆の人間なのに、なにかと俺の面倒を見てくれるいいヤツである。

…しかし、四人で行くとはな

かなり嬉しい！

凄く嬉しい！

四人つて事は、俺と淳と斎藤緑と愛川美代子の四人だろう。

緑は淳の彼女で、強引タイプの美少女。淳とは美代子含めて幼馴染み。中1から二人は付き合っている。

もう一人の女の子は美代子。

おとなし目の美少女で、彼氏いない為か、やたらモデル。ちなみに俺とは中二から同じクラス。三年間同じ部活。

しかし一回も喋ったことはありません。

なんか避けられてるみたい…

そんな事を考えていると、5分で淳の家に着く。

「「「おはよ」「」」

すでに三人揃っていて、俺も事務的に挨拶を返す。

高校まで自転車を走らせていると

「みんな同じクラスだといいいね？」

と、緑が言う。

「10クラスあるからまず無理だろ？」

淳が答えるが

「そんな事ないよ。運命を信じよう！」

「そうだな！信じるか！」

…勝手にやって下さい、バカップルが！！！！

俺は何でコイツらと一緒に登校してんの？

話しに参加出来ないから別に要らなくね？

と思いながら隣を見ると美代子と目が合った。

と思ったら反らされてしまった。

俺は美代子に何かしたのかな？と中学時代を思い出したが、ほとんど話してもないのでよくわからなかった。

第2話（前書き）

えゝ書くときは一気に休むときも一気にです。

第2話

そんなこんなで高校に着いた。

俺たちは自転車を置きクラス分けが貼つてある掲示板に向かうと、そこは人だかりが出来ていて先に進めなかった。そこで淳一人で見に行くと言い人だかりを進んで行った。

ものの3分ほどで苦笑いを浮かべ戻ってきた。

「D組だよ！」

「『誰が？』」

「4人とも」

「『え〜』」

やっぱり運命だったのか？

と思つたら緑が淳に抱きついているし・・・

消える！！バカップル！

そして俺達は3階へ上がりクラスに入った。

半分くらいは自分の席に座っていて、俺達が入ると全員こっちを見て固まっている。

そりゃそうだ。淳はイケメンだし女の子二人は美少女ときたもんだ。クラスだけではなく、学校中の噂になるだろう。中学の時みたいに。

俺には関係ないので自分の席についた。

初日だったので半日で学校が終了した。

帰りも一緒に帰るのかなと思っていたら、淳と緑はデートらしい。

俺は一人自転車を走らせていたが

「立川くん」

と息を切らしながら美代子が自転車を全力で濃いできた。

「えっと、一緒に帰る？」

「あっ、うん」

・・・一緒に帰るといつてもすぐ家に付くし、あまり話しいていないから気まづいな

と考えていたら美代子の家に着いてしまった。

やっぱり話せなかったか

すると

「これから何か用事ある？」

第3話（前書き）

携帯で書くと疲れますね。

第3話

「これから帰って用事あるの？」

と美代子が聞いてきた。

なぜ？

やつと思いだしたのかな？

「いや、別にないけど」

まあ、昼メシ作って食って片付けて、掃除でもするぐらいなか？
って考えてた。

あゝ俺の家は母親は小3の時に亡くなって、父親は出張中。出張
って言っても年中出張なんでほとんど家にいない。2ヶ月に3日間
ぐらいしか家にいないのでほとんど一人暮らし状態。そんな生活が
2年続いているからもう慣れてるけどね。

「遊びに行つていい？」

と微笑みながら聞いてきた。

んゝ昔と変わらず可愛い。ってどうしよう？俺ん家来ても何にも
ないしなゝ。って、2年間同じクラスで同じ部活だったのに全然話
せなかつたんだよ？俺ん家きてどうすんの？とりあえず話してから初
めません？って考えてたら、

「あつダメならいいよ」
「って微妙に涙目。」

「うんうん全然OKだけど何にもないよ？」

「ホント？じゃあ行こう」

と俺ん家着いた。

「汚いけどどうぞ〜」とリビングに案内する。

「へ〜綺麗じゃない」

そんなもんなの？俺は友達ん家とかあんま行かないからわかんないな〜

「とりあえず昼メシにしようか？」

「何食べたい？」

と聞きながら冷蔵庫を開けるともの見事に何も無い。あ〜今日は昼までだから帰りに買い物して帰れると思ってたんだ。

と、そこへ美代子が冷蔵庫を覗きに来た。

「あつ、私作るよっ」

「・・・何も無いねっクスッ」

「ラーメンがある」

って、それくらいしか無いのだが・・・

「うん。作る?」

ラーメンを食べながらいろんな話をした。

中学の時のクラスの話や部活の話。淳と桜の話なんか。

なんで中学時代は全然話し出来なかったのか不思議みたいに。
でも・・・

やっぱり覚えてなさそう・・・

第4話（前書き）

出来れば長い小説にしたいと考えてます。

第4話

昼メシを食べ終わり片付けていると、

「立川君の部屋は？」

と美代子が聞いて来た。

「あゝ2階だけど」

と答えると

「見て来ていい？」

「っていや・・・ダメでしょ？俺も年頃の男の子ですよ？変なDV
Dや本がそこら辺に散らかってますから。」

「無理！！」

「えゝいいじゃん」

「絶対ダメ！！」

「んゝ」

と美代子が俺に涙目になって訴えてる。

「片付けてないし汚いから。女の子家に上げたことないし」

って話してると

「じゃあ私が一番」

と勢いよく階段へダッシュし始めた。

「おいっ。マジ勘弁!!」

と追いかけたはいいがすでに遅し。

俺の部屋に入った美代子はベッドに置いてあったDVDを手にし顔を赤くしている。

「・・・」

「・・・」

非常に気まづい雰囲気の中

「あ」

「え」

と何も言えず、とりあえず返してもらい他に散らかってる本なども、片付けた。

「あ〜ごめんなさい」

と美代子が言つと

「ん〜しょうがないじゃん?」

と答えになつていない事を発つする。

見られたのはしょうがないけど軽蔑しないでね？ほとんどの男子は見るから。僕も普通の健全な高校生だから。

と自分で自分を説得させてしまう。

ある程度部屋の片付けも終わり二人でゲームなんかしてるともう18時になつてた。

「そろそろ帰らないとヤバくない？」

と俺が聞くと、

「あっそつだねっ」

と美代子が答えた。

「じゃあ送つて行くよ。俺も買い出し行かないといけないし」

「家族は？」

と美代子が聞いて来たので俺は自分家の状況を説明した。

「大変だね？」

と美代子が聞いてきたけど俺は、

「慣れてるから」

と答えた。

そして美代子の家の前でお互いの携帯番号などを交換して分かった。

第5話(前書き)

評価下さい！

第5話

買い出しを終えて家に帰ると美代子からメールが入ってた。

【明日からの昼食はどうするの？学食？？】

ん〜作るのはいいけど弁当とかマジめんどくさいから基本的には学食にしようと考えてた。

【学食にするよ。めんどくさいし】

と、絵文字もない普通メールです。

しょうがないじゃん？俺の携帯、女の子あまり登録されてないし。するとすぐに返信が来た。

【えっと、もし迷惑じゃなかったら私が作っていい？か？なって・・・】

え〜と、これはどういうことですかね？非常に嬉しすぎるのですが、彼女からしたら大変ですよ？

一応俺も料理はやるんで大変さは解ってるつもりです。弁当なんぞはメニュー考えるだけで嫌になってくるでしょう。

【愛川さんが大変だからいいよ？】

と一応わきまえてメールしました。

【一人分作るのも二人分作るのも変わらないから大丈夫だよ】

ん〜でもな〜、重荷なったら嫌だし。そんな煮え切らないヘタレな勝弥は

【やっぱりいいよ】

っと送った。

それからメールは反ってこなかった・・・

次の日、昨日と同じように淳の家に行ったら、みんな揃っていた。

「「「おはよ〜」「」」

そして自転車を漕いでいると隣の淳がニヤニヤ。

「昨日は二人で何してたの？」

「えっ？」

「昨日だよ！美代子がお前ん家行っただら？」

「あ〜」

って美代子を見ると、うつむきながら、「ごめん言っちゃたってな顔してる。

まあ別に隠す事してないしいかな。

「まあメシ食ってゲームしてみたいな感じだけど？」

「ふん」

とまたニヤニヤ。
すると緑が

「美代子、立川君のお弁当作ってきたみたいだよ」

って、俺の顔を見る。

あゝいらないうって言ったのに。まあ嬉しいが。

「へえ」

淳よ、朝からそんな顔しか出来ないのか？そんなニヤニヤばっかしてちゃ1日持たないよ？

まあ昼メシが楽しみだが・・・

第6話（前書き）

えっと、遅い展開でイライラするかもしれませんが、あたたかく見守ってください。

第6話

そして昼休み

「あっ立川君、お弁当作って来たから・・・一緒に食べよ？」

「えっ、うん。ありがとう」

そうして俺達は教室の窓際で淳と桜交えて昼食にした。

弁当箱を美代子から手渡され空けるとそこには、エビフライやらタコさんウインナーやらゴージャステか非常に手が懸かっている選り取りミドリなオカズがあった。

「すごい」

「スゲーな」

淳と緑である。

たしかにすごくて俺は箸を進められなかった。

「・・・あっ、食べて？」

「うん・・・うん」

味も確かで非常に美味しかったので素直に

「うまい！」

って言ったら美代子は顔を赤くし

「よかったあ・・・」

って言った。

こんな嬉しい日が来るとは思っては見なかった。思えば中学時代にもう少し話しかけてればちょっとは違ったのかな？昔の話も出来たのかな？なんて考えていたら

「愛川さん、隣のクラスのコが呼んでるよっ」

と、同じクラスの女の子が美代子を呼びに来て美代子は一緒に教室を出て行った。

「さっそく告白かね？」

緑が言ったら

「だろっな！」

と淳が同調する。

まあ確かに美代子は可愛いくて人気がある。でも中学時代から誰とも付き合うことは無かった。そのおかげで美代子への告白は男子共の日課みたいなもので、みんな美代子を落とそうとしていた。

隣にいる淳と緑も人気があるのだが彼らはバカップルとして有名なので、みんな諦めているから告白は受けないそうだ。

そして美代子が戻って来たのは授業が始まる頃だった。

第7話（前書き）

今日も1日頑張りましょう。

第7話

授業が終わると淳が

「部活どうする？」

と聞いてきたので

「んゝ帰宅部」

と答えた。

実際やりたい事もなく、中学の時やってたテニスもあまり興味なかった。美代子がいたから続けられたみたいだし。

「んゝじゃあ俺も帰宅部にすっかな。緑とのデート代の為にバイトでも」

って、お前は緑一番か?? 中学の時は部長までやってたんだからテニスやれよっ! て、心の中で叫んだ。

「やっぱり美代子告白みたいだったよっ」

と、緑が俺達の所に来てっか、俺の方を見ながら言ってきた。

「ふゝん。で? どうしたって??」

と、淳がやつぱり俺の方を見ながら答える。

「好きな人がいるからって断ったって」

好きな人が・・・。誰だろ??・・・

「だろくな」

淳が頷きながら言う。お前らは美代子の好きな人知ってんの?俺にも教えて???

不思議そうな顔をして二人を見ていると美代子が俺らの所にきた。

「部活どうするの?」

と美代子が聞いて来たが

「」「帰宅部」「」

と三人ハモる。

「緑も??」

淳が聞くと

「うん。だって淳とのデート代稼ぎたいもん」

はあく、この二人は考えてる事も一緒なのね。ほんとのバカッ
プルなのね???

「羨ましかったです?」

と、ニヤニヤ顔の淳。

「お前今日一日そんな顔してんぞ!」

と、軽く突っ込む。

「あゝじゃあ私も帰宅部にしよう」

こうして全員の帰宅部が決定した。そして帰り道緑が俺ん家に行きたいと言い出したので、俺ん家に向かった。

俺ん家に着いたはいいいが何するの??何にもないよ??今日は見たいテレビがあるから早く帰ってね!

と思つてたら

「部屋か・・・」

「何が?」

と緑が二階に上がり俺の部屋に入つていった。

「こらこら勝手に入んな!」

と言う俺の声を無視して俺の部屋を漁る。
そして……

「あつた〜」

何が？つと、緑が持っているのは昨日美代子が手にしたDVD
だった。

「おいおい……それ……」

と淳がバツが悪そうに言う。

そう、それは淳から借りていたものだった。

「美代子が言ってたんだけどこれって淳のでしょ？」

とブンブンな緑。

「あつ………うん。」

と身構える淳。

「もう。こんなの見なくたって私の見てんじゃん」
って、俺と美代子的にはスルーしたかったので二人で下に降りて
いった。

頼むから俺のベッドは使っちゃダメよ？
と心の中で呟いた。

第8話（前書き）

明日はお仕事です

第8話

あれから一週間特に何もなく過ごしてきた。毎日登下校を共にし美代子ともよく喋るようになったし、メールもするようになった。金曜日の朝いつものように四人で登校していると、緑が

「今日の夜は勝弥ん家でパーティしよう」

「……？」

「……何の？」

「突然だな」

……はい。淳君だけですよ、冷静なのは。

「えっと、みんなで仲良くなった記念日？」

……俺を除けば元々仲良かったでしょ？

はい、スルーよろしく。

そういえばいつの間にか、緑は俺の事を呼び捨てに呼ぶようになった。美代子は勝弥君だけだね。俺はまだ名前では呼べなく、名字で呼ぶと二人からはキモいって言われる。まあヘタレですから？

「んじゃ、勝弥と美代子は買い出しで私と淳は家待機ね」

いや、意味わかんないし。何？家待機って???

「食いたいモノわかんないからみんなで行こうよっ」
「へタレな僕の発言です。美代子と二人きりだとね〜会話が続き
ないんよ。」

「私（俺）達、用があるから」

「何？」

「ヤボな事聞くな」

「って、するのですか？やるんですか？人ん家で??」

「はあ〜しょうがねうな〜」

と、美代子と二人で近くのスーパーに来ている。まあいつも俺が買
い出しに来ている所。

「何買おうかあ？」

美代子が聞いて来たので

「適当に酒とシママミでいいんじゃないかね？」

「お酒飲むの??？」

「まあパーティーだから？OK？」

んな感じで適当に買い出ししてから家に向かう途中携帯が鳴った。

「あと、どれくらいで帰ってくる？」

淳からだった。

「ん〜あと10分くらいで家に着くよ」

「げっ・・・あと30分くらい遊んでいい？」

「はあ〜？やだよ、めんどくさい」

「いや〜マジ頼む！わかるでしょっ？」

「わかったよっ」

こいつらマジで人ん家でやってんのか？

つか、俺のベッド??

「どうしたの？」

隣で美代子が聞いてきた。

「なんか30分くらい遊んでこいて！」

美代子は解ったみたいで顔を赤くして俯いてしまった。

「はあ〜しょうがない公園でも行く？」

「・・・ん」

第9話（前書き）

え、評価されるとありがたいです！

第9話

家からほど近い公園に美代子と二人で来た。

別にブランコとか乗るわけじゃないので、近くのベンチに座った。

「……」

ん〜会話がありませんね〜。そりゃそうだ。夕方の公園に男女二人などベタな展開ですよ。

あ〜〜聞いてみるか？でも覚えてなかったらな〜……

すると、この沈黙を破ったのは美代子だった

「勝弥君は彼女とかいるの？」

いや、いませんから……。いたら君達を家に上げたりしませんよ？

「いないよ。愛川さんは？」

「私もいないよ」

でも好きな人はいるんだよね？まあ怖いから聞けませんけど……。

そしままたしばらく沈黙……

「中学のときさあ、もつと話しすればよかったねっ？」

と、美代子が言ってきた。……いや、俺は話しかけようとしたよ？でも、避けてなかった？

……とは言えず、

「ん？なんでだろ？なっ？」

と投げやりに答えを戻した。

「普通二年間も同じクラスで部活も一緒だったら仲良かったよね」
「」

だから美代子が避けてたんでしょ？俺的には嫌われてるって思ってたよっ？高校入る前までは。

しかしこのタイミング的には告白のタイミングだな！でも、俺からはしないけどね。俺は待ち状況だから。

と考えてると、メールが入ってきた。

携帯を開くと

【OK】

淳からだった。

「もう帰ってきていいってだって」

と美代子に言い、俺ん家に向かった。

家に帰りまず、俺の部屋チエツク。

んゝ大丈夫か？

しかし、微妙に掛け布団とモーフが逆だったのはスルーしよう。

「「「乾杯」」」

と四人での宴会？が始まった。

宴会って言うてもくっちゃべりながらツマミ食べてるだけ。みんな酒なんかあまり飲んだ事ないから、すぐ酔いが回ってきた。

あつ、俺は田舎帰ると飲まされるからある程度は大丈夫なんだけどね。

しばらくして・・・

「んゝ淳、大好き」

「んゝ緑、大好き」

はいはい。バカップルが俺と美代子の前で抱き合いながらキスしています。

顔を赤くして、口が半開き状態の美代子。彼女はあまり飲んでなくほとんど酔っぱらってない。

この間がいつまでも続くのは困るので

「もう、21時だからお開きにするぞ」

と言い、美代子と片付け始めた。

「あゝ俺達泊まるから」

「俺達？緑も？」

俺が聞き返すと

「うん 美代子も泊まるっ」

「うん」

と結局みんな泊まる事になった。

て、何処に寝るの？予備の布団一組しかないし・・・

淳と緑は一緒に寝るんだろうから、とりあえず俺のベッド使わせ
て俺は親父のベッド、美代子は下に布団敷く感じかな？

などと考えてたら・・・

「私と淳はここ（リビング）に布団敷いて寝るから、美代子と勝
弥は部屋で寝れば？」

緑が言ったので

「じゃ、愛川さん俺のベッド使いな！俺は親父のベッド使うから」

と決まりかけてたら

「いやいや、一緒寝な？そうすればもっと仲良くなれるよっ」

と緑が酔っぱらいながら言ってきた。

「いや、無理だから」

「あっ、うん」

と美代子と声が重なる。

「えっっっ！」

俺が驚いて美代子を見ていると、

「はい、決定。んじゃお二人さんは二階にどうぞ」

第10話(前書き)

なんか違う方向に進んでいます。が気になさらずに？

第10話

え、只今、美代子と二人で部屋にいます。彼女はベッドに腰かけ本を読んでいます。僕は何していいのかわからず片付けてるふりしながら部屋をウロウロしています。

どうしたらいいのですかね？一応、僕のベッドはセミダブルなので二人寝れますが、密着は避けられません。付き合ってもいないのでマズいですよね？？

やっぱり親父の部屋で寝ようとしたら

「あつ、もう寝る？」

「あつ、うん。親父のベッドで寝るよ。」

って言ったら涙目で

「嫌なの？」

「………いや、まずいでしょ………」

「寝るだけだから別にいいんじゃない？」

貴女は誰でもいいんですか！！と突っ込みたくなったのはスルーして

「寝よ？」

「あつ、はい・・・失礼します」

つて俺のベッドに失礼しますもないだろ!!

「おやすみ」

と、美代子は壁を背にして俺の方に身を傾け寝はじめた。
俺は美代子の方に背を向け横になった。

・・・俺って同じ方向ばかり見て寝れないんだよね。寝返り打ちたいのは我慢してると

・・・抱きついて来ましたよ！何か背中に柔らかいものが・・・

しばらく余韻？を楽しみながらこのままでは俺の理性が爆発してしまうので俺は美代子をそっと避ける形で仰向けに体を起こした。
はぁ・・・

寝れませんよ。よく貴女は寝れますね？

ふと、時計を見るとまだ2時を指していた。

下では淳達が寝ているので降りるわけには行かず、そのまま布団

に潜り込み美代子の寝顔を見ていた。

小さい頃と変わらず可愛い顔してるな〜などと、ふと昔を思い出した。

あの頃はいつも二人一緒に浜辺で遊んでいた。

岩場でカニや流れてくるワカメなど拾ったり、砂場で山作ったり、季節なんか関係なく遊んでいた。

あの頃は・・・

第11話 美代子視点（前書き）

ここで美代子について書いていきたいと思います。読んでくれる方もいらっしやいますが、ぜひ評価いただきたいと思います。

第11話 美代子視点

私は高校1年生の愛川美代子です。私には二年間片想いしている人がいます。彼の名前は立川勝弥君。

彼は中学入学と同時にこの街に来たらしく、初めて部活で顔を合わした時は特に印象も無く、二年生に上がって同じクラスになっても特に気にしてなかった。

それが、二年生の4月終わり頃・・・

「ごめんなさい・・・」

私はこの頃から、先輩や同級生から告白を受けていた。

今日も部活が終わって帰り道、先輩から声をかけられ近くの公園に来ていた。

私は恋愛とか興味無かったから、いや、遠い昔の思い出をずっと引き続けてたから・・・

名前も顔もよく覚えてないけど彼とずっと一緒にいた記憶だけは残ってた。小学校上がってから一度も会ってないけど彼の笑顔は忘れられない。だから他の男の子にはまったく興味なかった。

私が先輩に返事をして帰る途中、勝弥君が公園の入り口で野良猫に餌を与えていた。

その時の勝弥君の笑顔が小さい頃見た、彼の笑顔と同じように見え、自然と涙が出てきた。

それから私は教室や部活で彼を追うようになった。

同じクラスだし同じ部活だから彼も話しかけようと私の方に来るけど、どう接したらいいのかわかんなくて、彼の事を避けてた・

その事を親友の緑に聞くと

「それって立川君の事好きなんじゃないの？」

って言ってきた。

私は好きの感覚が良くわからなくて、ただ小さい頃の彼と一緒に、見ているだけで安心感があるような感じだった。彼・・・かつちゃんは本当に好きだったけど、あの頃はまだ小さかったから。

「これが好きって感覚なの？」

「そうだよっ！」

緑は淳と中学入ってすぐ付き合い始めた。二人とも私が引越してきて、すぐ仲良くしてくれて、かつちゃんとは別の私のもうひとつの幼なじみ。

「でもなく私は、まだかつちゃんが好きだから・・・」

そう。私はまだかつちゃんの事が好きだった。お母さんに聞いても教えてくれないから、もう会えないかも知れないけど、この頃はまだかつちゃんが好きだった。

でも目を追うことに勝弥君の事ばかり考えるようになった。

それは、かつちゃんの事を忘れて、彼の事を好きになったんだと
気付き始めたからかもしれない……。

はつきり勝弥君の事が好きだと気付き始めたがいいけど、どうして
いいかわからなかった。

告白は、された事はあってもした事はなく、彼とは話さえ出来
ないから……。

話しようとしても恥ずかしくて……
目が合うだけでドキッとする……

……そんな二年間だった。

第12話 美代子視点 2 (前書き)

どうぞ評価を！

第12話 美代子視点 2

「あんたねえ、なんとかしなきゃ他のコに取られちゃうよ!？」

緑の問いかけに、私は何も答えられなかった。

あれから私達は中学校を卒業しようとしていた。二回あったバレンタインも、彼の誕生日も告白する勇気はなかった。

ただ彼の事を好きだという気持ちが大きくなっていっただけだった。

それは高校進学を決める時にも、担任の先生からはもっと上の高校行けるぞ?とされたが、彼が居ない高校生活なんか考えられなかったから、彼と同じ高校を受験した。

お母さんは何も聞かなかったけど、多分家から近いからだと思っているはず。

彼と同じ高校で私は自分を変えよう、変えたいと思っていた。

「もう少し積極的になったほうがいいんじゃない?」

と、緑に言われなくても私は解っていた。

高校生になったらとりあえず彼と仲良くなりたい。

私からの告白はまず無理だから彼に私を好きになってもらえるようにしよう！

これが私か立てた高校生活の目標だった。

緑と淳に相談したら、二人は協力してくれると言ってくれた。

「やっとその気になったか!？」

淳に言われて凄く恥ずかしかったが私も二人みたいに彼と仲良くなりたかった気持ちが強かった。

「とりあえず、登下校一緒にするか？」

「そうだね。とりあえず話しから始めなきゃね！」

この二人は私の事を思っているいろいろなアイデアを出してくれる。楽しんでる所もあるけど、私には心強い幼なじみだった。

「よし、もうすぐ勝弥くるって」

今日は高校の入学式。今、淳が勝弥君にメールして四人で行こうと誘ってくれた。

私も勝弥君のアドレス知りたいな〜と考えてたら、勝弥君が来た。

中学校卒業式以来の勝弥君を見て、私の心はドキドキしっぱなしだった。

朝の挨拶をした時も声がうまく出なく、変な感じだった。

私は勝弥君の隣で自転車を漕いでいたけど、やっぱり話しは出来なかった……。

前では緑と淳がなんかしゃべっていたけどよく耳に入らなかった。彼をずっと見ていたら……

勝弥君が見て、一瞬目があつた。

……でも反らしてしまった……

あゝ変わろうとしていたのに……

それから学校に着いたら、なんとみんな一緒のクラスになった。特に、勝弥君とは中学から数えて3年間連続だった。

緑の言葉を借りて
これはもう運命よ！
と心の中でガッツポーズした。

第12話 美代子視点 2 (後書き)

もう少し続きます。

第13話 美代子視点 3 (前書き)

リクエストなんぞもどうぞ！

第13話 美代子視点 3

今日は始業式だから学校も半日で終了。

「朝の登校では何も話せなかったんでしょ？帰りは私、淳とデートだから二人で帰りなよ！？いくら私達が協力するって言っても、美代子が変わらなかつた意味ないからね？」

緑の言う通りだった。私は変わるとしていったんだ！

帰ろうとして私は勝弥君を探したけどいなくて、淳に聞いたらもう帰ったのこと。私は階段を駆け降り、自転車で追いかけた。

しばらくし勝弥君が見えた。

でも男の子の自転車を漕ぐ速さは私にはキツかったけどなんとか追い付いた。

「立川君？」

「一緒に帰る？」

私的には顔を赤くしていたと思う。自転車を漕いでいたせいではなく、彼と久しぶりに話しかけたから。

でも、他に話す事もなくて家についてしまったけど、私は勇気を
出して彼の家遊びに行きたいと言った。

彼もいいよっ！って言うてくれたので、私の中で何か変わってき
たような感じがした。

それから彼とはアドレスの交換や彼の家の複雑な環境を考え
て、お弁当を作ったりし中学時代では考えられないような関係にな
ってきた。

一緒にベッドに寝たし……

抱きついたのはやりすぎだったって、今思うと凄く恥ずかしけど、
他には何もなかった。

緑言わく

「好きじゃなかったら一緒に寝ないでしょ？」

勝弥君も私の事好きなのかな??

なんて顔をニヤニヤさせながら考えてた。

あとは、勝弥君に私の事を名前で呼ばせる！
私に告白させる！

この2つを達成させたいと考えていた。

第13話 美代子視点 3 (後書き)

美代子編 終了です

第14話(前書き)

ちよっぴりすれ違い編です。

第14話

お泊まり会から一週間後、美代子からメールが来た。

学校いる間は殆んど一緒にいるし、家帰ってからもメールはよくしてたから特に気にせずメールを開けたら、

【明日、また泊まりに行っていていい？】

明日からゴールデン・ウィークってやつで学校が八日間休みだ。

またみんなで宴会でもするのか？

【別にいいよ!?!?】

【じゃ、明日学校終わったらね】

また一緒に寝るのかな？

などと不安と期待!!を胸に俺は眠りについた。

次の日の朝、いつものように淳の家に行くと、美代子が居なかった。

「愛川さんは??」

俺が聞くと用があるらしく先に学校行つたと緑が答えた。

何の用?とは聞けず、俺達は三人で学校に向かった。

教室に入ると、美代子がもういた。

緑はすぐに美代子の席に行き話している。

俺も行つて聞きたかったがそこはヘタレな勝弥君。行けるはずも聞けるはずもなく。

淳に

「今日、宴会でもやんの?」

と今日のお泊まり会について聞いてみた。

「ん?今日?なんで??」

「あれ??」

「今日じゃなかったっけ？」

「今日は俺も緑もバイト入ってるけど!？」

「あつ!そう?勘違いか?」

んゝ確かに今日だと思うが・・・

と携帯を開き確認したが、やっぱり今日だよなゝ

などと考えて美代子に確認しようとしたが、美代子の回りは人集りになってて美代子までたどり着けない。

昼休みに確認するか!

昼休みゝ

「美代子、昼休みもなんか用あるみたいだからみんなで食べて!」
だつて

と、緑が俺に弁当箱を手渡す。

あれから美代子は毎日、俺の弁当を作ってくれている。

俺は大変だからいいよっ！と何回か断ったがそれでも作ってきてくれた。

そして放課後。

今日は淳と緑はバイトだから、美代子と二人で帰るのか。

今日は何も話してないからいろいろ聞きたいことばっかだった。

朝や昼休みのこと。お泊まり会のこと。など・

二人きりのときは何話そ？と考える事が多いけど、今日は話題に困らないな。

と、思ったら美代子がない？？

「あれ？愛川さんは？？」

「帰ったよ！？」

「・・・」

第15話(前書き)

今日は春一番らしいです。

第15話

んだよ……………

また、中学時代に逆戻りか？

とブツブツいいながら勝弥は自転車を走らせた。

明日から休みなので、そのまま帰るとはせず、街をブラブラしながら帰ると、家とは逆方向に向かった。

ショッピングセンターに入り映画館の前に来た。

この間、テレビを見ていた時にCMをやっていた、恋愛映画が今日から始まるみたいだった。

美代子が見たいっ！って言うていたが、俺は恋愛映画とかよりは戦争映画の方が好きなので、特に映画を見に行く約束もなかった。

しばらくしぶらつき、18時くらいになったので買い物して帰ろうとしたら携帯にメールが入った。

【何処にいるの?】

美代子からだった。

俺は、何?と思ったが深く考えず、

【ショッピングセンター、買い物して帰ろうと思って。】

【買い物なら私したよ!】

と返信が来た。

なんで?

メールだと時間かかりそうだったので、俺は美代子に電話した。

「もしもし?どうしたの??」

「今日、泊まる!って言ったじゃん!、お買い物してあるから早く帰ってきてよ!」

「あゝ淳なんかバイトみただけど??」

「だから?」

「……へっ？愛川さん一人泊まるの??」

「そのつもりだけど!？」

えっ

どうすればいいんですかね??

「とっ、とりあえず帰ります!」

と携帯を切り家に自転車を走らせた。

家に着くと玄関前に美代子が私服でいた。

「もう、何処行つてたのよ？」

「ごめん。淳達、バイトって言ってたから今日はなしかな?なんて思ってた。愛川さんも先帰っちゃったから……」

「私一人じゃダメなの？」

「んにゃらいえですっ!？」

と訳分かんない言葉を発し家に入った。

「すき焼きにするから！」

と、美代子は準備し始めた。俺も手伝うと言ったが、いいから着替えてお風呂でも入ってくれば？と返されたので、風呂に入った。

しかしこれからどうするのか？本当に泊まるの??

食事が終わり、リビングでテレビ見ていたら

「私、着替えてくるね」

と俺の部屋に向かった。学校終わって、家でシャワー浴びてきたからお風呂はいいらしい。

着替え終わって、俺の隣に座ると
美代子が

「ゴールデン・ウィーク中泊めてねっ」

「はっ？」

「だから泊めてね？」

「なっ、なんで？」

「ん？プチ家出」

は
っ

嬉しいやら・・・嬉しいやら・・・嬉しいやら・・・

第15話（後書き）

これからも応援よろしくです。

第16話(前書き)

読み直していたら誤字、脱字が非常に多くて読みづらかったです。
近いうち治したいと思います。

第16話

え〜・・・

・
・
只今の時刻、午前1時です。隣では美代子が寝息を立てています。

寝ようか！と、なったのはいいんですが、

なぜ・・・？

どうして・・・？

貴女が隣にいるんですか・・・???

回想してみましょう。

確か、貴女は親父の部屋に布団敷きましたよね？

別の部屋で寝ましたよね？？

なんで俺のベッドにいるのですか？？？

・・・仕方ないので俺はベッドから降りて、ソファで寝た。

朝起きると、美代子の姿が無いのでリビングに降りていった。

「おはよー、ごめんね!？」

「ああ、いいよ・・・別に・・・」

「途中で目が覚めちゃって、なんか寝れなかったから隣行っちゃった。」

美代子ってこんなコだったっけ???

「まあ、今日は気をつけてね!？」

「うん。」

「で、お母さんと喧嘩でもしたの？」

「うん。……いつもの事だよ!？」

「早く仲直りした方がいいんじゃない？」

「あっ!……昨日メールして仲直りしたよ」

「……じゃあ、帰れよう！」

そして、美代子が作ってくれた朝メシを食べながら昨日の事を聞いた

「昨日、全然会わなかったじゃん？何してたの？」

「あゝ先輩に呼び出されてた・・・」

「ふうん。・・・告白？」

「あつ、うん。」

まあ、美代子はモテるからね。

しかし1日何人から告白されてんだ？

俺なんか15年間告白された事ないぞ！？

そんな事を考えていると

「何も聞いてこないんだね・・・」

と美代子が悲しそうに聞いてきた。

だって怖くて聞けないでしょ？

それぐらい悟って下さい。

「え〜、あ〜・・・で、どっどっしたって・・・?」

俺は小声で聞いてみた。

「断ったよ」

ふう

まあひと安心ひと安心。

「好きな人がいるから! って断った・・・。」

好きな人・・・いるんだ?

前にもそんな話したな・・・。

「好きな人から告白されるの待ってるの・・・。」

待ってちゃダメでしょ? 自分から行かなきゃ。

待ってていい人は告白した人だけだよ?

・
・
・
俺みたい
に
・
・
・

第16話（後書き）

中学からは考えられない積極的な美代子です。この後どうなるのでしょうか？

第17話（前書き）

最近、読者数が増えてきたのはいいのですが・・・どなたか、評価してくれませんか？

第17話

俺は最近の美代子に対して違和感があった……。

中学からは考えられないほど話しかけてくるし、毎日弁当は作ってくれるし、泊まりにはきたり……。

俺は嬉しいのか、悲しいのか、よく解らなかった。

嬉しいのは美代子が俺に対して優しくしてくれること。
悲しいのは相変わらす思い出してくれず、好きな人がいるってこと。

だから、俺は美代子の優しさに対して冷たくすることもあった。

「仲直りしたんだったら、今日は帰れよ!？」

「……いい!って言ったじゃん……。」

「だめ

「……」

そんな顔してもダメです。

「……じゃ、今日何処遊びに行いっしょー!」

「何処に?」

しほひくこ

「遊園地」

「……混んでるよっ!」

ゴールデン・ウィーク初日だしね。

「遊園地!」

「いや、だから……」

「遊園地!!」

「はい、解りましたよ・・・」

「あつ!じゃ、緑達も誘って四人で行く?」

「ん。いいんじゃない!?」

そして・・・

淳の家に行き、四人で電車に乗った。

電車から駅三つの所に遊園地がある。

一つ目の駅を過ぎたあたりに誰かが美代子に声かけてきた。

「愛川さん久しぶり!」

そいつは中学の同級生でサッカー部の部長を務めていた、山原賢二だった。

「あつ、山原君久しぶり」

「よう、賢一！」

美代子と淳が山原に挨拶している。

俺と緑は同じクラスになった事ないから顔を知ってるくらいだった。

緑が俺に小声で

「確か中3の時、美代子に告白してきたやつだよっ、今は違う高校に行ってるはず。」

「みんなで何処行くの？」

山原が聞いてきた。

「近くの遊園地だよっ！」

と淳が答えたら

「愛川さん、勝弥と付き合ってるの？」

・・・？

「一つ質問していいですか？」

君は僕の事を名前で呼ぶほど仲良かったですか？？」

「えっ！！？……………っ、付き合っていないよ……………」

と、周りに聞こえるくらい大きな声で美代子が答えた。

……………そんなおもいきり否定しなくても……………
……………ねえ？

「あっ、そうー！？じゃ、俺も一緒に行くよっ！」

「……………えっ？……………」

第17話（後書き）

これから新キャラがどんどん出て来ます。

第18話(前書き)

遊園地編はもう少し続きます。

第18話

俺達5人は遊園地に向かって歩きだした。
しかし、5人じゃ1人余るよね？
二人乗りがほとんどだもんね？

今の状況（先頭は淳と緑、その1メートル空けて後ろに美代子と山原、そして3メートル空けて俺1人）から言って、俺が余りなの？

山原が勝手に付いてきたんだから1人で乗れよ？

美代子が誘ったんだから一緒に乗ってねっ？

とは、言えません・・・。

そして遊園地に着き、入場券とフリーパスポート券を買った。

俺は入場券だけね・・・

1人で乗ってもつままないじゃん・・・？

「入場券だけでいいのかよ？」

と、誰も聞いてきてくれなかったのはスルーして下さい……………。

そして、入場して30分。

……俺は1人で休憩してます……………

予想通り、淳と緑、美代子と山原ペアはジェットコースター乗り場に並んでいます。

あたり前のように山原は

「愛川さん、一緒に乗るおね」

と、美代子を誘い

美代子も断れず

「うっ、うん……………」

だって……………

さすがにゴールデン・ウィーク初日です。

一時間待ちは当たり前前で、これはこれで良かったのかも!?

・・・そんなわけないのだから、自分で自分を慰めているヘタレな勝弥です。

しばらくすると・・・

「ねえねえ、さっきから1人だよね？」

と、可愛い少女が話しかけてきた。

「・・・だれ？」

「1人でしょ？」

・・・だから、君はだれ？

「1人だよ・・・今は！」

「ふうん。・・・もしかして・・・誰かに邪魔された？」

「なっ、何言ってるんだよっ！」

「くすっ。・・・一緒だねっ」

と、右手を差し出してきた。

「・・・何が？」

「私、高校1年の吉田絵美理」

「宜しくね」

「俺も高1の立川勝弥」

と、一応握手する。

「なんで一緒なの？」

「私も彼氏取られちゃたから」

とジェットコースター乗り場に指指して言った。

第19話(前書き)

続きます。

第19話

ジェットコースター乗り場を見ると淳達がこっちを見ていたが

「ほら！あのすごく可愛いコいるでしょ？・・・その後ろのカップル・・・」

可愛いコとは美代子の事だろう。

その後ろでは腕を組んでいるカップルがいる。

というか、女性の方が無理矢理、男にしがみついている感じか？

その男の視線は俺の方に向けられている感じだが・・・

「ふん。彼氏なのになんで??」

「・・・彼氏では・・・ない?・・・かな??」

「さっき彼氏って言ったじゃん!」

「だからまだなの！」

意味がわからなかった。

「で、あなたは？」

「……その前のカップル……」

「……あの可愛い」？

と、俺と美代子を交互に見る。

「……付き合っていないからね！？」

「……あゝなんか納得した」

「……どついう意味で納得してんの？」

「……俺と美代子じゃ、釣り合わないけども？」

「実際、その通りだが。」

「じゃ、二人で遊びに行こお」

と、絵美里が俺に言ってきた。

「じゃ〜、って何？」

「いいじゃん 邪魔者どうしで！」

まあ、実際その通りなんだが……

どっちかと言うとこの口のテンションに付いていけないのでお断りしたいのだが、今日1日1人でここにいってもしょうがないので、絵美里に付き合う事にした。

比較的広い遊園地なので淳達とは会わず、絵美里の方とも会う事はなかった。

ジェットコースターとか色々乗って、少し小腹が空いたので昼食にしようとしたら、淳達も休憩していた。

「よう、勝弥！ナンパしたのか！？」

と、賢二が俺に向かって言ってきた。

「あつ、私、吉田絵美里です。ナンパされました」

と、絵美里が答える。

二つほど突っ込みたい所があるが、めんどくさいのでスルーした。

その時、美代子が俺をおもいつきり睨んでいた。

美代子の表情を絵美里も感じたらしいが、俺は美代子を見ようともしなかった。なので気付かなかった。

その時

「絵美里！」

と、後ろで絵美里を呼ぶ声が聞こえた。

みんなで後ろに視線を移すと、さっきのカップルがいた。

「何処、行ってたんだよっ！」

「祐介がそのコと一緒に遊んでいるから、私も勝弥と一緒に遊ぶのっ！」

と、祐介というヤツと絵美里が言い争っている。

「探してたんだぞ？」

「誰も頼んでないっ！」

まだ終わりそうにないので、俺は1人、ハンバーガーとジュースを買いに行った。

その後ろを淳が着いてきて

「どっいっことだ？」

俺に聞いてきた。

俺はすべて淳に事情をはなした所、淳も解ってくれたみたいで

「これからどうすんだよ？」

と、俺に聞いてきた。俺にはこの状況をどうする事も出来ないの

「なあ？」

と答えた。

第20話(前書き)

今日は多めに更新します。

第20話

しばらくして・・・

絵美里が俺の腕を掴み

「私、勝弥と一緒に回るからっ！」

と宣言した。

「おいっ！俺帰るぞっ！」

「ちゅっ、行くっっっ！」

・・・俺の意見は関係ないのね？

と、思っていたら

「じゃあ、みんなで回らねえ？ちょうどカップルどうしになった
じゃん」

バカ賢二です。

お前が割り込まなきゃ、すべてうまく行ってたんだよっ！
絵美里は知らないが。

「いや、俺は帰る！」

と俺が言ったら

「じゃあ、他行ってデートとしよう」

と、絵美里が離してくれなかった。

そして、絵美里と二人で遊園地を後にし、デートするわけにもいかないのです。絵美里を送る為、家とは逆方向の電車に乗った。

絵美里は、電車の窓から寂しそくに遊園地がある方向を眺めている。

祐介とどういふ関係とかは、絵美里が話さないかぎり聞こうとは思わなかった。

しばらく電車で揺られ、駅に着くと絵美里が

「少し、話ししよ？」

と、喫茶店に入っていった。

そして、絵美里と祐介の関係などを聞いた。

絵美里は小6の時のバレンタインデーに告白したらしい。その時祐介は、特に返事するわけでもなかったが、それから二人で遊びに行ったりしていたみたいだった。それでも祐介から好きと言葉は聞けず、付き合っているかはわからないと、絵美里が寂しそくに言った。

そして俺の事も聞いてきた。

普段の俺だったら話しすることもないのだが、俺は絵美里に美代子との過去を話した。

俺達の話しは、今一番の親友である淳も知らない。知っているのは小学校時代の親友である山本博一だけだった。

なぜ今日会ったばかりの絵美里に話したのかは解らなかったが、絵美里は真剣に聞いてくれた。

「勝弥も大変だね？」

と言ってくれたのは俺と自分をダブらせているのだろう・・・

第21話(前書き)

どなたか評価いただければ・・・

第21話

絵美里と喫茶店を出たら祐介がいた。

「・・・」

「・・・」

お互いに話ししようとはせず、ただ見つめ合っているだけ・・・。

111

「この空気に耐えられない俺は、」

「絵美里送って行ってやってくれ!」

と、祐介に言った。

「おっ、おっ!」

祐介が返事したので俺は家に帰る為、電車に乗った。

電車が遊園地前に止まると、ちょうど淳達が帰るときで乗ってきた。

俺は別に悪い事をした訳ではないが、変な感じがして身を隠した。

美代子と賢二と一緒にいる所を見なくなかったのかもしれない。

降りる駅は一緒なので、俺は会わないように一つ前の駅で降りた。

美代子に見られてるとは知らずに……。

一本電車を遅らせた俺は駅に着き、改札を出ようとしたら見ては行けないもの、見たくないものを見た。

それは……

賢二が・・・

美代子を・・・

抱き締めていた・・・

俺は言葉をかける事もなく、その場を走り出した。

ショックより・・・

イライラしていた。

抱き合っていたのではなく、賢二が一方的に抱き締めていただけなのかも知れないのに・・・

美代子に電話して確認すればいいのに・・・

すべて考えられなかった・・・

家に着いたはいいが、特に何も出来なかった。

携帯の充電も無くなっていたが、充電するのめんどくさい。
メシ作るのめんどくさい。

ゴールデン・ウィーク中、何もせず俺にとっては最低な休日だった・・・。

第22話 美代子視点（前書き）

美代子視線です。

第22話 美代子視点

最近、勝弥君が冷たい感じがする・・・

明日からゴールデン・ウィークだから今日は泊まってい

と、確認してあったのに・・・

放課後、買い物して勝弥君の家に行ったらいないし・・・

お母さんと喧嘩し、仲直りしたら帰れって言っし・・・

告白されたと言っても結果聞いてこないし・・・

勝弥君は私をどう見ているのかな・・・？

なんとか勝弥君を説得して、今は緑達と遊園地に行く為、電車に乗っている。

しばらくすると

山原賢二君が声をかけてきた。

彼は中3の時、私に告白した。私はその時もう、勝弥君が好きだったので、断った。

「愛川さん、勝弥と付き合ってるの？」

と、聞いてきた。

私は嬉しかったのに恥ずかしくて、大きな声で否定してしまった。

そして何故か山原君も、遊園地と一緒に行くことになった。

遊園地に着いたら山原君と一緒に乗ろうと言ってきた。

私は勝弥君と一緒に乗るつもりだったのに・・・断われなかった。

勝弥君は見てるからみんなで乗ってきな！

と、1人でベンチに座っちゃった……。

私は勝弥君と乗れないなら、遊園地なんか来たくなかった……。

ジェットコースター乗り場で並んでいたら、隣にいる山原君が

「勝弥、ナンパしてねえか？」

と、言っただけで勝弥君を見たら知らない女の子と話していた。

しばらく見ていたら、勝弥君とそのコが何処かに歩き出した……

私は……

何でここにいいのかわからなかった……

他に何も乗る気もなく、私はブラブラ歩いていた。
勝弥君を探す為に……

緑達も解ってたのか、私の後ろに着いてくる。

しばらく歩いていたら、淳が休憩しようと言ったので休憩した。

そこへ、勝弥君とあの女の子が一緒に来た。

「私、吉田絵美里です。ナンパされました」

・・・なっ・・・ナンパ・・・？

私は勝弥君を睨んだ。

一緒に乗れなかったのは私が悪かったけど、

ナンパする事ないじゃん？

すると、もう一組のカップルがこっちに来た。

その男の子が吉田さんと何か言い争っていたけど、私は勝弥君と一緒に遊びに行こうとしたら

吉田さんが勝弥君を連れて遊園地を出て行ってしまった。

残された私達は、何処に乗るわけでもなく、ただその場に座っていた。

ただ私が動きたくなかったただけなんだけど、緑達も一緒にいてくれた。

しばらくしたら、緑が帰るおと言ったので帰る事にした。

電車に揺れながら今日の事を考えていた。

昨日、勝弥君の家に泊まって、勝弥君との距離が縮まってきたか
と思っていたのに・・・

電車が私達が降りる一つ前に停車した時に、勝弥君が降りるのが
見えた。

なぜ？

どうして？

私はよく解らなかつたけど、勝弥君は次の駅に自転車を置いてあるから、次の駅で緑達に先帰ってもらい、勝弥君を待つ事にした。

電車が止まり、大勢の人が改札から出てきたので、勝弥君を探していたら

「愛川さん」

と、山原君が後ろから抱き締めてきた。

私は驚いたけど、すぐに山原君を振り払い、走り出した。

泣きながらたどり着いた所は、勝弥君と始めて打ち解けた公園だった……。

第23話(前書き)

ちょっと短めです。

第23話

ゴールデン・ウィークが空けて今日から登校日。

携帯の充電を完了させ、いつもの時間より5分遅らせ家を出た。

携帯のメールを確認すると、淳から何件か入っていて、何処にいるんだ？とかだったので特に返信もしなかった。

教室に入ると、ほとんど揃っていて、美代子も席で緑と話していた。

1週間ぶりに見た美代子は少しやつれた感じに見えたが、挨拶もせず俺は席に着いた。

淳が、あの後どうした？とか聞いてくるが、適当に流していた。

昼休みになり美代子が俺の所に来て、弁当を置いていった。

いつもなら一緒に食べるのだが、美代子もなんか感じたのか誘ってはくれなかった。

俺は一人食堂に行き、美代子がつってくれた弁当を食べた。

食べながら美代子の事を考えていた・・・

食べ終わったら、弁当箱を返しながらこの間の事を聞いてみよう
と・・・

このままでは中学時代に逆戻りだから・・・

そう思い弁当箱を片付けて教室に戻った。

淳達と一緒にいた美代子の所に行き、

「ごちそうさま！・・・帰り、話があるっ！」

と、美代子を誘った。

美代子も

「……うん。私も……」

……帰りの約束をしたのはいいが何から聞こうか考えていたの
で、昼からの授業は頭に入らなかった。

美代子を待つて、一緒に教室を出た。

下駄箱を過ぎ、校門を出ようとしたらそこには、賢二がいた。

美代子を待つていたのは明らかで、俺達を見つけると

「ちょっと、愛川さんと話がある！」

と、俺に聞いてきた。

……俺にはどうすればいいのか解らなかった。

俺も美代子に話しがあると約束していたんだが、俺達は別に付き合っているのではないので、美代子を縛り付ける権利は俺にはない。

駅で賢二が美代子を抱き締めていた事を考えると、賢二が美代子を好きなのは間違いない。

その後、どうなったのか俺には解らないが、もし二人が付き合い始めたなら俺が邪魔者になるだけだったから。

俺は美代子に返事を任せる為、美代子に聞いた。

「どうする？」

・・・美代子はしばらく考えると

「少し話ししてくる」

と、俺に答えた。

俺はその時二人は付き合い始めたのか？

などと考えながら家に帰った。

美代子が

（話し終わったら、勝弥君家、行くから！）

と言ったのは聞こえなかった。

第24話(前書き)

評価くれた方々どうもありがとうございます。まだまだ受け付けています。

第24話

美代子と賢二は付き合い始めたのか・・・？

付き合ってたなかったら、俺の方を優先してくれるだろ？

高校入ってから俺にしてくれた事を考えれば・・・

などど考えていたら携帯が鳴った。

携帯を開くと絵美里からだった。

「もしもし勝弥？」

「・・・何？」

と、俺はいかにも機嫌悪そうな返事をした。

どうせ祐介の事なのは解っていたから。自分の恋がうまくいかな
いのに、人の相談には乗りたくなかったし。

「今から会えない？」

もう夕方だから絵美里と会うのは夜になってしまっただろう。

「夜になっちゃうぞ！」

「え〜と、たぶん今、勝弥の所の駅にいるんだよね!？」

「はあ?・・・わかった、今いくよ。」

俺は自転車を駅に走らせ、絵美里を迎えにいった。

駅前に着くと絵美里が制服のままいた。

見た事もない制服だが、家にはまだ帰ってないみたいだった。

俺の顔を見ていきなり泣き出した。

理由を聞いてもただ泣いているだけだったので、とりあえず俺の家に連れて行こうとしたら

「今日、泊めてね！」

「はっ????????」

まだ会ったの二回目だよ？
帰るならちゃんと送って行くよ？

「帰るとアイツがいるからやだっ！」

アイツとは祐介だろうか、お互い好きどうしなのになんで俺が・

友達ならいいけど、女の子一人じゃな
美代子は泊めたけど・・・

しかし、俺って信用があるのか？
俺も普通の男だよ？女の子一人家にいたら・・・ねえ？

・・・たぶん何も出来ないが・・・

しばらく自転車を走らせ、家に着くと

そこには

美代子が待っていた。

俺は別に悪い事をしたとは思ってなく

美代子に

「どうした？」

と聞いた。

すると、絵美里が美代子に向かって

「ヤッホー」

どれだけテンション高い女なんだよ！

さっきまで泣いてたじゃん！！

と突っ込みたいが、とりあえず二人を家にあげた。

第25話（前書き）

本日も沢山の方が読んでいただきましてありがとうございます。

第25話

今、俺の家には美代子と絵美里がいます。三人で美代子が作ったご飯を戴いています……。

徐に絵美里が

「今日、私、泊まるけどいい?」

と美代子に聞いた。

なんで美代子に聞くのさ??

「えっ!??…な、なんで?」

「家帰ると祐介がいるから……。」

「勝弥君がいいんならいいんじゃない!?!?」

と、美代子が俺の方を見ながら答える。

確かに俺ん家だから俺が決める事だし・・・

俺は別にかまわなかったから

「俺はいいよ！」

と答えた。

その時、美代子が俺に

「私も泊まるからねっ！」

怒りモード？

で、言ってきた。

絵美里を泊めて、美代子を泊めないわけにはいかないの、結局二人泊めた。

絵美里と美代子は二人で風呂に入りながら、色んな話をしたみたいだった。

たぶん恋バナだろうが・・・

絵美里には俺の過去話した時に、誰にも言わない約束してあるから大丈夫だと思う・・・たぶん・・・。

絵美里達が風呂に入っている間、絵美里の携帯が鳴りっぱなしだった。

風呂から上がってきた絵美里に伝えると、どうせ祐介だからいいっ！と、俺に言ってきたが、勘違いされても困るので一応連絡してくれ！と、当たり前前の意見を言ったんだが、じゃあ勝弥が連絡すれば？と俺に振ってきやがった。

しかたないので絵美里の携帯から祐介に電話すると、祐介も今から行くから駅まで来てくれとのこと・・・

俺は本日二度目となる駅まで自転車を走らせた。

絵美里と祐介に振り回されている俺って・・・！？

駅に着いて祐介を待っている間、美代子の事を考えていた。

賢二とはどうなったのか・・・。

もし二人が付き合う事になったら俺はどうするのか・・・。

たぶん・・・

俺から話しかける事はないだろう・・・

美代子から話しかけられても適当に流すだけだろう・・・

中学時代より最悪な展開になる事は予想出来る。

だからといって、俺から告白することはない・・・。

俺は

美代子に

もう伝えてあるから・・・

第25話（後書き）

もう少し絵美里& a m p・祐介編です。

第26話(前書き)

絵美里& a m p・祐介の思いです。

第26話

改札から祐介が出てくるのが見えて、俺は軽く手をあげた。
祐介も俺が解ったらしく俺の方に来た。

祐介を後ろに乗せ自転車を走らせたが、会話がない・・・。

考えてみれば、祐介とは会話らしい会話をしたことがなかったから。

人見知り激しい俺には、友達の友達？と一対一は非常に厳しい。

このまま俺の家に連れていっても、絵美里はもちろん俺とも気まづかったら祐介の居場所がなくなる。

俺は家の近くの公園で祐介と話すことにした。

缶コーヒーを二本買い、一本を祐介に渡す。

すると、

やっと祐介が口を開いた。

「なあ、お前って絵美里とどういう関係？」

「・・・友達」

絵美里とは知り合ったばかりだけど、たぶん友達だと思う。

異性との友達はあり得ないと考える人もいるが、人見知り激しい俺が、親友にも話した事がない過去を話した事は、友達以上だと考えているかもしれない。

絵美里と初めて会った状況が、似た者同士だった為、俺と絵美里を友達以上に行っているのだろう。

たぶん絵美里は、悪い言い方すると、俺を使って祐介との関係をはっきりさせたいと思っているはず。

だから、絵美里が俺の家に泊まる事も、俺が祐介を迎えに行く事も絵美里のシナリオなのかもしれない。

美代子が泊まる事になったのは絵美里のシナリオには入ってないと思うが・・・。

「異性の友達が一人で泊まりにくるか？」

だから、絵美里のシナリオなんだよっ！

俺の家泊まるって言えば、お前が来る事も！

気づけよっ!!

「祐介は絵美里の事どう思ってる?」

(いきなり呼び捨てで呼んでしまったが、男同士だからいいだろ?)

まず、祐介が絵美里との関係をはっきりさせたかった。

「俺は・・・絵美里の事を彼女だと思っているけど・・・」

「好きだと言ったのか?」

「付き合ってくれて言ったのか?」

「彼女だと思っているなら、なぜ違う女と遊園地にいたんだ?」

俺は、煮え切らない祐介にぶちまけた。

俺は絵美里の味方だから。

祐介はいろいろ考えて、俺に話した。

小学生の頃、絵美里から告白されたけど恥ずかしくて答えられな

かった事や、二人で遊びに行つてたりしたから、絵美里も祐介の気持ちに気づいているということも。

はつきり、好きとか付き合ってくれとは言つてないが、キスも体の関係も合つたから解つてくれていたと思つてた・・・と。

遊園地では、たまたま会つた部活の後輩に強引に引つ張られた・・・と。

言い訳みたいだが、最後に俺は絵美里が好きだ！とも。

「家で絵美里が待つてるからちゃんと見えよ？」

と、俺が言つたら祐介も、解つてる！と返事したので、二人で俺の家に向かった。

第27話(前書き)

相変わらずへタレな勝也編です。

第27話

家に着いて、祐介と絵美里を二人きりにする為に、俺と美代子は俺の部屋に行った。

俺も美代子には聞きたい事があったから。

部屋に入ったらいきなり、美代子が

「友達でも女の子を一人泊めるのはどうかな?・・・って思っけど?」

と、少し悲しそうに聞いてきた。

美代子はどうなの?美代子も泊まったじゃん?とは・・・聞けなかつた。

俺達の関係がどうなのかはっきりしていない以上、美代子に彼氏が出来たのか解らない状況では答えられなかつた。

「でも、あの二人ならうまく行くよね!」

「あの二人ならね・・・。」

・・・美代子はどうしたいのか？
俺は思いきって賢二の事を聞いてみた。

「賢二は？・・・美代子はどうなの？」

「えっ・・・？」

（あっ！・・・美代子って、名前で呼んでしまった・・・）

「初めて名前で呼んでくれたね」

「あゝ、嫌だったら愛川さんにするけど・・・」

「うんうん。前から名前で呼んでって言ってたじゃん」

そこまで喜ぶことなんだろうか？

「で、賢二とは？」

「え〜とね、また告白されたけど断ったよっ！」

2回も振られるとは可哀想なやつだな、賢二も。

しかし、美代子を抱きしめたのは許さない！

自分が思っているだけで、相手を確認しないうちは反則だよな？

バチが当たったんだな！　アホ賢二め！！

と、心の中で賢二を憎んでいたが、美代子が振ってくれたので、安心していた。

・・・そういえば、祐介と絵美里はどうなったのか？

祐介のヤツはちゃんと前に進めたのか？

人の心配しているほど、俺に余裕あるのか？

俺こそが、過去に囚われず前に進まなきゃいけないのではないのか？

高校に入って美代子とは急激に仲良くなったのはいいが、この先の展開が解らない・・・。

美代子の好きな人が誰だが解らないが、少なくとも俺の事を嫌いではないだろう！？友達以上に想ってくれているだろう！？？

俺から告白すれば何か変わるのか・・・？

答えが見つからないまま

当たり前のように

美代子と一緒に寝た。

第28話(前書き)

本日やっと更新出来ました。

第28話

次の日の朝、目が覚めると祐介と絵美里の姿がなかった。

絵美里達も今日は学校だから、朝早く出て行ったのだろう。

美代子も降りてきて、朝ご飯と弁当の用意を始めた。

キッチンに立つ美代子を見ていて、付き合っているレベルじゃなく、新婚さんじゃね？

とニヤニヤしている俺だった。

美代子と学校行く途中、絵美里から美代子にメールが入った。

そこには

【祐介が私に好き！って言うてくれたっ！！】

と書かれていたらしい。

・・・祐介の背中を押したのは俺だし？
・・・話し合いの場を設けたのも俺だよな？

俺に連絡しろよっ！

と、突っ込みたいが、上手くいったみたいなので、スルーしてやった。

学校に着くと淳が、今日遊びに行かねえか？
て聞いてきた。

緑も美代子と買い物行くらしいから暇なんだそつだ。

最近は四人で出かけるのが多いので、淳と二人で遊びに行くのは本当に久しぶりだった。

断る理由もないので

「いいよ。何処行く？」

「ん〜いつものコース!？」

と、決定した。

・・・こいつと二人で出かけると、いろいろ面倒が起きるのだが・
・大丈夫だよな・・・？

放課後になって、淳とゲーセンに来ています。

ゲーセン カラオケがいつものパターンです。

・・・男二人で?????
スルーして下さい。

ゲーセンを出て、カラオケに向かう途中、女の子二人組みが声かけてきた。

ほらね!?

こいつと二人だと女が出てくるんだよね?

まあ、イケメンだしね!

俺？

俺も声かけられるよ！

・・・男から・・・

初対面の女の子と仲良くなる

そんな特技を淳は持っている。

人見知りな俺にはそんな特技持ち合わせていないので、現在俺を抜いた三人で話ししている最中です。

「・・・なっ？」

「・・・ん？、ああ。」

・・・曖昧な返事はするものではないですね。

どうやら四人でカラオケ行く事に賛成したみたいです。

俺はいいよ？

淳はヤバくねえ？？

（大丈夫だよ。緑達は隣街に買い物行ったから。それに、お前は女に対して免疫力つけたほうがいいって！）

と、アイコンタクトを送ってきやがった。

まとめると、淳は俺の為に？

いや違うな！

淳のニヤニヤした顔を見れば・・・

（バレても知らないからな！）

と、一応返した。

（OK、OK）

結局、四人でカラオケに向かった。

カラオケに入ろうとしたら・・・

ほらね？

・
・
・
知らないからな!?

第29話(前書き)

最近、評価がなく寂しいです。評価アップ⇨更新アップです。宜しくお願いします。

第29話

カラオケに入ろうとしたら・・・

緑と美代子が

曲がり角から出て来ました・・・。

その時の淳は、靈感が働き自縛霊を見た表情をし、本人には10分くらい時間が止まったかのように、ハッ！と、現世に戻りたくないのに戻ってまいりました。

緑が酷い表情で

「四人で何処行くのかしら・・・？」

と淳に迫っている。

(・・・勝弥、何とかしてくれっ！)

(無理だつて！緑の顔見てみるよ。・・・悪魔だぞ！)

(人の彼女を悪魔とか言うな！)

(突っ込んでる場合じゃねえ！・・・まだ、入ってないから素直に謝れ！)

以上、勝也と淳のアイコンタクトです。

「まさか・・・ナンパとかしてた？」

おおおおお、

すごい顔してますよ。緑さん。

「あ、ああ勝弥がな！」

(お〜い！俺？俺、女の子達と一言も喋ってないよ？)

「・・・勝弥が？」

緑も疑ってるね。

俺には無理だと解っているのでしょう。

「そういえば、遊園地でもナンパしてたわね!？」

と、緑が俺を疑い始めたと思ったら
美代子もすごく怒った顔で、俺に迫ってきた。

俺は何もしてないのに……

こうなったら女の子達に助けて貰おうと、振り向いたら帰ったの
か、いないし……

「と、とりあえず場所変えて、話しませんか？」

勝弥の提案です。

こんな所で言い争っていたら通行人に邪魔だし、かなり恥ずかしいので。

また、少し言い訳を考える時間も欲しかったから。

「場所なんか変える必要ない！」

緑の一言で却下されました。

(ちゃんと説明するぞ?)

(止めて!殺される!!)

もう、この空気には耐えられないので

「俺がナンパしてカラオケに行こうとした所です。……ごめん
なさい」

淳は緑と付き合ってるので、フリーな俺が罪？を被りました。

美代子の前で・・・

その時

パシッ

と、美代子が俺の頬を叩いた。

美代子の目には涙が溜まっていた。

そして、男二人残されていた。

第30話(前書き)

本日二度目の更新です。

第30話

あれから一週間、いつものように、淳と昼食中です。

おわかりのように、美代子は弁当を作ってくれなくなり、話しさ
えもしてくれません。

当然のようにメールも帰ってきません。

付き合ってもいないうちに終焉を迎えたようです・・・

それは隣にいる淳も同様で、緑とうまくいってないみたいです。

「もう一週間だぜ！？いい加減にしろよな？ちゃんと謝ったのに
！！」

淳君、・・・すべて君のせいなんだよ？
せつかく美代子といい感じだったのに・・・

「はあ」

二人のため息は虚しすぎます・・・

「どうするよ？」

「どうしよもないだろ？・・・俺達は付き合ってもないから、どうすればいいかわからない。」

「誠心誠意謝るか？」

「お前はな！」

淳と今後の対策？を考えていたけど、俺は美代子に対してどうすればいいかわからなかった。

付き合ってれば、俺が完全に悪いのでちゃんと謝るが・・・

次の日の朝、学校に行くと淳と緑が仲直りしていたみたいだった。

緑いわく

今度こんな事したら私も浮気する！

と、宣言されたみたいだった。

緑と淳が仲直りした事で、俺も美代子と元通りになるのかな？

いや、俺だけはダメみたいでした・・・。

弁当作ってくれないし、話しもしてくれません。

淳君、助けて？

「お前もちゃんと謝れば？」

淳君のお言葉です。

謝ったよ？

俺は悪くないけど・・・

でも、このままではどうしよもないので、放課後美代子に謝る為メールした。

【放課後いつもの公園で待ってる】

美代子から返信はなかったけど、俺は放課後公園に向かった。

一時間程待っていたら、美代子が現れた。

俺が謝ろうと口を開いたと同時に

「私、隣のクラスの富山君と付き合う事にしたの！」

「・・・はっ！？」

「・・・じゃあね」

「・・・えっ！」

美代子は手を振って、俺の前から消えた・・・

第31話(前書き)

今後、新キャラが増えていきます。

第31話

あの公園での出来事からもう3ヶ月立ち、今日は終業式だった。

あれから美代子とは、なるべく顔を会わさないようにしていた。

俺に見せていてくれた笑顔を、他人に見せる美代子は見たくなかったから……。

淳とは、美代子達の話題に触れないように話したり、バカしたりと中学時代と変わらず過ごしていた。

明日から夏休みとなるが、俺は毎年田舎に帰り、友人の手伝いをする事になっている。

そんな事を知らない淳は、俺をバイトに誘うが、最近美代子も一緒に始めたらしいと聞いていたのでお断りした。

美代子には彼氏がいる。

この事実を変えられないし変えようとも思わない。

俺が忘れればそれでいい！

と、思っていた。

家に帰ろうとしたら淳が、今日花火大会に行こう！と言い出した。

緑と行けよ！

と断ったが、淳が強引というか、強制的に迎えに来て俺を引っ張って行った。

花火大会の会場に着くとまだ花火は上がっていないなく出店を淳と回っていた。

その時、後ろから

「淳
」

と、声をかけたのは緑と美代子だった。

俺はあの日以来、緑とも喋ってないので、無意識に二人を避け、歩き出した。

「勝弥も一緒に花火見よう？」

緑が誘ってくれたのは嬉しかったが、美代子に彼氏が出来た以上、前みたいに四人での行動は俺には無理だった。

「いや・・・いい！」

場の雰囲気壊すのは解っていたが、まだ踏ん切りがつかなかった。

「いいから！行くよっ！」

緑が強引に俺を引っ張る。

淳と似てるね？

バカップルだもんね？？

今、四人で出店を回っているが、俺の隣を歩いている美代子とは話ししていない。

本当なら金魚すくいしたり、射的したりと楽しむのだが、そんな余裕はまったくない。

はつきり言って全然つまらない・・・

そんな出店回りだった。

しばらく歩いていたら

思わず目を疑った・・・

そこには

美代子の彼氏である富山が、女の子と恋人繋ぎしながら歩いていた。

俺は怒りを通り超して富山の胸ぐらを掴み殴りだした。

富山の隣にいた彼女の悲鳴と、淳の止める声は聞こえなかった。

でも美代子の

「もう、やめてー」

の声は聞こえた。

一番怒りたい美代子が、富山を庇うのは俺にとって屈辱でしかない。

俺は富山への怒りと嫉妬で、さっきから五月蠅く鳴っている携帯を叩き割り、その場を後にした。

第32話(前書き)

新キャラは濃いめです。

第32話

辺りを見渡すと田園が広がり、その先には海がある。

今、俺は田舎に帰る途中で電車に乗っている。

昨日の花火大会の後、家に帰ったら、電話があった。

「もしもし？勝弥？」

「ああ！どうした？」

「どうしたって、お前こそ携帯どうした？繋がらないけど？」

「・・・壊れた。」

「ふん。まあいいや！で、こっちにいつ来る？」

「一応、8月入ってからと思っていただけ？」

「・・・明日来ねえ？」

「なんで？急だな！」

「いや・・・友美と・・・な・・・」

「・・・解った、明日から行くよ。」

電話は俺の小学生時代の友人である、山本博一だった。(通称ヒロ)

ヒロは俺と美代子の関係をすべて知っていて、淳以上の友人だった。

昨日の電話によると、彼女である友美と喧嘩したに違わないだろう。

友美も小学生時代の友人で、いつも三人で遊んでいた。

俺が引越すときに、友美から告白された事はヒロも知っていて、その後二人は付き合い始めたそうだ。

俺も昨日の一件で、あの街には居づらかったので、誘われたのはちよつど良かったのかもしれない。

約6時間電車で揺られ、それからバスで30分で俺の実家に着く。

ここは海から近く、俺の家の前には海水浴場があり、その先に波乗り場がある。

一年ぶりに帰ってきたが、都会とは違い、何も変わっていないが、たことが嬉しかった。

この街は彼女との思い出がある場所だが、ここで彼女の事を忘れようと思っていた。

実家は大きな二階建てで、この家に婆ちゃん一人住んでいる。

自分の部屋に荷物を置き、婆ちゃんと少し話してから友美の家に行った。

友美の家は父親である、友和さんが漁師で、母親の睦美さんが海の家を開いていて、俺は毎年手伝っている。

なぜかこの街の大人は、おじさん、おばさんと呼ぶと怒るので、みんな下の名前で呼んでいる。

友美の家に着くと

友和さんは酒を飲んでいて、睦美さんと友美が食事中、友美の彼氏であるヒロは、玄関で正座中。

・・・修羅場？

第33話（前書き）

いつも読まれてる方々ありがとうございます。評価の方も少しずつ上がっておりますが、まだまだ足りません。是非一票を！！

第33話

俺を呼んだヒロは、何故か友美の家の玄関で正座中だった。

(どうした?)

(助けてくれ!)

(だから何したんだ?)

(クラスのコとメールしてたのが友美にばれた!!)

(・・・それだけ?)

(・・・ああ・・・)

そこへ、友和さんが

「お、勝弥か！久しぶりだな」

と、俺に声をかけた。

それと同時に友美と睦美さんが、俺を招き入れる。

「・・・ヒロは?・・・あのまま??」

一応、俺の友人なので勘弁してほしい・・・

「浮気したみたいだから、今日は食事なし!」

睦美さんが答え、友美はヒロを睨み付けている。

浮気?

・・・じゃないと思うが、突っ込むと俺も正座させられるので黙っていた。

しかし、浮気という言葉で

「こらあゝ、てめえ俺の娘じゃ物足りねえって言うのかあ!!!」

友和さんです。

酒飲んでいる時は誰にも止められません。

ただ、メールしただけ!と言っても信じてもらえない俺の親友は、玄関に頭をこすりつけてます。

こんなことをしていても、友美や睦美さんはヒロを許しているはずで、後は友和さんだけだったのは俺には解っていた。

「ヒロも上がって来いよ!」

俺は自分の家のようにヒロを誘う。

俺の言葉に誰も意見は言わない。

友和さんも、ヒロの事はどうでもいいのか、俺に酒を進める。

ヒロも今までの土下座が無かったように、睦美さんと食事始めた。

友美は俺の所に来て

「なんかあった？」

と、聞いて来た。

「いや、俺は別に？おまえらだろ？」

実際、美代子との話題には触れてほしくなく、夏休み中にすべて忘れようとしていた。

「私達はいつもどおりだけど？」

「まあな、俺が来たからって変わらないしな！」

と、二人で笑い合う。

友美と話していたら、いつのまにか宴会になっていた。

この家族はいつともこうなんだよな

次の日から、睦美さんの海の家を手伝っている。

朝、8時から16時まで、ガンガンに照らされる太陽の下で、焼きそばを作ったりしている。

俺も水着の女の子を見ながら仕事したい！

と叫ぶヒロは、当然のことながら皿洗い担当である。

それから一週間、海で遊んだりバイトしたりと、彼女の事は忘れかけ始めたが……

第34話 美代子視点（前書き）

少し戻って、ここから美代子視点でお送りします。

第34話 美代子視点

私は今、花火が打ち上げられている場所から動けないでいる。

花火を見たいからではなく、勝弥君に殴られてボロボロになった
富山君を手当てしているからだっただった。

富山君の本当の彼女さんは、手当て出来ないほど泣き崩れている
から。

そう！

私と富山君は

緑が頼んで

付き合っているふりをしてもらっていた。

勝弥君と淳が女の子をナンパして、カラオケに入ろうとしたのが見えた。

私達は、付き合っているわけでもないけど、許せなくて思わず頬を叩いてしまった。

それから、私は勝弥君がちゃんと謝ってくるまで、お弁当も作らなかつた。

それほど私は怒ってるんだよ？

なぜ怒っているかわかる？

勝弥君の事、好きだからだよ？

気付いて欲しくて……

勝弥君が謝るまでお弁当を作らない！

緑が考えた第一作戦だった。

緑第二作戦は、彼氏が出来たふりをして、やきもちを妬かせること。

さすがに、私は拒否したけど、あいつにはそれぐらしないとダメ！という緑の言葉を信じて、緑の知り合いの友達である富山君を紹介された。

緑いわく

同じクラスだったらイチャイチャしなければいけないでしょ？
さすがにそこまでは出来ないでしょ？

絶対に無理だし！！！！

富山君には違う学校に彼女がいるので、彼女に話してからOKという返事を貰った。

実際、富山君とはこの時が初めて話しして、花火大会の日まで話していないほどの付き合いだった。

あの日から一週間後、話したいから公園に来てくれと勝弥君からメールが入った。

私は、緑に相談し勝弥君が謝ってくる前に、富山君と付き合いって

いる事を報告し、その後彼からの告白を待とう！作戦で臨むべき公園に向かった。

久しぶりに勝弥君と二人きりで緊張したけど、私は彼に勇気を持って、富山君の事を報告した。

その後、彼から告白があったら私は、私達は違う方向に向かっていた・・・はずなのに・・・

公園での告白からもう3ヶ月も立とうとしていた。

この間、彼は私と顔も遇わせようともしてくれない。

当然といえば当然か・・・

このままじゃ、何も変わらないから、私は終業式の日にある花火大会で、ある決意をした。

それは、今までの事をすべて勝弥君に話して、勝弥君に告白しようと考えていた。

待ってても離れていくばかりだったから。

私はこの時、すべて上手くいくと考えていた・・・

第35話 美代子視点 2 (前書き)

勝弥と美代子の過去が・・・

第35話 美代子視点 2

花火大会の日、告白しようと思ったのに・・・

あれから一週間、勝弥君を探して歩いたけど、何処にもいなかった。

淳と緑もバイトを辞めて一緒に探してくれた。毎日、勝弥君の家に行っても帰ってる様子はなかった。

途方にくれていたら、絵美里から着信があった。

勝弥と連絡が取れないけど！

という内容で、私はすべて絵美里に話した。
絵美里は

「・・・多分だけど・・・解ると思う・・・」

「えっ？」

「……とりあえず美代子の所行くね。」

と、電話を切った。

絵美里が祐介君を連れて私の家に来た。

緑と淳もいて、お互い自己紹介してから、絵美里が話し始めた。

「……勝弥の過去の話は聞いていたけど、誰にも言うな！つて口止めされているから言えない！……でも、今勝弥がいないなら実家に帰っていると思う。……たぶん」

「実家って何処？」

淳が聞いた。

たぶん淳が知らない事を絵美里が知っているのは、淳にとって哀しい事だから。

「そこまでは知らない。海の近くとは聞いたけど」

絵美里も知らなければどうしようもなく……

五人で途方に暮れていると

「美代子、下に降りてらっしゃい！」

お母さんの声が響いた。

下のリビングに行くと、知らない伯父さん？

どこかで会った事あるような・・・

お父さんの友達かな？

「こんばんわ！」

一応、挨拶した。

「美代ちゃん、綺麗になったね！」

・・・だれ？

「あつ！オジサンじゃん」

淳が後ろから答えた。

「まだ、わからないの？」

お母さんが私に聞いてきたけど、全くわからなかった。

「勝弥君のお父さんよ！」

お母さんが呆れて私に言った。

「えっ？・・・勝弥君の・・・お父さん？？」

・・・なんで???

「覚えてないのはショックだな」

勝弥君のお父さんが苦笑いしながら言った。

なぜ勝弥君のお父さんがここにいるの？

私は会ったことあるの？

次にお母さんが発した言葉は私にとって衝撃的だった・・・

第36話 美代子視点 3（前書き）

お待たせしました。ではどうぞ！

第36話 美代子視点 3

勝弥君のお父さんが私の家にいる。

私はこの状況が不思議でしようがなかった。

「勝弥君のお父さんである、晃司と私は幼なじみよ！」

えっ？

勝弥君のお父さんと私のお母さんが幼なじみ？

私はお母さんに聞き返した。

「そうよ！」

「だから、あなたと勝弥君も小さい頃、よく遊んだわ！」

「・・・」

私の中で、小さい頃の記憶が甦る。

勝弥君を好きになってから忘れていた、かつちゃん存在を・・・

「・・・勝弥君は・・・かっちゃん？」

私は思いきつてお母さんに聞いてみた。

「正解 気付くまで三年かかったわね！」

「お母さんは知ってたの!？」

「当たり前でしょ？勝弥君が中学生の頃は、私よく食事作りについてあげてたわ！最近では美代子が行くようになったから遠慮したけどね」

「・・・な、なんで言ってくれなかったの？」

お母さんは私の質問にしばらく考えて

「・・・二人の・・・ため・・・かな？」

言っている意味がわからなかった。

隠す必要なんかあるの？ 勝弥君もなんで言ってくれないの？

私はすべてがわからなかった・・・

すると絵美里が

「多分・・・お母さんもすべて知っていると思う。・・・だから、何も言えなかったんだと。私も知っているけど言えない。美代子の問題だから・・・」

私の問題？

私が何かしたの？

「それで美代子、勝弥君と何かあったの？」

私は隠し事していてもしょうがなかったので、すべて話した。

「本当にしょうがないわね！・・・晃司どうするっ？」

「実可子に任せるよ。俺は明日帰るから！」

私のお母さん（実可子）と勝弥君のお父さん（晃司）で話しあっている。

「私も久しぶりに帰るかな？貴方達もくる？勝弥君も実家にいるらしいから！」

そして、私と緑、淳、絵美里、祐介、お母さん、勝弥君のお父さんと一緒に、お母さんの故郷に行くことにした。

一週間ぶりに勝弥君と会えるけど、私はどう接したらいいのか？

勝弥君とかっちゃんが同一人物だったなんて・・・

なぜ、勝弥君は何も言ってくれなかったのか？

私の問題は何なのか？

私は勝弥君のお父さんが用意してくれた車に乗り込み、これからの答えを見つげようとしていた・・・

第37話（前書き）

編集作業中、誤って第一話を消してしまいました……。どう
やって元に戻すのか何方か教えてくれませんか？

第37話

今日もいつものように海の家を手伝っていると

「今日、晃司さん来るって?」

ヒロが聞いてきた。

「ああ、携帯買って貰わないと・・・」

親父が今日から来る。

いつまで居るかは聞いていないけど、居る間に携帯買ってもらい、さすがに淳だけは連絡取ろうと考えていた。

あの花火大会の後どうなったのか?

富山と美代子には悪いことしたから、謝罪だけはしなければ・・・

「友和さんが、今日揚がった魚持ってくるってよ!」

「また宴会か？」

「だろっな！どうする？友美と三人で何処行くか？」

「俺はいいけど、ヒロはやばくねえ？友和さん暴れるぞ！？」

「いつも俺が相手してるんだぜ？晃司さんもいるから大丈夫じゃねえ？」

友和さんが飲んでいる時は大抵ヒロが犠牲になります。

友和さん曰く

「俺の娘が欲しかったら俺の手伝い（漁）と酒を覚える！」

と、言われたらしく、高校生のヒロは友美の家に居候し、朝早く起きて友和さんと漁に出、帰ってきてから学校、終わったら友和さんと酒盛りと、高校生らしかなる生活を送っている。

「まずいかな？」

不安そうにヒロが俺に聞いてくる。

そこで、友和さんの奥さん兼友美の母親である睦美さんが

「今日、大勢連れてくるみたいよ？準備も大変だから貴方達も手伝いなさい」

と、いつもはヒロの味方である睦美さんから却下されたらヒロは何も言えない。

大勢？

親父にそんなに友達いたかな？

不思議に思いながらいつもの仕事に戻った。

昼過ぎに残り物である、焼きそばやかき氷などを持って、友美と売りに歩く。

友美はスタイルも抜群で黒のビキニは男を誘っているようで、友美が売りに歩くと瞬く間に人だかりが出来る。

俺も売りに歩くが、まず声がかけれない。

そこで俺は、友美の後ろを歩き友美のおこぼれを貰い、俺も売り切ることができて、睦美さんの小言を避けられる図が完成する。

ヒロ？

ナンパするから店の外には出してもらえません。

こうして暑い1日が終わり、いつもなら海に入って遊ぶのだが、親父が大勢連れてくると言うので俺達はバーベキューの準備に取りかかった。

第38話(前書き)

遅くなりました。では、どうぞ。

第38話

家に帰ってみんなで準備に取りかかる。

睦美さんと友美は買い出しに行き、ヒロと俺はバーベキューの準備。友和さんは魚を卸している。(なぜかその隣には一升瓶があります)

買い出しから睦美さんと友美が帰ってきたと思ったら

「あっ！お酒忘れた」

と、睦美さんが言ったが

「日本酒ならあるぞ！」

友和さんが隣にある酒を出す。

「それはお父さん用でしょ？若い人もいるから違うの買ってきてくれば？」

睦美さんが俺に言うので、俺は若い人？と疑問に思いながら酒屋に行った。

この辺は地代も安く一軒一軒に大きな庭がある。俺の家も庭はか

なり広く、親父が帰ってくると、庭で宴会が行われる。大抵、俺は友美の家に緊急避難するが。

そんなことを考えながら酒屋に向かうが、都会と違ってかなり遠い。自転車で20分は走らせないと着かない。小学生の頃は気にしなかったが、高校生になった今では、通う高校よりも遠いのはどうかと思う。

やっとの思いで酒屋に着き、帰りの途中少し遠回りし、普通つた幼稚園に向かった。

ここには美代子と遊び回った思い出がある。

小さい頃から人見知りだった俺は、父親の知り合いのコというだけで、その子の後ろばかり追いかけていた。

その頃から人気者だった彼女は俺が一人で砂遊びをしていると必ず俺の所に来て声をかけてくれた。

両親が共働きであった彼女は俺の母親が来ると一緒に俺の家に帰り夜になると彼女の母親が迎えに来ていた。

あの頃はいつも一緒にいて、『約束』したのも今日みたいに暑い夕方だった。

もうすべて忘れようとしても、10年間という時間が許してくれない。

この期間中の最大の悲しみは、母親が亡くなった事かもしれないが、それでも勝弥は美代子との約束を思い続けていた。

しかし、美代子から見た勝弥は只の友達でしかなかった。

美代子は他の人を選んだのであって、勝弥は美代子の決断を否定する事は出来なかった。

「…俺も、これからは前に進まなきゃな」

幼稚園のブランコに腰を降ろしながら勝弥が呟やいた。

それは、勝弥が美代子を吹っ切ようと決断した時だった…

第39話 美代子視点(前書き)

最近評価がなく寂しです…

第39話 美代子視点

みんなで勝弥君の実家に行くのはいいんだけど、凄い渋滞。

朝、早く出たからお昼くらいに着くと予想してたのにこれじゃあ夕方になっちゃう。

海が見えて来て、近くなってきたんだな〜って感じていたら、みんなは海だ！って騒いでる。

しょうがないか、私達が住む場所は海なんてないもんね！

そんなみんなのテンションには着いていけるはずもなく、私は勝弥君にどう接しようか考えていた。

私は、かつちゃんの事を忘れて勝弥君を好きになった。

でも、かつちゃんと勝弥君は同一人物だった。

だから、私が好きになった人は一緒。

ここまでいいのこ…

どうして勝弥君は何も言ってくれなかったのか…？

私はかっちゃんと遊び回ってた幼稚園時代を思い出していた。

親同士が仲良かったせいか、私とかっちゃんも仲良くなった。気が付けば、いつも一緒にいた。

幼稚園ではかっちゃんが一人で遊んでいたけど、私が近くに行くと笑顔を見せてくれる。

私は、かっちゃんの笑顔を見たくていつも側にいるようにした。

今思えば、勝弥君の事を好きになったのもこの笑顔だった。

小学生時代のたった六年間会わなかっただけで、私にはかっちゃんとは解らなかった。随分変わってるし。

でも、今思えばあの笑顔は同じように感じる。

だから私が好きになった人は一緒だったのだと。

私は勝弥君にきちんと想いを伝えようと心に決めた。

しばらくすると

「着いたぞ！」

勝弥君のお父さんが言った。

久しぶりに見る勝弥君の家は小さい頃大きな庭で走り回ってた頃と変わらなかった。

すべてが懐かしく感じ、近くを散歩したくなった。

すると

「いらっしやい！」

勝弥君の家には私と同年くらいのコとか何人かいた。

「友美ちゃんと彼氏は貴方達と同年だから、みんな挨拶してきなさい」

お母さんが言うので、みんなで二人の所に行き挨拶した。

友美ちゃんと彼氏のヒロ君は勝弥君の幼馴染みみたい。私が引越してから仲良くなったって言ってた。

私の知らない勝弥君を彼女達が知っているのは少し羨ましかった。

するとヒロ君が

「勝弥、買い出し行ってもう少して帰ってくると思っよー!」

買い物かあ

早く帰ってきて欲しい。

私の心は決まっている。

私の気持ちを解ってほしい。

私は、勝弥君が好きです。

早く伝えたい…

キキキイ

自転車が止まる音がした。

第40話(前書き)

月並みですが…では、どうぞー！

第40話

「よしっ！」

俺は、幼稚園のブランコから勢いよく飛び降り家へ向かった。

今は空き地となっている美代子の実家を通り過ぎ、家へ着いた。

自転車毎、庭に入るとそこには

今一番会いたくない美代子がいた…

美代子以外にも全員集合していた。

「…」

俺は驚きで言葉を話すことも出来なかった。

そんな俺に助け船をしてくれたのは淳だった。

「…勝弥、ちょっといいか？」

「…ああ」

俺と淳は家を出て、近くの港まで歩いた。

「美代子と幼馴染みだったなんて知らなかったよ！」

淳が俺に言ってきた。

黙ってたのは、淳から縁、美代子と伝わるのが嫌だったから

俺は今さらだけど、淳にすべて話した。

淳の事、親友だと思っているから

最後に

「いじめん…」

と。

淳も納得してくれたが、絵美里が知っていたのは淳のプライドに障ったみたいだった。

「今度からはちゃんと相談しろよ?」

淳から言われるまでもなく、俺は頷いた。

「...で?どうするんだ?」

「...俺は...忘れる」

美代子の事を聞かれたが俺にはもう終わった事だと自分なりにケジメを付けた。

いつまでも引きずっていたくないし、毎日笑ってもみんなと過ごしたい。

そう考えていた。

すると

「多分…美代子が色々話してくると思うけど、ちゃんと聞いてやれよ?」

「…ああ、わかってる。みんな友達だから」

俺は苦笑いしながら淳に答えた。

ここに美代子がいるということは、多分思い出したのだろう。

でも、彼氏がいる美代子が思い出した所で俺には関係ない。

好きという、愛情感情から友達感情に変わるだけだ。

友達として付き合っていければいい。

そう考えていた。

淳と家に帰ると

「私もちよっと話があるんだけど…」

と、美代子が俺に言った。

「これからバーベキューの準備しなきゃいけないから後でいい？」

別に今でも良かったが、まだ二人きりで話すのは抵抗があった。

「…あつ、うん。後でね」

そしてみんなで準備にとりかかった。

みんなで、肉を焼いたり友和さんが卸した魚を食ったりと今日の夜は騒がしかった。

一番はやはり絵美里だろう。普段からうるさい絵美里は酒を飲むと10倍くらいアップする。

もしかしたら友和さんと張り合えるかもしれない。

親父も友和さんに飲まされたのか、珍しく酔っぱらっていて、寝床へ行ってしまい、実可子さんは友和さんと睦美さんの家に泊まるから、あとは若い人達で楽しみなさい！と三人消えてしまい、俺達

だけが残された。

後片付けを済ませたらヒロが近くに温泉があるからみんなで行こう！と誘い温泉に向かった。

酒を飲んでいたので俺は一人ですぐ出た。

外で涼んでいると

美代子が出てきた。

俺達はどちらかともなく、歩きだし幼稚園に向かった。

第41話 想い(前書き)

まだまだ評価を受け付けております。指摘なんぞもどとぞぞ！

第41話 想い

近くでは花火の音が聞こえ、空を見上げれば都会では見ることが出来ない程の星が煌めいている。

幼稚園に着くまで俺達は一言も話さなかった。

俺の後ろを美代子が歩いてくるだけだった。

幼稚園に着き俺は数時間前にも腰かけたブランコに座った。

隣に美代子が座るのを確認し

「…悪かったな。富山…」

無我夢中で富山を殴ってしまった事は素直に謝りたいと思っていたので、自然に口から出た。

それは、勝弥が美代子に対して愛情から友情に変化したからだった。

美代子に対して愛情があれば、他の女といた富山に対して殴らな
かっただろう。

しかし

「謝るのは私の方…」

「富山君とは…付き合ってたから…」

「…えっ？」

「付き合ってるふりしてた…」

なぜそんな事をするのか？

する必要があったのか？

「…富山、殴られ損？」

「うん。でもちゃんと謝ってきたから…」

そういう問題じゃないけどな…

「でも、どうしてそんな事したの？」

疑問に思っていることを聞いてみた。

「勝弥君が……やきもち妬いてくれるかな？って……」

「……どづいづいと？」

勝弥には何となく美代子が言った意味は解っていた。しかし、美代子の口からハッキリ言っただけじゃ欲しかった。

それは

数時間前に決めた自分の決断を覆すことであっても。

「それは……」

「それは？」

「勝弥君の事……す、好きだから」

美代子の口から勝弥の事を好きだと言ってくれたのは、勝弥にとって最大の事件かも知れない。

だけど、勝弥はこれからどうすればいいのか解らなかった。

勝弥も美代子の事が好きなのは、諦めようと決断した後でも変わらない。

勝弥は美代子に聞いてみた。

「ここに来たということはすべて思いだしたの？」

美代子がすべて思いだしたなら先に進みたかったし、美代子の返事も違うはず。

「すべて？…勝弥君はかつちゃん…でしょ？小さい頃いつも一緒にいた！」

「それだけ？」

「……うん」

勝弥にとって美代子から好きと言われた事は嬉しかったが、約束を思いだしてくれない美代子には腹立たしかった。

「俺の事、好きと言ってくれるのは嬉しいし、俺も美代子の事好きだよ！」

「でも、それだけ」

「それだけって？」

「それだけだよ！」

勝弥はイライラしながら答え

「帰ろ！」

と幼稚園を後にした。

美代子は不思議そうに俺を見ていた

お互い好き同士なのだから、付き合ったりと次の展開になるのが、ならなかったからだった。

なぜか勝弥の機嫌が悪いのも美代子に取っては不思議でしょうが

なかつた。

第42話 貝殻 美代子視点(前書き)

遅くなりました。では、どうぞ！

第42話 貝殻 美代子視点

私達は両想いだったんじゃないの？

あれから勝弥君の家に帰るとみんな揃っていて、何やってたんだ？とか色々聞いて来たけど勝弥君は笑って誤魔化すだけだった。

誰が言ったのか分からなかったけど、それぞれカップルで寝ようとなったみたいで、私は当たり前のように勝弥君の部屋だった。

付き合ってるの？

聞かれても答えられない。

恋愛って難しい…

次の日から私達も睦美さんの手伝いをするようになり、何事もな

く過ぎていった。

このままでいいのかな？

このまま勝弥君の隣にいていいの？

考えれば考えるほど、私には分からなかった。

数日たってから不意に緑と絵美里が私に聞いてきた。

「勝弥とどうなってるの？」

私には分からなかったけど、二人にはちゃんと話ししてどうしたらいいか聞きたかった。

すると絵美里が

「しょうがないな、小さい頃勝弥と遊んでた場所とか行ってみれば？少しは思いだすんじゃない！？」

絵美里は知っているから絵美里の言う通り私は近くを歩いていった。

勝弥君の家の近くに公園がある。

ここの遊具で勝弥君と鬼ごっこしたりして遊んでいた。

私の記憶の中では幼稚園、公園、海くらいしか思いつかず、公園じゃなかったら海かな？とまた歩き出した。

海といっても私達が働いている海水浴場ではなく、隣にある波乗り場の方へ歩き出した。

ここはサーフィンやボードやっている人が沢山いて、遊泳禁止の場所だった。

一歩、海に入るとすぐ深くなり下には岩がゴロゴロしていて波も荒い。

とても泳ぐ場所ではないが私達は海水がキレイだったこの場所が気に入っていた。

そんな事を考えながら少し砂浜を歩くと

貝殻が落ちていた。

私は

「あっ！」

貝殻を手に走り出した。

やっと解った。

勝弥君が言っている意味を……

私達は『約束』したのだった。

勝弥君は私の答えを待っている……

すべて理解した私は勝弥君の家に走りだし、勝弥君家が見えた時、
友美ちゃんからの携帯が鳴った。

第43話 学級委員長(前書き)

新キャラ登場です！評価、感想、指摘なんぞもどござ！

第43話 学級委員長

俺は今、親父と携帯を買いに街に来ている。

駅前にある携帯ショップで品定めをしていると親父が痺れを切らしたのか、とりあえず契約書にサインだけするから、後は勝手に買って帰って来い！
と帰ってしまった。

これで俺の帰りの手段はバスに決定してしまった。

携帯を見ていると色々な機種があるが、俺は使い慣れている前と同機種を色違いで購入した。

手続きも終わり帰ろうとしたが、まだ早い時間だったので少しづらつく事にした。

駅周辺は俺の実家とは違くなかなか栄えていて、人通りも多い。

いや、この辺意外では田んぼと海しかないから必然的に駅周辺に人が集まる施設が出来ていてると言った方が正解か。

小学生の頃は、買い物とかは駅前まで来なければ出来なかったしな！

あの頃はなかった有名なチェーン店も出来ている事はなかなか栄えてきた証拠だろう。

少し歩いていると、前から女の子二人組みが歩いてきた。

その子達は俺を見ているような感じで俺もその子達を見る。

何処かで会ったような…

あと少しですれ違うという所で

「……勝弥君？」

「…あっ！」

「やっぱし〜！久しぶりだね」

俺に声かけたのは小6の時のクラスメイトだった笠原 梨絵だった。

「…ああ、久しぶり」

確か、笠原は学級委員長だったな。
もう1人は………？知らないよな？！

と、笠原の隣にいる子を見ていると

「あつ！こっちは子は高校の同級生！」

笠原が説明すると隣に居る子が俺に向かって軽くお辞儀する。

俺も軽くお辞儀して帰ろうと挨拶したら

「今、…暇？」

笠原が聞いて来た。

「暇って言えば暇？…かな！」

もう携帯も買ったし早く帰っても、みんなはまだ仕事しているだ
ろっし。

「じゃあ、ちょっと付き合ってよ！」

と、近くの喫茶店に入っっていった。

一緒にいた笠原の友達は用があるからと言って帰って行った。そういえば彼女の名前聞いてなかったな。まあ、もう会うこともないしいいか！

笠原と二人で喫茶店に入りそれぞれ飲み物を注文した。

テーブルの上に置かれたのは特大パフェ？とコーヒー。

「……………」

「へへっ。一度、食べてみたかったんだ」

「……………それだけの量、食べれるの？」

「うん？一緒に食べよ」

俺はため息をつきながらコーヒーを口にした。

それから小学校時代の話しや今の俺が住んでいる所や学校の話しなんかしていた。

俺は、小学校の時は殆んど友美やヒロと居たので、同じクラスでも余り仲良かったヤツはいなかった。ただ学級委員だった笠原だけは何かと話しかけて来ていたのを思いだしていた。

「そういえばさあ、引越したの誰にも言っただけでしょ？
…私には言っただけだったなあ」

「悪い。…誰も俺の事なんか気にしてなかったみたいだからさあ！」

俺が笠原に答えたと同時に笠原が口を開き

「そんなことないよ!!!」

と、大きな声で立ち上がった。

周りの視線に気付いたのか顔を紅くして席に着いた。

「…ごめんなさい」

笠原は俯きながら答えたが、俺にはその姿が可愛いらしく見えて

「笠原、なんか変わったな？可愛いらしくなった感じかな？」

俺は思った通りの事を言っただけだったが、笠原はびっくりした感じで、俯きながら

「小学生の頃、勝弥君の事、す、好きだった…」

第44話 好き(前書き)

最近書いてて思うのですが、作品としての感想もあれば……

第44話 好き

「勝弥君の事、好きだったの」

過去形？だよな？？

今さらそんな事言われても俺には答えようがなく

「ああ、ありがとう！」

と、訳分からない返答をした。

いつのまにかジャンボパフェを完食していたらしく、とりあえず出ようかと喫茶店を出た。

お会計の時、びっくりするほどの値段だったが一応俺が払った。

笠原も払うと言ったが、俺も男だしね？少しくらいかつこつけないじゃない？

二人で歩いているが、さっきの笠原の告白のせい会話が続かない。

いくら小学生時代の話しだとしても、まだ3年しか経っていない。否、3年間という時間が長いのか短いのかは人それぞれ違う。3年間あれば小学生から中学生を過ぎて高校生になるので長いと感じる人もいれば、俺みたいに幼稚園から今までの10年間美代子を待ち続けていた事を考えれば短い方だろう。

と、美代子の事を考えていた。

あの告白から特に変わった様子も無く過ごしてきた。

美代子は俺の事を好きだと言ってくれた。
嬉しいけど俺が求めていた答えとは違う。

だけど美代子が思い出さない以上、ここで止まってもいいのだろうか？

これ以上でもこれ以下でもない。
この関係のまま先に進まないのもどうかと思う。

お互い好き同士なのは確認してあるのだから、過去に囚われず先に進んで、二人の中で新しい約束をしてもいいのではないのか。

そんな事を考えていると

「どうしたの？考えごと？」

笠原が俺を覗くように聞いてきた。

「あつ、悪い……」

「……私と一緒に居ても楽しくない？」

……楽しくない訳じゃないのだが……

「……い、や……」

「……私の家もすぐだから……」ここで……」

「……う、うん……」

「また……また、会ってくれる？」

笠原がどういう意味で言ったのか解らなかった。
それは友達としてだろうか？

俺の事を好きだと言ってくれたのは3年前の事で、今も想って
くれているのだろうか？

俺の事を想っていてくれたのは嬉しいが、俺は美代子の事が好き

なのは変わらない。

……………一生。

そんな事を考え、答えに困っている俺は下を向きながら歩いて
た。

ブツツツ

キイイツツツ

「か、勝弥君！……！」

第45話 メール（前書き）

美代子視点です。

第45話 メール

私は勝弥君が言った意味が解った。

勝弥君は私をあの時からずっと待っていてくれた。

貝殻を手に勝弥君の家に走りだし、勝弥君家が見えはじめた時、携帯が鳴った。

私は立ち止まり携帯を開くと友美ちゃんからだった。

「もしもし、美代ちゃん？」

「うん。どうしたの？」

「勝弥一緒にいる？」

「えっ？一緒じゃないよ？家じゃないの??」

友美ちゃんからの電話は勝弥君と連絡取れないということだった。勝弥君は今日、お父さんと携帯を買いに行っただけでまだ帰って来

ないという事だった。

携帯番号は変わってないのに電話しても繋がらないという。

「とりあえず、もうすぐ勝弥君家に着くから！」

と言つて携帯を切り勝弥君家に向かった。

勝弥君家に着くと、みんな揃つていて食事の準備をしていた。

ただ友美ちゃんが言った通り、勝弥君の姿が見られなかった。

「勝弥も高校生だしその内帰ってくるだろ！ほっとけよ！」

勝弥君のお父さんの一言で勝弥君を除いた食事が始まった。

食事中、勝弥君のお父さんは明日から仕事に行くと言つて、お母さんもいつまでもお父さん一人じゃ可哀想だから帰ると言い出した。

緑や絵美里も遠慮がちにじゃ、私達も！と結局全員で帰る事になった。

私は……………

せつかく解り始めて、これから勝弥君と……

思っていたので、もう少しここにいたい！とお母さんに言ったら

「頑張つてね」

と返事が帰ってきた。

何を頑張るのか解ったような解らなかつたような……

「うん」

とだけ返事した。

食事も終わり皆で話ししていると時間も遅くなってきた。

友美ちゃんとヒロ君は帰ると言って帰っていったが、勝弥君はまだ帰って来ない。

皆はもう寝ようとなったのでそれぞれ部屋に向かい、私も勝弥君の部屋に入った。

一人でベッドに横たわり今日の事を考えていた。

気づくのが遅かったかもしれないけど、私はやっと勝弥君の返事に答えられる。

私が勝弥君に返事すれば、この先ずっと一緒にいられる。

勝弥君に早く会って返事したい。

勝弥君はどんな顔するのか？

そんな事を考えていると携帯が鳴りディスプレイを見ると勝弥君からだった。

メールには

【しばらく帰れないからって、みんなに言っといてー！】

第46話 病院（前書き）

お待たせしました！…でも短くてすみません。

第46話 病院

静まり返った薄暗い廊下にある長イスに腰かけている。

隣には両手で顔を隠して俯いている女性がいた。

数時間前、俺は考えごとしながら下を向かいて歩いていた。

車が来ていた事も気付かずに……………

笠原が、俺を呼ぶ声と同時に俺の体を強く押した。

次に俺が見たときは、全身血だらけの笠原が道路に横たわっていた。

まだ…手術中のランプは消えない。

どうしてこんな事になったのだろうか？

どうして俺なんか庇ったのだろうか？

どつせなら俺が……

隣にいる笠原のお母さんには何も言えず……

ただ手術室を見つめていた。

しばらくすると隣にいた笠原のお母さんが

「……あの娘……あなたが居なくなっ
てからずいぶん寂しかった
わ……」

「良かったわよね？好きな人に会えたんだから……」

そう言つと、また両手で顔を塞いだ。

まるでそれは娘の死を確信したかのような発言だった。

「……まだ……まだ……大丈夫ですから。……彼女は……帰って来ます……」

俺が言つとお母さんはただ頷くだけで、また静かな廊下に沈黙が流れた。

しばらくすると手術中のランプが消え、担当医師が出てきて、笠原のお母さんが別部屋に呼ばれた。

笠原が救急車で病院に入ってからどのくらい経つたのだろうか？

笠原のお母さんも部屋から出て来ない。

しばらくすると笠原のお母さんが部屋から出てきて俺に向かって

「とりあえず……生きて……るって……」

とりあえず？

それがいいのか悪いのか予想は出きる。

今後の展開しだいでは……というこども。

俺は何も言うことも出来ず、ただ、彼女がいる部屋を見つめてい
るだけだった。

さっき自分が言った言葉通り、笠原は生きている。
とりあえず生きている。

それだけで俺がどれだけ救われたか。

俺は病院の外で美代子にしばらく帰れないとメールした。

第47話 空間（前書き）

まだまだ、まだまだ評価など受け付けています。

第47話 空間

笠原の手術も終わり彼女は病室を移された。

今、俺の目の前にいる彼女は身体中色々な器具に取り付けられている。

幸いな事に彼女の顔には傷がなく顔色も良さそうだった。

担当医師によると、彼女は生きてはいるが、いつ目を覚ますかはわからない状態だと言う。

目を覚ますのが明日なのかも知れないし、一生覚まさないかもしれないとも言つ。

仮に目を覚ましても、何かしら障害もありえる…と。

そんな医師の宣告であっても、俺にとって彼女が生きていてくれればそれで…いいと。

しばらく彼女の側にいるとお母さんが、とりあえず今日は帰って

休みなさい。目を覚ましたら連絡するから！と俺に言ってきたが、俺の為にこんな事にあつた彼女を置いて帰るわけにも行かず、立ち止まったままでいると、貴方が休んだ後で、私も休むから。とお母さんが言った。

その言葉の意味は彼女が目を覚ました時に誰も居なかつたら可哀想でしょ。と言っているようだった。

俺は笠原のお母さんの言葉にしたがい病室を後にした。

病院を出ると今日も暑い日になるように太陽が街を照らし始めていた。

家に着くとちょうど皆帰る所みたいだった。

何処行つてたんだ！とかの声も適当に流してとりあえずシャワーを浴び遅い朝食に取りかかった。

思えば昨日の朝から何も食べてなかつたので何時もの倍以上食べた。

あんなことがあつても食欲がある俺はどうかと思うが、腹が減っていたのは事実だった。

ふと見上げると目の前にいる美代子が俺を見ていた。

「…何？」

「食べ終わってからでいいよ！」

とだけ言い、俺が食事してる間ずっと黙っていた。

そういえば、何故美代子だけ残ったのか疑問だったが、食欲が満たされた俺に今度は睡魔が襲ってきた。しばらく休んでまた病院に行き、お母さんと変わらなければならぬ。

俺は部屋に入りベッドに倒れかかるように眠りに着いた。

俺はこの先彼女を……………

守っていかねばならぬ……………

深い眠りから目を覚ますと、夕日が照らし始めていて俺は病院へ向かおうと下に降りていった。

リビングにはヒロと友美と美代子がいて、俺が降りて行くとまずヒロが口を開いた。

「昨日、何があった？」

「……勝弥？」

「……ちょっと出てくる」

俺は何も答えられなかった。

すべて話してしまえば少しは楽になれたかもしれないが、笠原がまだ意識を取り戻していない以上は誰にも言いたくなかった。

笠原が意識を取り戻してもこの先どうすればいいのか？

まるで俺は出口が見えない空間に入り込んでしまったかのように

……

第48話 砂浜（前書き）

お待たせしました。ではどうぞ！

第48話 砂浜

あれから一週間が過ぎても笠原はまだ目を覚ましていなかった。

俺は朝から笠原の傍にいて、夕方お母さんが来ると家に帰る生活を送っていた。

そんな俺にヒロ達は何も言わない。

美代子も友美の手伝いで忙しいのか夕食の後はすぐ横になる。

あの事はまだ誰にも言っていない。

言った所でどうしようも無い状況だった。

明日も朝から笠原の病院に行かなければいけないので俺も夕食後、横になろうと部屋に入った。

親父達が帰ってから美代子は、ばあちゃんの部屋で寝ている。

昔話しをしているというが、ここ最近の俺の行動で、聞いても答えない俺の事を避けているのだろう。

笠原があんな状況なのでしばらくは美代子の事を考えたくない俺にとっては都合良かったのかもしれない。

ベッドに横たわり目を瞑ろうとしたら、美代子が部屋に入ってきた。

そして俺に話しがあったと言った。

そういえば前にも話しがあったと言ってから聞いて無かった事を思い出した俺は

「いいよ！何？」

と答えた。

すると美代子は

「ちよつと付き合って！」

と、部屋を出ていった。

美代子の後を追うように俺も部屋を出た。

もう夜だというのに、まだ夏は終わらないような暑さだった。

しかし、この街ではお盆が過ぎると観光客も少なくなり、何より毎晩浜辺で騒がしく行われる花火大会も行われなくなる。この街では夏も終わりを迎えようとしていた。

そんな波の音しか聞こえない静かな浜辺を美代子と歩いている。

海水浴場を過ぎ、波乗り場へ向かって歩いていると

「かつちゃん、こつちだよ」

と突然、美代子が走り出した。

この感覚は…

あの頃に戻ったような感じだった。

美代子が立ち止まり、俺もゆっくり美代子の傍まで行く。

そして美代子が持っていた貝殻を砂浜に置き

「ごめんなさい」

と頭を下げた。

俺は美代子が頭を下げた理由はなんとなく理解出来た。たぶん思い出したのだう。

だけど今の俺には……

すると続けて

「ここに来るまでは全然解らなかった。この間、昔かつちゃんと遊んだ所回って気付いた。……かつちゃんは……勝弥君は……ずっと……10年間も待っていてくれたんだよね？」

美代子の問いに俺は黙って頷く事しか出来なかった。

第49話 告白(前書き)

エンディング！

第49話 告白

あの日も今日のように暑い夏の日だった。

幼稚園から帰ると二人で波乗り場の浜辺まで来ていた。

お母さんが危ないから海は行っちゃダメよ！という言葉も守らずに。

ここは海水浴場とは違って海水が非常に綺麗だった。透き通る海水は下にある岩場もを写しだしている。

波打ち際で遊んでいると突然美代子が、幼稚園卒業したら引越すと言った。何処に行くかはわからない。もう会えないかも知れないと。

幼稚園園児の俺にはそれがどういう意味か解らなかった。

でも、もうこうやって遊べなくなるのは解っていたつもりだった。

でも美代子はあの時

「かつちゃんのおよめさんになるからまってね」と俺に言ってきた。

その時の俺は

「まってるから！みっちゃんがぼくのところにくるのまってるから！！」

と本気で信じていた。

そして

「およめさんになるには、ぼくたちけっこんしなければいけないんだよ？」

「けっこんってなに？」

「よくわからない」

あの頃は結婚の意味も解らなく、ただおよめさんにくると言った美代子はお母さんに結婚の意味を聞いてから返事すると約束した。

そのとき二人がいた波打ち際に二つの貝殻が寄り添うように流れ着いた。

二人で取ろうと手をかけた瞬間、一つの貝殻が海に拐われてしまった。

その時、僕らはその日二回目の約束した。

「一つ残されても、また帰ってくるよね？」

と。

僕らはあの暑い夏の日、みっちゃんがけっこんの意味が解ったら返事すると約束した。

そして、ずっと待っているとも。

その答えが10年間の時間を越えて帰ってくる。

「私と………私をお嫁さんにして下さい」

美代子は恥じらいながらそう答えた。

俺がずっと待ち続けた答えが帰ってきた。

あの約束した日から俺は忘れたことはなかった。

中学から美代子と同じ学校に通う事になって、あの日の約束が恥ずかしくて美代子に話しかけるのもままならなかった。

美代子はその容姿と優しさで人気者だったので俺とは釣り合えないとも思っていた。

俺と美代子を繋ぎ止めていたのは、あの日の約束だけだった。

約束がなければ俺は諦めていただろう。

しかし

「……………」
「ごめん」

勝弥は目に涙を溜めながら答えた。

第50話 尊(前編)

じせじせ、まひゃー。

第50話 噂

波の音しか聞こえない砂浜で二人は話す事を忘れたかのように言葉を発する事が出来ないでいる。

美代子からの告白を受けた勝弥は今は受ける事が出来なかった。

それは美代子より笠原を優先したからであった。

自分の為に怪我した彼女がまだ目を覚まさない。

自分だけ幸せにはなれない。

勝弥はそう思って美代子の事は断った。

だが、美代子が思い出してくれた事には嬉しく感じていた。

もう少し早く思い出してくれたら……

笠原があんな事にならなかつたら……

勝弥にはどうする事も出来なかった。

次の日

美代子は帰っていった。

いつものように笠原の病院に向かう。

お母さんと入れ替わりベッド横にあるパイプイスに腰かける。

そして彼女の腕をマッサージする。

彼女は目を覚まさないで寝たきりの状況であった為、筋肉が固まってしまうと先生に言われた。

さすがに足はマズイ？ので俺がいる昼間は腕を中心にマッサージしていた。

隣で眠る彼女を見てみると、小学生の頃を思い出す。

彼女は何かというと俺に話しかけてきた。

それが彼女の愛情表現だったのかもしれない。

まさか俺の事を好きだとは思わなかった。

今は？

今はどうなんだろうか？

何故？

何故俺を助けたのだろうか？

その答えは彼女が目を覚まさない限り解らない。

夕刻間近、笠原が眠る病室の戸を叩く音がした。

看護婦さんかな？と思い返事をすると、そこにはヒロと友美の姿があった。

「ようー」

ヒロが手を挙げて俺に声をかけた。

「……どうして解った？」

ここにヒロと友美の姿があるのが不思議でしよすがなかった。

すると友美が

「梨絵とは友達だよ？高校も同じだし。それに小さい街だからすぐ噂になるよ！」

友美が言うには笠原とは高校も同じで、小学校から一緒だから仲良くなった事と事故に合って意識が戻らない事もこの街の住民は殆んど知っていたらしい。

それに笠原の彼氏が毎日病院にいることも噂になっているみたいだった。

俺の様子がおかしくなった時期と笠原が事故に合った時期が一緒だったので、笠原のお母さんに聞いてここに来たと。

「そうか…黙ってて悪かった…」

素直に頭を下げた俺は二人に笠原との事を話した。
そして

美代子の事も…

すべて話し終わった時、ヒロが言った言葉は

「辛いな…」

一言だった。

その一言にすべて詰め込まれていた。

笠原の事も……

美代子の事も……

部屋に人が居ても、話ししなければ、笠原に取り付けてある器機の音しか聞こえない。

その時

笠原が……

第51話 母親（前書き）

美代子視点です。

第51話 母親

朝方帰ってきた勝弥君は朝食を食べるとすぐにベッドに入ってしまった。

私が後で話しがあるって言ったのに。

起こすのも悪いから私は一人で友美ちゃん達の手伝いに行った。皆は帰ってしまったから私一人だと仕事の量が多くて大変だった。

そんな事も知らない勝弥君はいつも朝早く何処かに行っちゃう。

聞いても何も言ってくれないし。

私はあの時から勝弥君の態度にイライラしていて、いつもおばあちゃんの部屋で寝ていた。

でも、あの事に気付いた私はちゃんと勝弥君に言わなければいけない。

やっと気付いたのだから。

そう思って勝弥君の部屋に向かった。

勝弥君に着いてきてもらって私達は今、波乗り場の砂浜にいる。

ここからスタートして止まっていた時間は、またここから進めなければいけない。

そう思ってここで返事した。

「私をお嫁さんにして下さい」

と。

幼稚園卒業したら引越すことはお母さんから言われてた。

いつもかつちゃんと遊んでいたから、もう遊べなくなるのはすごく悲しかった。

あの頃の私は何も考えないで、かつちゃんのお嫁さんにしてと言った。

かつちゃんはお嫁さんになるには結婚しなければいけないんだよと教えてくれた。

でも、結婚の意味がお互い解らなかつたから私はお母さんに聞いたら返事すると約束した。

そして、貝殻を持って、待ってるからとも。

家に帰った私はお母さんに結婚の事を聞いた。

お母さんはずっと一緒にいる事よ。と教えてくれたのを思いだした。

あの頃は、ずっと一緒にいたから今とあまり変わらないと思っていた。

だから、気に止めていなくて忘れていたのかも知れない。

中学に入ってからちゃんが私達がいる街に来た事を教えてくれたのがあったのは、私にすべて思い出してほしいという母親心だったのかなと思う。

私はこの時は幸せになれると思っていた。

だけど、勝弥君の返事は

「いふふ」

だった。

どうして？

答えが間違っているの？

私は勝弥君の考えている事が解らず、その場で泣き崩れてしまい、次の日帰って行った。

第52話 夏の終わり(前書き)

評価よろしく!

第52話 夏の終わり

病室で三人佇んでいると

笠原が

静かに

目を開けた

俺達を見て、必死に口を動かしている

何を言っているのか解らないが

俺は笠原の手を握り

「ありがとう」

と声をかけた。

助けてくれてありがとう

生きていてくれてありがとう

目を開けてくれてありがとう

すべての想いをこめて……

彼女は黙って頷いてくれた。

しばらくすると笠原のお母さんも来て、彼女と少し話している。話しといても彼女は器機に邪魔されて話することは出来ない。ので頷くだけだが、理解は出来るようだった。

先生が言うには、目を覚ましたが色々検査してみなければ解らないと言う。

しかし、彼女が目を覚めたのは事実であり、彼女が生きているのは紛れもない真実であった。

その後の……過程は関係ない。ただ、先にあるのは結果だけである。

受け取めるのは彼女自身で支えるのは俺。

それ以下でもそれ以上でもない。

この時の俺はそう考えていた。

笠原が目を覚ましてから1週間が過ぎた。

彼女の回復は思ったより早く、心配された傷害も見られなかった。

ただ、話しする時は軽い言語傷害が見られる。はっきりとは聞き取れない程度ではあるが、問題はない。

そんな彼女とは久しぶりに会ったあの日と同じように戯いもない話しをしているが、俺はまだ聞けないでいる。

どうして俺の事を助けてくれたのか……

彼女が取った行動からして俺は大体理解出来る。

もし、自分の大切な人が同じようになっていたら……

俺が美代子で、笠原が俺だったら……

俺も同じような行動を取っていただろう。

だから聞けないでいる。

もし、笠原がまだ俺の事好きだと言っても……

俺は彼女を支えたと心に決めている。

しかし、支える事と愛することは違う。

笠原の事を好きになれない俺が彼女を支えられるのだろうか？

俺は笠原を好きになれるのだろうか？

美代子以上に……

暑かった夏休みも終わりを向かえようとしていた。

第53話 傍に(前書き)

どほ、まじりゃー！

第53話 傍に

夏休みも終わりに近づいて来た頃、笠原は順調に回復していた。

事故当時、色々な器機に取り付けられ体は包帯だらけだったが、
今では病院の中庭まで出れる程回復している。

左足がまだ骨折中なので松葉づえを突かなければ歩けないが、それ意外では他に悪い所は見当たらなかった。

しかし、病院から退院の許可は降りない。

もうすぐ笠原も学校が始まるのでお母さんが先生の所に行き、退院の許可をもらってくると部屋を出ていった。

しばらくしてお母さんが部屋に戻ってきた。

すると俺に

「勝弥君……ちょっと……」

俺はお母さんと一緒に部屋を出て中庭にあるベンチに腰かけている。

「あの娘………事故当時のショックがあるらしく、私達がい
ない夜中は……発狂するみたい………」

笠原が目を覚ましてから俺は今まで通り、朝から夕方まで一緒にいるが、お母さんは仕事もある為、夕方少し顔を出して帰っていた。

だから夜は彼女1人だった。

「どういう事ですか？」

俺がお母さんに訪ねると

「先生が言っていたんだけど……まだ……1人での生活は無理みたい。……1人で外に出歩いたりは……」

言葉は悪いかもしれないが、もし彼女があの時死んでいたら、今彼女に起きている痛みも苦しみもなかったはずである。

俺はあの時誓ったはず

彼女を支えると

「俺……俺がいますよ。……彼女の傍に……」

俺は彼女のお母さんにそう答えた。

俺が彼女の支えになるのかは解らない。

彼女に相応しい人が他にいるかもしれない。

しかし今は俺しかない。

俺がいる昼間にはそんな所を見せないのだから。

病室に戻って俺は笠原に聞いた。

俺が傍にいていいのか？

俺はお前の支えになるのか？

お前は どうして俺を助けたのか？

笠原は少し考えてから重い口を開いた。

「私は……小学生の頃から勝弥君が好き。

それは……今も……変わらない。偶然会えたのかもしいけど、ずっと想っていた私からにとっては偶然じゃないと思う。神様が引き合わせてくれたと思いたい。……好きな人が……好きな人を助けたい気持ちは女も一緒。そして……好きな人とずっと一緒に居たいという気持ちはみんなあると思う。」

笠原は体を起こして

「私は勝弥君が好きです」

と、俺に告げた。

第54話 決断(前書き)

どうも。え〜最近評価欄が止まっております。作者は非常に悲しいです……!

第54話 決断

「私は勝弥君が好きです」

笠原が俺に告げたが俺は彼女の想いには答えられない。

俺は美代子が好きだから……

笠原が俺を想っていてくれる以上、俺は美代子を想っている。

だが笠原にとって俺が必要ならば俺は彼女の傍に居なければならぬ。

それが一生だとしても。

大抵の人間は生涯、何人も異性を好きになるかもしれないし、1人の人しか好きになれない人もいる。

笠原はどっちだろう？

美代子は？

俺は後者だ……

「俺は好きな人がいる。付き合っている訳ではないけど、結婚の約束はしている。でも、笠原が俺を必要としているなら俺はお前の傍にいる。……好きにはなれないと思うけど……」

俺は笠原にそう答えた。

笠原は好きになれないと言う俺の言葉がショックだったのか、俯いたまま何も喋らなかった。

沈黙の後、彼女は

「私は……夜が怖い。……目を瞑ると……あの日の事を思いだす。……あの日……貴方を突飛ばした後の……目の前に……ずっと……ずっと車が止まっているの………」

彼女はベッドの上で体を両腕で抱えながら震えている。

俺は笠原をそっと抱き締めた。

変な意味はない。

ただそうしてあげたかっただけである。

笠原の震えも納まり

「私の事、好きにさせてみる」

と、今まで見た事がないような笑顔で俺に告げた。

彼女を支える事は彼女と時間を共に過ごさなければならぬ。

自分のケジメをつける？

美代子との約束は？

答えは………？

笠原が事故に会ってからずっと考えていた事だった。

だから俺は笠原に

「お前が俺を必要としなくなるまで傍にいるよ」

と言った。

すると笠原は

「一生、必要にならないかもよ？」

と可愛らしく笑いながら答える。

しかしそれでも構わないと思っっている。

責任を取るとかではなく笠原が俺を必要とするならば答えなければいけない。

誰でも人から必要とされる事は非常に大事な事だから。

この決断が間違いだとか正しいだとかの答えはないし後悔もしない。

この先に待っているのは真実だけである。

第55話 学校（前書き）

お待たせしました。

第55話 学校

俺の決断から時は過ぎ、夏休みも終わり今日からまた学校が始まる。

あの時俺は、笠原が俺を必要としなくなるまで傍にいたと言った。

だから俺は、学校を転校した。

彼女と同じ学校に。

幸い、学力的には同じ位だったので、夏休みの終わりに行われた転入試験も無事合格している。

まあ、ヒロと友美が通っている学校だからレベルはたかがしれている。逆に言うと、頭が良かった笠原が何故この学校なのかが不思議なくらいだった。

新しい制服を身に纏い、ヒロに案内されて学校に行く。

笠原はまだ退院出来なideいた。

精神的には落ち着いてきたのだが、もう少し様子みたいと先生に

言われていた。

笠原のお母さんもどうせなら足の骨折が治るまで病院いたほうがいいと判断したみたいだった。

笠原のお母さんである昌子さんには旦那さんがいなく、一人で彼女を育てている。

当然、昌子さんは仕事をしていて彼女の傍には居られない事情がある。

だから俺が転校して彼女と同じ学校に行くと言った時は非常に喜んでくれた。

学校に着いて職員室に行き、新しい教室に案内された。

この学校は田舎のせいか俺の通っていた高校の半分ほどの生徒しかいなく、4クラスしかなかった。

そして地元の学生が大半な為、殆んどが知り合いな状況である。

こっちの小学校に通った俺にとってはクラスに何人か知っている顔も見える。

クラスはA組で友美と笠原と一緒にだった。

ヒロはC組で、どうして俺だけと叫びながら職員室に行こうとした所を友美に殴り止められたのはスルーしてほしい。

転校生が珍しいのか、休み時間になると俺の周りには人だかりが出来る。

小学三年生の時、同じクラスだったよ。

とか

どうして転校してきたの？

とか

彼氏いる？

とか、はっきり言ってウザイ。

否、ちょっとまって!？

彼氏ってなんだ？

俺はBLではないぞ!!

こんな感じで1日が終わるが、俺には全く興味ない。

クラスのヤツと特別に仲良くなるうとも思わないし、勉強を頑張ることもない。

まして彼女を作る事も。

彼氏は番外だが!?

じゃあ俺はこの学校に何しに来た?

笠原を支える為?

それだけ?

俺の心の奥深くにあるものは……………

美代子を……………

忘れる為……………？

第56話 不器用（前書き）

ども！二日酔いゲロゲロの作者です！

第56話 不器用

学校が終わるとそのまま笠原がいる病院へ向かう。

そして彼女に同じクラスだった事や、変なヤツ（BL）の事などを話す。

彼女は早く学校に行きたいと話すが、外出した時の彼女の辛さや、足が治ってない不自由さを考えると、学校へはまだ時間がかかるだろう。

昌子さんが学校の先生と話したら、学力的にも問題ないので、出席日数が足りなくても進級テストがあるから問題ないだろうと言われたらしい。

実際、笠原の事故は先生達も知っていたので、ある程度は認めてくれているみたいだった。

病院の面会時間も終わる頃、俺は家に帰る。

家まではバスで帰るのだが、最終が9時と都会では考えられない程早い。

乗り過ぐすとタクシーしか帰りの手段がないので俺は時間に間に合うように病院を後にする。

帰る。

と笠原に言ったら

「ねえ？いつになったら名前で呼んでくれるの？」

と、病室の戸に手をかけた俺に言ってくる。

美代子の時もこんな展開があつたな？

どうして女って名前で呼ばれたいの？

別にどっちでもいいじゃんって思う俺って変？

でも俺は

「梨絵………でいい？」

と、不思議なくらい自然に笠原の名前が出てきた。

美代子の時はなかなか言えなかったのに。

何故だろう？

すると梨絵は

「うん。よろしく！」

と可愛い笑顔で俺に言った。

俺は梨絵に何を求めているのか？

梨絵が美代子の変わりになるはずもないのに…

美代子を忘れる？

忘れる訳はない。

10年間も思ってきたのだから。

そんな事を考えていると

「……………ねえ？…勝弥君？」

「あつ！……………何？」

「この間……………この間言ってた子って……………」

梨絵は美代子の事を聞きたがっている。

だけど俺は美代子の事はこれ以上話したくなかった。

美代子との約束が叶うか叶わないかは解らないのだから。

梨絵の傍にいと約束したのだから。

だから俺は

「また明日！」

と、梨絵との会話を遮断して病室の戸を閉めた。

静かな病院の廊下は俺の足音しか聞こえない。

ふと立ち止まり梨絵の病室を見る。

俺はこれから何処に行くのか？

俺はこれから、この先…

俺は…

第57話 考え(前書き)

とまーどはまひびー

第57話 考え

病院から出た俺は駅前のバスターミナルに向かう。

思ったより考え事していた時間が長かったのか、最終バスは発車した後だった。

帰りの手段が無くなった俺にはタクシーで帰るか誰か迎えに来てもらわなければ帰る事は出来ない。

バスで30分かかる道をタクシーで帰るとなるとかなり痛い出費になるし、家にはばあちゃんしか居なく車の運転は出来ない。

俺は友美に電話して睦美さんに迎えに来てもらうよう頼んだ。

駅前で待つ事、約一時間。

睦美さんの車が見えた。

助手席には友美が見えるがヒロは見当たらない。

俺が友美に

「ヒロは？」

と聞くと、明日早いから寝るって！

と友美が答える。

ヒロは高校生漁師なので朝は早い。

本人はどう思っているか解らないが、俺達は哀れみの目で見
ていない。

「睦美さん、すみません」

睦美さんに軽く頭を下げながら車に乗り込む。

睦美さんが車を走らせると友美が

「今日、美代ちゃんからメールきたよ！」

と俺に言ってきた。

内容は教えないと。

それなら言う事ないじゃん？

気になるだけじゃん！

「1つだけ教えると………頑張るって！」

何を？

主語述語がねえぞ！

そんな友美の解らない話しを聞いていると家に着いた。

睦美さんにお礼を言って車から降りようとしたら

「勝弥君の思った通りにしなさい！」

と睦美さんに言われた。

この時の睦美さんと友美の言葉が後の俺の気持ちを揺るがした。

家に帰りおばあちゃんが作ってくれてあった夕飯を食べる。

朝早く学校に行き、帰りは面会時間終了まで病院にいる生活を送

っている俺はベッドに入るとすぐに眠りにつく。

高校入学した後から美代子と昔みたいに仲良くなった生活を送っていた俺にとって、今は苦痛でしかない。

逃げだしたい……？

何から……？

すべて……？

逃げたらどうなる？

誰も知らない街で静かに暮らす？

梨絵との約束は？

美代子との約束は？

美代子への想いは？

すべて考えたくなかった。

何も考えたくなかった。

番外編 友美&a m p・ヒロ(前書き)

リクエストあった？友美編です。他にもありましたらどうぞ！

番外編 友美 & a m p ・ ヒロ

隣で眠るヒロの朝は早い。

朝？の2時には家を出なければならぬ。

ならないのではなく、お父さんに叩き起こされ引きずられて行くだけだ。

そんな出来事を見てから私はまた眠りにつく。

私は小学生の頃、勝弥が好きだった。

勝弥が引越すと聞いた時に私は想いを伝えた。

この時の勝弥は美代ちゃんの事しか頭に無く、他の女の子や私の事なんか恋愛対象ではなかった。

それでもいいと思っていた。

会えなくなるのだから想いを伝えたい。

それしか考えていなかった。

解っていた事とは言え、やっぱり振られるのは辛かった。

一晩中泣いていて、勝弥が引越す当日も、私は家から出れなかった。

お父さんやお母さんは呆れて何も言わず勝弥君達の見送り行った。

一人部屋にいたら、突然ヒロが入ってきた。

今思うと、女の子の部屋に勝手に入ってくるのはどうかと思うけど、この頃の私達は毎日のようにお互いの部屋に遊びに行っていたからヒロも当然のように勝手に入ってきた。

当然部屋に入って来たヒロは、私の腕を掴み

「後悔するから言うけど、俺はお前が好きだ。お前も後悔したくないら行くぞ！」

と走り出した。

振られたばっかの女の子に告白するのมどうかと思うけど、後でヒロに聞いたらヒロも焦っててつい言っちゃた！んだって。

ヒロに引きずられて何とか間に合って、勝弥と会う事が出来た。

勝弥は最後にヒロと仲良くしろよ！と、この後の事を見透かしているようだった。

それからヒロと付き合いようになつた。

付き合いと言っても、小学生の頃は勝弥含めて三人で遊んでいたのが、勝弥が居なくなつたから必然的に二人きりになることの方が多かつただけだけだ。

私がハッキリとヒロに言ったのは中学一年の冬。

ずっと待っていてくれたヒロに好きと言えた。

勝弥が居なくなつて寂しい想いは感じられなかつたのはいつもヒロが居てくれたから。

ヒロと付き合いようになつてから大変だったのはヒロだった。

お母さんは今さら？みたいな感じだったけどお父さんは…

あのお父さんは、ヒロの家に行き、こいつ貰って行くぞ！

とヒロの家族に宣言してヒロを家に連れてきた。

ヒロのお父さんは私のお父さんの後輩らしく頭が上がらないみたいだった。

ヒロはお父さん達の隣の部屋を与えられて、朝早くからお父さんの手伝いをさせられていた。

学校では居眠りばかりするヒロを見ていられなくなって私がお父さんに言つと、じゃあ別れる！と言つ。

その事をヒロに言つと

「別にいいじゃん！認めてくれているんだろ？俺達のこと」

と嬉しそうに言つ。

ヒロがいいならいいけど、付き合つようになつてから一緒にいる時間が少なくなっているって感じているのは私だけ？

私はお母さんに相談して、せめて部屋だけでも一緒にしてくれるように頼んだ。

お父さんはお母さんの言う事は聞くから、お父さんも渋々認めてくれた。

ただその時お父さんがヒロを物凄く睨んでいたのはヒロしか知らない。

こうして私とヒロは少しだけ一緒に居られる時間を手に入れた。

第58話 笑い(前書き)

読みづらいから前書きじゃなく後書きに書けと言つ声は無視して、ではどつぞー！！

第58話 笑い

何も考えたくなかった。

逃げ出したかった。

でも、高校生の俺は1人では生きていけない。

生活する術を知らない俺は現実を受け入れる事ではかならない。

深い眠りだった。

朝起きて一番に思った。

精神的にも肉体的にも疲れが溜まっていたのだろう。

あの日以来久しく笑っていないように感じるが、今日の寝覚めは非常に良かった。

今日は笑えますように。

朝ヒロ達と学校に行く為、バスに乗る。

大きい高校と違って高校専用のバスではなく、一般客と同じバスに乗る。

が大抵席は決まっていて、一年生は席に座れないのが暗黙の了解だった。

学校に着くと、廊下でヒロと別れる。

友美とは同じクラスなので一緒に教室まで行くとクラスのヤツ等が俺達を見る。

否、俺を見ている。

まだ転校生が珍しいのか？

と思っていると1人の女の子が近づいてきた。

俺に

「梨絵とはどういう関係？」

と聞いてくる。

どういつ関係が聞かれても困る。

彼女ではないし、ただの同級生でもない……と思う。
返答に困っていると

「小学校の同級生だよ！」

と友美が答えてくれた。

すると

「貴方が彼氏だつて噂だけど？」

その女の子がまだ俺に言い寄ってくる。

正直めんどくさい。

どうして人の恋愛事情に首を突っ込みたがるのか俺には解らない。

深く溜め息を突いた俺が辺りを見回すと

男共が睨み付けているのが見える。

なぜ？

その答えは友美が

(梨絵は中学からすごくモテていたんだけど、男嫌いで有名だつ

だから男子とはあまり話さなかったんだよ。私といたヒロは例外だけど。たぶん嫉妬じゃない？)

アイコンタクトで俺に伝えた。

はあゝ

また1つ大きな溜め息を突いた俺は梨絵がなぜモテるのか解らなかった。

確かに可愛いとは思うけど、他にも可愛い子は要るし前の高校で一番人気だった美代子程ではないと思う。

「梨絵の……彼氏では無いよ！」

俺はハッキリとその子に答える。

梨絵が俺の事を好きだと言ってくれても……

「ふん」

言い寄ってきた女の子は頷くように俺達の視界から外れ自分の席に着いた。

「梨絵は優しいから男女問わず人気があるよ」

友美が俺に言う。

なんか俺の周りいる女の子はそんな子ばかりだな〜と思いつつ、ここに俺と同じ平凡な子がいることが嬉しく思い、友美に握手を求めた。

「えっ？な、何？？」

と言いつつ手を出す友美と握手すると俺は久しぶりに大きく笑った。

友美の訳解らない顔を見ていると更に笑えた。

教室全体に響くかのように。

第59話 退院（前書き）

ども！評価はどうした？

第59話 退院

残暑厳しかった9月も終わりを迎え、暑さと寒さが入り交じる秋を迎えようとしていた。

あの事故から1ヶ月立つ。

今日は梨絵の退院の日だった。

これから約2週間自宅で経過を見て、学校への通学許可が降りる。

入院していた時見せていた苦しみは無くなっていたみたいだが、またいつ起こるかは解らないので、外出などは一緒にと病院の先生からも昌子さんからも言われていた。

俺にとっては全く異存はない。

梨絵の傍にいる為に今の俺の存在価値があると思っている。

自惚れではなく、人として、男として、友達として当然だと考えていた。

今、梨絵は俺と一緒に梨絵の家に向かう為、駅前を歩いていた。

足の骨折も治り、久しぶりに太陽の光を身体で受け止める梨絵は

「まだ、暑いね」

幸せそうだった。

この分だったら、外出も問題なさそうかなと感じていたが、車への恐怖感は梨絵しか解らない。

今は俺の腕に絡み付く格好で歩いているからいいが、もし俺が居なかったら？

と考えると……………

そんな俺に梨絵は

「また考えごと？」

ハッ！

と、視線を梨絵に移すと同時にあの日の事を思い出す。
あの日も俺が考えごとをしていたせいで……………

「うめん」

梨絵に素直に謝った俺は

「何に？何に対して謝ってるの？」

そう梨絵が聞いてきた。

何に？

何にだろっ？

あの事故のこと？

一緒に居るのに考えごととしていたこと？

梨絵の気持ちに対してのこと？

すべてだった。

だから俺は

「多分……梨絵が考んがえていることすべてだと……思う」

「……やっぱりね！」

「ごめん」

「クスツ、また謝らないでよ」

「……………」

「行く」

と、また俺の腕を絡ませてきた。

しかし、梨絵は豊です。

美代子とは比べ物にならないほど……………

しばらく歩くと梨絵の家に着く。

家には昌子さんが退院祝いなのか張り切って料理していた。

「勝弥君も食べて行きなさい」

昌子さんに言われて俺は梨絵の家に入った。

母娘の二人で棲む家は綺麗に整頓され、カラフルなカーテンやヨーロッパ製の家具の配置など、殆んど独り暮らしで実用性重視の俺にとっては新鮮だった。

「早く座って」

梨絵が立ち尽くす俺の手を取って席に案内する。

そしてお母さんの合図で梨絵の退院祝いが始まった。

第60話 理由（前書き）

久しぶりに美代子視点です。

第60話 理由

あの日…

あの告白した日から……

勝弥君とは会っていない。

帰ってからお母さんの

「どうしたの？」という質問にはずっと答えられなかった。

家にずっと引き込まっていたらいつの間にか夏休みも終わろうと
していた。

何回か緑や淳が来たけど、私には物足りなかった。

勝弥君がいないだけで……

冴えない気分のままいつものように淳の家に行く。

勝弥君と会ったらどんな顔をして接すればいいのか解らないし会
話も出来るか解らなかった。

淳の家に着くとそこには緑しかなかった。

淳が

「昨日話しようと思ったんだけど……勝弥…転校したから…」

私が

「えっ!？」

と聞き返すと

「詳しいことは帰ったら教える」

淳が言った言葉の理解が出来ないまま私達は学校へ向かった。

LHRでも担任の先生から

「立川は転校した」と簡単に説明しただけだった。

中学とは違って高校に入ると辞めちゃう子も多くいる為、先生達もクラスの子もあまり感心がなかった。

それだけ高校のクラスがまとまっていなとも言っけど。

私は勝弥君と一緒に高校生活を歩みたかったからこの高校を選んだのに…

哀しみと怒りが交じっているように感じた。

学校が終わって三人で淳の家に向かう。

淳から勝弥君が転校した理由を聞く為に。

緑は淳から聞いていたらしいが私には教えてくれなかった。

親友に隠し事するってどういうこと？と思っていたら、学校が始まってから私に教えてくれと勝弥君が淳に口止めしていたと。

それにあの頃の私は何も考えられなかったし、見ていられなかったとも。

「何から話すか？」

淳が考えながら私に言う。

私はすべて知りたかった
だから

「全部。…淳が知っている勝弥君のことすべて！」

と言った。

淳は勝弥君から聞いた事を思い出すかのように、ゆっくり口を開いた。

「あの日…勝弥が携帯を買いに行った日、途中で小学校時代のクラスメイトに会ったらしい。…そこでしばらくその子と話したりしていたら、勝弥が車に轢かれそうになった。だけどその子が助けしてくれたお陰で勝弥は無傷に済んだらしいが、その子は逆に怪我をして、後遺症もある…と。だからその子の傍にいる為に転校するって……こんな感じが理由」

私は理由を聞いて愕然とした。

どんな理由が有っても勝弥君は私の傍にいてほしい。
勝弥君がどんな答えを出しても私は勝弥の傍にいる。

私は勝弥の傍にいる自分しか見えなかった。

第61話 重い

勝弥君の傍にいたい。

私は自分が出した決断に後悔しないし、逆に今行動しなかったら後で後悔すると思う。

だから私はお母さんに言った。

「勝弥君の傍にいたい」と。

お母さんは自分の好きなようにしなさい！と言ってきて、勝弥君のお父さんである晃司さんには言っというてあげるとも言ってくれた。

あの決断した日から時間がかかったけど、きちんと決定したので、緑達に報告した。

緑達も解っていたのか頑張ってたね！と言ってくれたのが嬉しかった。

淳の

「女は怖いな！」と言っ言葉は無視して。

緑達に報告した後で友美ちゃんにもメールした。

淳から聞いた事を友美ちゃんが付け加えてくれた。

どうやらその子は友美ちゃんの友達らしく、友美ちゃん的には複雑な心境だけど小さい頃から一緒だった私を応援してくれるって。

私的には強力な味方が着いてくれたから不安はなかった。

ただあるとすれば勝弥君の気持ちの変化だけだった。

一緒にいる時間が長ければ長い程、ただの情が愛情に変わる恐れもある。

その時私はどうしたらいいのか？

これだけが私の不安要素だった。

それでも……

私の答えは決まっている。

勝弥君がその子と……なっても……

私は諦める事はないし、離れるつもりもない。

未練がましいと言われても……

私の想いは変わらない。

私は勝弥君が好き。

私の傍に勝弥君がいない事は考えられない。

私の中は勝弥君で埋めつけられている。

私の勝弥君に対する想いは誰よりも重い。

勝弥君もそう思っていると信じたい。

そんな事を考えながら机の荷物を片付けた。

私は少ない荷物を持って学校を出た。

少ししかいなかったけど色々な事があった学校だった。

入学して勝弥君と仲良くなって、勝弥君の家に泊まりに行ったり、みんなで遊びに行ったり。

悲しい事もあったけど、楽しかった思い出も多かった。

これからも……

これからは……

辛い道のりかもしれないけど勝弥君の傍で笑っていたい。

どんなことがあっても……

第62話 仕草（前書き）

勝弥視点に戻ります。

第62話 仕草

梨絵の家で行われた退院祝いで不覚にも酔っぱらってしまった。

昌子さんが

「お酒飲めるでしょ？」と薦めてきたのを断るわけにもいかなかった。

しかし、この街の大人は何故高校生に酒を薦めるのか？

しかも皆強いし。

中学から友和さんに鍛えられている俺とヒロはある程度というか、そこら辺の高校生よりかは強いと思うが、大人達はそれ以上だった。

否、俺の周りの大人だけかもしれないが。

昌子さんも友和さんに張り合えるぐらいだと思っ。

そして俺は今、梨絵の家で夢の世界に飛び立っている。

飲み過ぎて気持ち悪いのではなく、なんか気分がいい感じだった。

次の日の朝、夢の世界から帰ってきた俺は梨絵と街を歩いている。

梨絵のリハビリを兼ねて。

ショッピングモールで色々な店を回っていたら平日な為か人も少ないので、俺達はかなり目立っていた。

ただせさえ、田舎なので殆んどが誰かの知り合いという状況は俺達の噂に拍車をかける。

梨絵の知り合いも多く、「元気になって良かったね!」と、さっきから声かけられまくっていた。

お陰で全然先に進めないが…。

そして梨絵のお気に入りのカフェに着いた。

梨絵は軽くマスターに挨拶して指定された席に着く。

「何にする?」

梨絵がメニューを俺に見せながら聞いてきた。

そういえば、あの事故の日、梨絵はジャンボパヘエを完食していたのを思い出す。

とりあえず俺は

「コーヒーでいい」

梨絵に伝えると、梨絵はマスターに

「コーヒーといつもの」

いつもの？

それで伝わるのか??

そんな不安そうな俺に

「大丈夫だよ。ここに来たら頼むのは決まっているから！」

梨絵が笑顔で俺に言う。

そして

俺の予想は当たったのか

テーブルの上には

コーヒーとジャンボパヘエ。

この細い身体の何処に入るのか不思議な程、完食していく梨絵を見ていると、食べている所見ないですよ！と頬を赤して口元を隠すよにした。

梨絵からしたらなんでもない仕草だろうが、男から見ると可愛いらしく見えた。

こうして梨絵との時間が増えていくと、美代子の事を忘れていくのだろうか？

可愛いと思った梨絵に対して恋が生まれてくるのか？

俺はどうしたら、梨絵と美代子どちらを選んだら幸せになれるのか？

俺は幸せになる資格はあるのか？

答えは見つからない。

第63話 転校生(前書き)

祝総アクセス2万人、PV10万突破！ ありがとうございます。

第63話 転校生

朝、目が覚めカーテンを明けると今日も残暑厳しくなるような日射しが部屋を照らしている。

梨絵が退院した日から3日間、梨絵に付き合っていたので学校へは行っていなかった。

さすがに単位もヤバイので今日から学校へ行くと梨絵に伝えてあった。

梨絵が解つたとは言ったものの淋しそうな顔で俺を見つめた。

「学校終わったら直ぐに来るから」と梨絵の頭を撫でながら言ったら今度は嬉しそうな顔をした。

ヒロ達と学校へ向かい教室に入ると先に来ていた生徒達からざわめきが起きている。

同じクラスではあるが、まだ友達と呼べる程仲いいヤツがない俺に話しかけてくる人はいない。

すると友美が誰かから仕入れた情報を俺に教えてくれた。

「このクラスに転校生がくるらしいって！」

また？

俺がこのクラスに入ってまだ数日しかたってないよ？

そんな疑問に友美が教えてくれた。

このクラスでは入学してすぐに数名辞めた人がいるので、他のクラスより人数が少ないらしい。

なんとなく納得した俺は自分の席に着いたが、先に転校してきた俺より、皆と仲良くなったら立場ないな！などと少し不安だった。クラスのヤツと俺から仲良くなるうとは思っていなかったが、まだ2年半も通わないといけない立場だと、少なからず友達がいた方が学校生活も楽しいかなと考えていた。

とりあえず転校生も1人で不安だろうから、誰も声かけなかったら俺から声をかけようと思っていた。

チャイムが鳴りHRが始まる。

前方の扉が開かれ担任が入って来た。

そして

「えゝまたまた、転校生を紹介する。男子は喜べゝ今度は女の子だ！」

「おゝゝゝ！」

と男共のかけ声と共に転校生が入ってくる。

女の子だと声かけずらいな……

と思いながら入ってくる女の子を見ると

そこには久しぶりに見る

美代子が立っていた………

第64話 狭間（前書き）

おはようございます。ではさしつかえなく...

第64話 狭間

黒板の前に立っている彼女は紛れもなく美代子だった。

久しぶりに見た美代子は髪を少し切っていたが、他は何処も変わらないままの姿で立っている。

周りを見渡すと男共は目がハートになっているし、女共は尊敬の眼差しで見ている。

無理もない。

美代子はへたなアイドルより可愛いと思うし、実際スカウトもよくされる程のレベルだ。

そんな彼女に自己紹介を担任が託す。

「愛川美代子です。色々あってこの街に来ました。幼稚園までこの街に居たので知っている人もいるかなと思います。よろしくお願ひします。」

軽く頭を下げた美代子は廊下側の席に着く俺を見て微笑んだ。

その微笑みに勘違いした男共が

「お〜…俺に……………」

そんな勘違い野郎はスルーして美代子は窓際に用意された席に着いた。

何故ここに？

考えるまでもない。

美代子はたぶん……………

俺の為……………？

休み時間にも確認しようと考えていた。

甘かった……………

今は一時間目が終わった休憩時間だが、終わると同時に美代子の周りには人だかりが出来ている。

男女の比率は半分ぐらいだが、人ばかりで美代子の姿が確認出来ない程である。

教室の入り口である扉の前と廊下の窓際にも美代子を一目見ようと人ばかり。

同学年の殆んどがこのクラスに集まっている程だった。

俺が転校してきた時はこんな事無かったよな？

今だにクラスに友達がない俺は美代子に軽い？嫉妬を覚える。

クラスのヤツらと仲良くなりたいたい訳でもないが……

休み時間の度に美代子は身動き出来ないでいたので、昼休みにでも……と考えていた俺は美代子にメールした。

【色々聞きたい事があるから昼休み食堂で】

と。

質問攻めにあっている美代子からメールが帰ってきたのは授業が始まってすぐだった。

【解った】

俺と一緒にメールでは話したくないのか返信はシンプルに一言だった。

そして午前中の授業は美代子の事を考えてばかりいて殆んど身に入っていない。

多分、美代子が転校してきた理由は俺と一緒にいたい為…だと思
う。

自惚れではない。

美代子は俺の事を好きだと言った。

約束も思い出した。

だから美代子はここに来たのだろう。

嬉しい気持ち強いが、今の俺は美代子の気持ちに答えることは
出来ない。

……………梨絵との約束があるから。

第65話 秘密(前書き)

ラブノベの親元さんである小説家になろう！サイトで全体の38位にランクインされました。みなさまのお陰でございます。まだまだ評価をお待ちしています。

第65話 秘密

昼休みになり俺は食堂に向かう。

教室を出る時、上級生も美代子を見に来ていて抜け出すのが大変だったが、友美が連れて行くと言ってくれたので、ヒロと先に向かった。

ヒロと四人掛けの席に座り美代子達を待つ。

ヒロは友美が作ってくる弁当があるので俺だけ食券を買い、カレーライスを頼む。

トレーに載せたカレーを運んでいると、さっきまで友達同士話して騒がしかった食堂が一瞬で静かになり、略全員食堂の扉に視線が動いた。

その視線の先には美代子と友美がいて、ヒロが友美に声を掛け席に案内していた。

俺もトレーを持ちながら席に着く。

どうやら美代子は弁当を持ってきたらしく、3つの弁当とカレーライスがテーブルに置かれていた。

ヒロと友美は美代子の事を知っているので、別に聞かれても困ら

なかったから食べながら色々聞こうと思っていた。

否、この状況で美代子と二人きりになるのは、俺にとってかなりの覚悟がいる。

さつきから視線ではなく殺気を感じる。

美代子と二人きりだったら間違いなく俺に明日はない。

カレーを食べながら美代子に話しをしようと思ったたらある疑問に気付いた。

何故？

美代子の弁当は友美達と同じオカズなの？

というか、全部一緒？

三人の弁当をキョロキョロ見渡し不思議がっていると

「このお弁当、友美ちゃんが作ってくれたの」
美代子が俺に言ってきた。

否、何と無く解っていたが突っ込みたい所はそこではない。

確か、俺が睦美さんに迎えに来てもらった日、友美は美代子から

メールが来たと言っていた。その日に転校して来るのを知っていたのだろう。

俺に内緒だと言っていたし。

しかし美代子は勘違いしている。

否、ヒロもだ。

友美が作っていると言っている弁当は、実は睦美さんが作っている。

はっきり言って友美は料理が出来ない。

否、出来ない訳ではないが………食べられた物ではない。

中一の夏休みに里帰りした俺に、最近料理覚えたから食べてみて！と手渡されたオムライス………

今、思い出しても………

塩と砂糖を間違えたとかの可愛いレベルではなかった。

何に何を足したらこの味になるの？

薬の開発でもするの？

あの時の俺は、友美を振ったから殺されるのだろうと本気で思っ

ていた。

それ以来料理はしていない筈だ。

その前に、3日間寝込んだ俺を見ている、睦美さんから止められていると信じたい。

友美のは料理ではなく科学実験なのだから………

ヒロにも言えない友美の秘密である。

第66話 家（前書き）

どうも。評価、感想、指摘お待ちしております。

第66話 家

友美……否、睦美さんが作ってくれた弁当を食べながらヒロが俺に

「ほらっ！」

と言って肘でつつく。

美代子と何か話ししろという意味だろうが、今美代子は友美と仲良くお話中の為、話しかけることは出来ない。

男二人黙々と食べていると友美が気付いたのか

「あっ！ごめんごめん」

と視線を俺に向ける。

美代子も友美に習って俺を見上げ俺の言葉を待っているが、恥ずかしながら俺は全員に注目されている中では話す事は出来ない。

「と、とりあえず、む…友美が作ってくれた弁当食べちゃえば？」

睦美さんが……と言いかけたとき、友美が俺をおもいきり睨んだ。

やはり友美ではなく睦美さんが作っているのだろう。

昼食も食べ終わり午後の授業まで時間がある為、中庭に移動した。食堂から感じていた視線は何処に行っても感じるもので外に出ようとヒロが言い出したのだった。

本格的な秋となった現在では、校庭に埋められている樹木の葉が枯れはじめ冬支度を始めている。

グラウンドの横に置いてあるベンチに美代子と二人で腰かける。

ヒロと友美は少し離れた所に立っている。

「どうしてここに来た？」

昼休みの時間もあまり無いので率直に聞いて見た。

転校して来た理由は解ってはいるつもりだが、美代子の口から聞きたかった。

「…わからない？」

俺を睨むような悲しい表情で美代子が聞いてきた。

「いや…わかる…と思うけど…」

「じゃあ、いいじゃん 多分、勝弥君が思っているとおりだよ」

「！」

解っているけど一応聞きたかったんだよ！

とは、口に出せずもう一つ気になっている事を聞いた。

「何処に住んでるの？」

美代子が引越してから美代子の家は空き家になっているはず。売りに出したとも昔聞いた事あるから、今こっちは住む所がないはずだ。

それにこの前来た時は、お母さんである実可子さんは友美の家に泊まっている。

美代子、一人で来たということはアパートでも借りたのか？

だいたい寂しがりやの美代子が一人暮らしは難しいが…

など、考えていると

「勝弥君の家！」

「……えっ?!」

その時、昼休みが終わるチャイムが鳴った。

第67話 OK? (前書き)

え、今月に入ってから評価がありません!!!

第67話 OK？

昼にカレーライスを食べた俺は、現在胸焼けして気持ち悪く午後からの授業は寝て過ごす事に決めました。

サボっても良いのだが梨絵の退院の時、数日休んでしまったので、しかたなく授業は受けます…一応ですが。

胸焼けの原因がカレーライスではなく、昼休み終わりに美代子が言った言葉が原因なのは解っている。

実可子さんが俺の家に住むのをよく許可したものだ。

まあ、何回か美代子と一緒に寝たこともあるけど… 紳士な俺は付き合っていない子に手は出さないよ？ あっ？

でも、結婚の約束しているから手を出してもOKか？

否、約束を守れるか解らない状況で… になったらどうするのだ？

などと健全な高校男子の思考としては当たり前前の事を考えている。

そうして午後の授業が終わり放課後となる。

帰り際、美代子はまた一緒に帰ろうなどと大勢の人に捕まっている。

俺の家に住むのだろうか帰り道解るよな？

俺はこれから梨絵の所に行かなければならないので一緒に帰る事は出来ない。

そんな俺の心配を余所に友美が

「私達が一緒に帰るから」

と言ってくれた。

「ああ、じゃあ頼む」

友美とヒロに任せて俺は学校を出る。

梨絵の家に向かって歩いてしていると美代子からメールが来た。

【何時頃帰ってくるの？】

メールを見て驚いたが美代子はすべて知っているようだった。

俺が梨絵に会いに行くことを。

俺と美代子は付き合っていないがお互いを想っていることは確認してある。

女として他の女に会いに行く気持ちはどうなんだろう？

逆に考えると美代子が俺以外の男に会いに行く事は、何かしらの事情が合っても俺は複雑な気持ちになる。

美代子も同じだろうか……？

【何時か解らないけど、最終バスが出るまでには帰る】

と美代子にメールした。

梨絵に会ってからだいたい決まる。

体調や機嫌良さそうだったら早く帰れるし、そうでなかったらずっと傍にいてあげなければならぬ。

それが梨絵の願いでもあるし、俺との約束でもある。

でも、梨絵には悪いが今日は早く帰りたい。

美代子と久しぶりに会って気持ちが高ぶっている。

あの告白した日以来会ったのだから色々話したいことがある。

これから一緒に住むから今日でなくても、時間はあるかもしれないが、時間が過ぎれば過ぎる程、話しずらくなることもある。

今日は梨絵の機嫌が良かったら早く帰って美代子にすべて話そうと考えていた。

第68話 キヤラ変？（前書き）

ちょっと短めです。

第68話 キヤラ変？

梨絵には悪いが今日は早く帰りたい。

そんな気持ちで梨絵の前で出てしまったのだろうか？

梨絵の家に着きチャイムを鳴らす。

昌子さんは仕事中の為、家には梨絵しかいない。

「はい」

と、掛け声と共に階段から降りてくる音が聞こえた。
玄関の扉が開かれ梨絵が顔を出す。

「……いらっしやい」

そこには不機嫌そうな梨絵がいた。

「ど、どうした？」

こんな梨絵を見た事もない俺は…何かしたのか？事故の事でも…？
などど考えていた。

「とりあえず上がったら？」

「あつ、はい…」

梨絵に託されるままリビングに上がった。

ソファで梨絵と向き合うように座ったはいいが、梨絵は腕組み
をして俺を睨んでいる。

こんなキャラだっけ？

「…で？」

「はっ？」

「だから…何時も言ってくれていたでしょ？今日、学校であった
事とか…」

「あ…特に別にないかな？」

美代子の事は言わなくていいよな？

梨絵の事だから言ったら機嫌悪くなるだろうから。

「…ふうん。……転校生が来たんでしょ？」

「えっ？」

「友達からメール来たし。何やら勝弥君とご飯食べていたらしいつてね！」

顔は笑っているけど貧乏揺すりしている足が強くなっているのはなぜ？

「あ……………」

どうしよう？友達からのメールで全て知っているのか？

否、まだ美代子の事は友美とヒロしか知らないはず。

うん？

何故梨絵に隠す必要があるのか？

確かに梨絵は俺に好きだと言ってくれた。

だけど俺は美代子の事を好きだと言っている。

梨絵の事は好きになれないかもとも。

でも……………

梨絵を悲しませる事は出来ない。

「ちょっと……知り合いだったから……」

「……ふん」

「そ、それより、今日は体調どうなんだよ？」

「体調は……いいけどね！」

……どうしたんだよ？

梨絵はそんなツンキャラじゃないよ？

そんな事は言えないが、この重い空気をなんとか変えられないか
考えていた。
すると

「私も、明日から学校行くから！」

と梨絵が俺に伝えた。

第69話 帰宅（前書き）

どは、アハハハ！

第69話 帰宅

あの重い空気をどうにかしてくれと思っていたら、運よく昌子さんが帰ってきた。

その後、梨絵が昌子さんに明日から学校に行くと言い出したが、まだ病院の許可が降りないからダメと言う昌子さんと言い合っていたが、梨絵の勝利に終わった。

あの音無しい子がこんなに変わるものかと思っていたら、昌子さんの

「恋する子は強いね」

の一言で納得してしまった。

そういえば、美代子も中学の時に比べてずいぶん変わったものだと思っていた。

俺の事を避けていたかと思えば高校に入った途端に積極的になっ
たし。

こうして昌子さんに助けられた？俺は何とか家に帰ることが出来

た。

しかし、明日から梨絵が学校に行くとなると、朝早く家を出て向かえに行かなければならない。

梨絵はまだ1人では外出が出来ないのだから。

最終より一本早いバスに乗ることが出来て、家に向かう。

最近、淳と連絡取っていなかったので、美代子の事もあるし色々聞いてみようというメールした。

直ぐに返信が来て、淳の彼女である緑から美代子をよろしくとも付け加えてあった。

やはり美代子は俺との関係が続ける為だけに転校してきたらしい。

まだ高校1年生で親元を離れて暮らすのは勇気があるだろう。

確かに好きな人と一緒にいたい気持ちは男でも女でも変わらないと思う。

だが、それが結ばれるのか解らない現状であるならば、相当な覚悟が必要だ。

美代子は覚悟を決めてきたのだろうか？

俺と結ばれなくても…

家に着いた俺を待っていてくれたのは、テーブルに置かれた夕食と温かい笑顔を向ける美代子だった。

美代子は俺を待っていたらしく、まだ食べていなかった。

「食べてて良かったのに」

俺が言うと

「居候の身としてはご主人様より先に食べる訳にはいきません」

「……………」

美代子もキャラ変???

「ま、まあいいや…食べようか?」

少し遅い夕食を美代子と二人で食べる。

久しぶりに二人きりだが不思議と違和感がない。

新しい学校の話などの会話も普通に出来るし。

だけど、梨絵の事には触れて来ない。

俺からはっきり言った方がいいのだろうか？

第70話 部屋（前書き）

とじまじま。

第70話 部屋

食事も終わり、美代子が片付けている間に風呂入ろうと部屋着を取りに自分の部屋に入った。

すると

「何故か部屋の配置が若干変わっていた。

変わっていたと言うか、荷物が増えている感じだった。

「どうしたんだろう？などと考えながら自分の下着などが入っているタンスを開けると

「……………」

女性用の下着が入っていた。

うん。

俺は何も見っていない…。

1人納得して他の段を探したら何とか見つかった。

多分…

否、美代子を変えたのだろう。

ダンスとかは持って来なかったのかな？

などと考えながら風呂に入った。

いつもの倍の時間をかけて。

風呂から出て部屋でくつろいでいると、美代子も風呂から上がったのか部屋に入ってきた。

湯上がりの女性は色っぽいななどと暫く見とれていたら、美代子と視線が重なった。

「クローゼットの中のダンス見た？」

唐突に美代子が聞いてきた。

「あつ、あぁ…」

「明日にでも名前書いとくから」

どつちら、一緒に使っらしい。

元々、俺の荷物などは少ないから問題ないのだが、下着などは自分の部屋に置いといた方が良くない？

そういえば美代子の部屋は何処にしたのか。

2階には俺の部屋意外にまだ3部屋ある。

色々困るのでせめて下着くらいは自分の部屋に置いて貰おうと美代子に言った。

「えっ？私もこの部屋使っけど？」

「はっ？」

「だから、勝弥君と一緒に部屋！」

「えっ？な、なんで？」

「他の部屋はお客様用でしょ？勝弥君のお父さんが言ってたよ？」

あのクソ親父め！

なんとという……嬉しいことを…

でもな〜

どうすればいいんだろ？

美代子の事は好きだからそういつ関係にはなりたいたいと思うけど…

…

梨絵は？

梨絵の事はどうするんだ？

否、待てよ？

俺だけその気になって、美代子は違ったら？

ただ反に親父に言われてこの部屋にしたとかのオチではないよな？

「あゝ」

と俺は頭を抱える。

端から見たら凄く贅沢な悩みだろう。

これから美代子と過ごす時間も長くなるし、梨絵とも長くなる。

俺はこの先何処に向かうのだろうか………？

第71話 登校（前書き）

遅くなりました。では、どうぞ！

第71話 登校

結局、一緒の部屋だったから当たり前のように一緒に寝た。

当然？

何もなかったけどね！

今日から梨絵が学校に行く為、俺はいつものより一本早いバスに乗る。

美代子には言っていないが、解っていると思う。

昨日、寝る前に登下校は一緒に出来ないと伝えてあるから。

友美ちゃんと一緒に行くから！

と言ってくれたので内心はホッとしている。

友美とヒロが一緒ならば美代子に近づいてくるヤツはいないだろ

う。

友美達が俺に気を使ってくれるから。

梨絵の家に着いた時、ちょうど昌子さんが仕事に行く時だった。

昌子さんはあの後も梨絵を説得したみたいだったが聞き入れてくれなかったそうだ。

昌子さんに頼むね！と言われて家に入ると制服姿の梨絵が立っていた。

初めて見る梨絵の制服姿は、いつも見ている他の女の子より新鮮な感じがした。

俺も男なのでどうしても短いスカートに目が行ってしまっ。

そんな俺を余所に

「見たいの？」

とスカートの裾をチラチラさせる梨絵を

「い、行くぞ！」

と少し残念に思いながらスルーさせる。

学校へ向かう為、歩道を歩いているが、梨絵は道路側を歩いている俺に寄り添うようにしている。

それが事故の恐怖からくるものなのか、ただくっつきたいだけなのかは解らない。

ただ周りを見渡せば、かなりの注目度を浴びている。

緑と淳みたいに異性と付き合った事がなく、こういう場面に慣れていない俺は少し離れて歩こうとするが、梨絵が許してくれない。

逆に、腕を掴んでいた手を絡めてきた。

当然のように梨絵のある部分が当たったので動揺を隠さないでいる。

そんな俺に梨絵はわざと押し付けるようにする。

「…いいかげんしろ！」

男としては嫌ではないのだが…

恥ずかしさと美代子に対する想いの中で、つい大きな声を出してしまった。

梨絵は一瞬ビクツとして、絡めていた腕を解いてきたが

「…車が…怖いんだもん」

と言ってきた。

「……………」

梨絵に言われると何も言えなくなる。

だが、腕を組むのは流石に無しだ。

俺の理性を保つ為にも…

だから俺は

「手…」

と梨絵の手を取る。

手を繋ぐだけなら問題ない。

……………と思っていた。

第72話 初対面（前書き）

今日も宜しくです。

第72話 初対面

手を繋ぐくらい何とも思っていなかったのに……

梨絵と教室に入ると、既に来ている人達が梨絵を見て驚く顔をしていたが、すぐに寄ってきて、久し振りの梨絵との会話を楽しんでいる。

一応、梨絵を学校までエスコートしてきて、勤めを終えた俺の下には、梨絵との周りとは逆に男共が寄ってきた。

「なあ、笠原さんと付き合ってるの？」

とか

「どうして一緒に来たの？」

とか

「昨日、愛川さんと昼食食べてなかった？」

とか……

はつきり言っつてめんどくさい。

「彼女達とはただの友達」

説明するのがめんどくさい俺は、適当に答えた。

実際、美代子と梨絵の事を詳しく話すとなると、HR前の時間では足りない。　昼休みや放課後の時間を使っても無理。

それに…

話したいとも思わないし。

まだ、諦めきれず俺の言葉を待っているヤツは何人かいたが、俺が話さないことで痺れを切らしたのか、舌打ちをしながら自分の席に戻っていった。

誰かに話した所で俺達の関係は何も変わらない。

否、話したら学校中の噂的になり、彼女達が傷つくだけだろう。

俺は元々、友達を作ろうとは思っていないから何を言われても構わない。

しかし、梨絵は思ったより人気者だったし、美代子も可愛らしさと人当たりの良さで、直ぐに人気者になるのだから、彼女達を噂的にする訳には行かない。

知っているのは当事者だけで十分だろう。

しばらくして、美代子と友美が教室に入って来た。
それを見ていた梨絵が人だかりを避けるように友美の傍に寄って
きた。

「「久し振り」」

二人の声が重なる。

その二人の姿を見ていた美代子が

「初めまして」

と梨絵に挨拶した。

挨拶された梨絵も

「初めまして」

と手をだし、握手を求める。

お互い簡単な自己紹介をしているとチャイムが鳴った。

どうにか梨絵と美代子の対面は無事に終わった。

二人が握手している所を見てホッとしていたのは正直な感想だった。

もし、二人が仲良く出来なかつたら？

想像するだけで寒気がする。

端から見れば贅沢な悩みだろう。

「実際、そうなんだが……」

第73話 弁当（前書き）

どじもー！

第73話 弁当

休み時間の度に、梨絵と美代子の周りには人だかりが出来ていた。

だから今の状況はヤバすぎる。

昼休みになって美代子が俺の傍まで寄ってきて、お弁当作ってきてあるよ！と言ってくれた。

家でも家事は美代子が担当すると言ってくれてあったので基本的に全て任せてあった。

だから弁当を作ってくるのも当たり前前みたいな感覚でしか考えていなかった。

すると、梨絵も俺の傍まで来てご飯と一緒に食べようと言っ。

梨絵の言う事は全て叶えてあげたいと思う俺は断る事は考えられない。

だがこの二人と一緒に昼食を共にすることは、かなりの勇気がいる。

周りの視線は勿論だが、それ以上にこの三人で何の会話がある？

恐らく美代子は気付いているし、梨絵も気付いているだろう。

そんな事を考えていると、ヒロが教室に入ってきた。

友美と一緒に食べる為にだ。

ヘタレな俺としては、ヒロ達も交せてみんなで食べようと提案した。

友美は梨絵と美代子の共通な友達なので問題ないし、ヒロがこの雰囲気を変えてくれるかも…と。

そして、現在俺の机の周りには、梨絵と美代子、ヒロと友美の五人が席を並べている。

やはり……

クラス中の視線は俺達に向けられていた。

そんな事を気にしないのか、梨絵が食べよう！と弁当を開いたのが合図で、皆それぞれ弁当を開ける。

前に通っていた高校の時から美代子に弁当を作って貰っていた俺

は、久し振りに見る美代子の手作りに感激していた。

しかし、その感激も梨絵の一言で現実に戻される。

「どうして勝弥と美代ちゃんのお弁当一緒なの？」

昨日、俺が感じた三人の弁当が一緒だったのと同じ感覚を覚えたらしい。

それもそうだろう。

机に並ばれた弁当を見ると、ヒロと友美が一緒。俺と美代子が一緒。梨絵1人だけ違うのだから。

「……………」

俺と美代子は何も答えられなかった。

否、答えたら…………

どうなるだろう…？

すべて梨絵に話すのか？

一緒に住んでいると…

話したら梨絵の反応は？

全てが音を立てて崩れていくのか…？

俺は…

俺は、この街に何しに来た…？

第74話 大切な人（前書き）

評価点が下がってしまいました…

第74話 大切な人

俺は梨絵を支える為にこの街に来たのではないのか？

でも、美代子が居る前では梨絵を支えるとは言えない。

逆に梨絵が居る前では美代子と一緒にいたいとは言えない。

実際には数秒くらいの沈黙だったのかもしれないが、俺にとっては数十分の感覚だった。

今、一緒にいる皆が俺の言葉を待っている。

「た、頼んであったから…」

そう答えた俺に

「どうして？」

と、まだ突っ込んでくる。

何か悪い事をして叱られている気分だった。

誰か助けて欲しい。

というか、ヒロと友美はこの為に一緒に食べて貰っているのに、全然役に立っていない。

ヒロはいつの間にか食べ終わっているし…

視線を横にずらしヒロに訴えたがどうやら伝わらない。

逆にこの状況を楽しんでいるのか？

もう一度、今度は強い視線を送る。

そして

(今度、友美や友和さんと何かあっても助けてやんないからな！)

とアイコンタクトを送る。

(えっ？…で、でもこの状況は俺、経験不足だよ？)

(経験不足じゃねえよ！お前の方が修羅場抱えて乗り越えて来ているだろ！)

(それだったら…全て話した方がいいと思う。謝れば許してくれる…たぶん)

(謝る？俺、悪い事したの？)

ゴホン！

ヒロとアイコンタクトで話していると、友美が咳き込み話を止めた。

友美は俺とヒロの会話が解ったみたいで

「放課後、三人で話したら？全て…この先どうするのか……。
話しづらかったら私達もいるから…」

友美の一言でこの話しは終わった。

しかし、結論は出ていない。

全て話したら？と友美とヒロは言うてくる。

全て…

何か変わるのか…？

昼食を終えてまだ時間があるので、ヒロと屋上に向かった。

少し肌寒くなってきたが、今の俺にとってはちょうど良い冷たさ
だった。

「どうするんだよ？」

ヒロが俺に聞いてきた。

「…解んねえよ」

実際まだ迷っていた。

話して二人とも俺から離れていったら……

1人でいる事は嫌ではない……

でも……

大切な人を失うのは嫌だ……

大切な人はどっちだ……？

第75話 大切な人 2 (前書き)

遅くなりました！

第75話 大切な人 2

大切な人はどっちだ？

「お前の気持ちしだいだろ？どっちを選んでもそれが答えだろ？」

ヒロが俺に言う。

「美代子か梨絵を選ぶ？」

梨絵は俺のせいで事故にあった。まだ、1人では外出出来ない程の恐怖感を抱えている。この先もどうなるか解らない。梨絵はまだ1人では生きていけないんだ。俺に支えて欲しいと言う梨絵の言葉は俺にとっては嫌ではない。俺がそうしたいと思っている。

美代子はどうだろう？

俺は小さい頃からいつも一緒にいる美代子の事が好きだった。美代子が引っ越してから追うように転校した俺を今度は美代子が俺を追ってきてくれた。

…選ぶ事が出来るのか？

結局、結論が出ないまま放課後になった。

クラスの皆は、部活に行ったり帰宅したりと俺達以外は教室にいない。

何から話そうか考えていたが、美代子と梨絵の二人一緒だと気まづい感じがしたので、1人1人話しする事にしたいと思いつ

「これから、帰りながら梨絵に全て話すよ。…美代子には…帰ってから話す」
と言うと

「解った。私達居なくても大丈夫よね？」

友美が俺に聞いてきたので

「ああ。悪かった…」

こうして五人で学校を出た。

途中、梨絵の家の方向で美代子達とは別れて梨絵と二人で家に向かう。

梨絵の家に着くと、さっそく

「さて…話して貰おうかな…」

梨絵が催促してくる。

全て話すと決めた俺は、美代子との思い出から話し始める。

幼稚園で初めて会った時の事…

海辺で将来の約束をした事…

今は一緒に住んでいる事…

俺は美代子の事が好きだとも…

俺が話し終わると、梨絵は黙ったまま2階にある自分の部屋に閉じ込もってしまった。

やはり…話さなければ良かったのだろうか？

梨絵の事は傷つけたくなかった。

今更ながら馬鹿正直に話した俺は、重大な事をしてしまった事に
気付く。

でも…

梨絵には前に伝えある。

梨絵の傍にいと…

その事を伝えに俺は梨絵の部屋に向かう。

梨絵が俺を必要としなくなるまで傍に居ると約束したのだから、
梨絵が哀しむ事はしたくない。

梨絵に守られた俺は梨絵を守らなければいけないのだから………

第76話 大切な人 3 (前書き)

おはようございます。

第76話 大切な人 3

階段を上がり2階にある梨絵の部屋の前に立つ。

軽くノックをして梨絵の部屋に入ると、梨絵はベッドに顔を埋めて泣いている。

俺は梨絵の傍まで寄り、後ろから抱き締める形で梨絵を抱えた。

そして

「さっき言った事は全部本当の事。…だけど…だけど、梨絵が俺を必要としなくなるまで傍に居ると約束したよな？」

梨絵は軽く頷いた。

更に俺は続けて

「梨絵が悲しんでいる所は見たくないんだ。…俺はどうしたらいい？」

梨絵は俺の前では出さないが、まだ事故の恐怖と戦っている。

そんな梨絵に追い撃ちをかけるような真似は出来ない。

「私の事、好きになつてくれなくてもいい…でも…私は…傍にいてほしい…私には…勝弥君がいないと……」

梨絵は俺にそう告げた。

「ごめん。…俺は梨絵との約束を守るよ。…俺は傍に居てもいいか？」

梨絵は頷いて俺を見つめる。

これ以上見つめ合っていると間違いを侵しそうなので、これから美代子と話してくると言つて梨絵の家を後にする。

梨絵の家を出ると、まだ比較的早い時間の為か、夕日が明るく照らしている。

帰りのバスの中で、二人の事を考えていた。

これから美代子に伝えなければいけない。

美代子なら解ってくれると思う。

俺の選択が間違つていても…

家に着くと美代子はベッドで寛いでいた。

早い時間の帰りに驚いた様子だったが、俺を見ると

「話し終わったの？」

と聞いてくる。

「ああ。…美代子にも話しがある…」

俺が美代子に言うと、ベッドから身を起こし腰をかけた。

「何処まで知ってる？」

俺が美代子に問いかける。

必要な所以外話す時間も勿体無く感じていた。

「勝弥君がここに残った理由まで」

美代子が答えた。

俺が梨絵に助けられて、梨絵の後遺症まで知っていたみたいだった。

だから話しは簡単だった。

「俺は梨絵が…俺の事を必要としなくなるまで梨絵の傍にいる。

…それが…梨絵が必要としなくなるのが一生だとしても…」

俺が美代子に伝えると

「解ってるよ……解っててここまで来たんだから。…私は勝弥君の決断が正しいとかは解らない…でも…でも、私は貴方が好き。…もう…もう、後悔はしたくない。だから…貴方の傍にいたいと思ってる…」

美代子はゆっくり口を開いた。

第77話 大切な人 4 (前書き)

ではでは、どうぞ！

第77話 大切な人 4

「貴方の傍にいたい…」

美代子がゆっくりとした口調で俺に言った。

そう言われても俺は梨絵の傍に居なければならぬ。

否、居ると約束した。

約束…

美代子とも約束してある。

でも、…俺は梨絵を大事にしたい。

だから

「美代子との約束は守れそうにないと思う…今は…梨絵の傍に居なければいけないから…」

俺は正直な気持ちを美代子に伝えた。

否、正直言つと恋愛感情で考えてるならば、俺は美代子の事が好きだ。

梨絵の事は守りたいと思うが、ここには恋愛感情はない。

その事は梨絵も解っている。

「そんな事は解ってる。…解っててここに来たの。…梨絵ちゃん
の事を好きになっても…いい。でも、私は勝弥君が好きなの。…この
想いは誰にも、私にも止められない」

今更ながら自分自身の不甲斐なさに腹が立つ。

美代子はここまで俺を想っていてくれる。

それなのに…

「これからどうしたらいいのかな?…」

俺は一人言のように呟いた。

これからどうしたらお互い納得するのか解らない。
どう結論出しても納得しないのかもしれない。

否、俺自身一番納得しないのかも…

「正直になればいい…と思う…」

美代子が俺の一人言に答える。

正直…ヒロと友美も言っていた。

自分の気持ちに正直になる。

それが…誰かを傷つけたとしても。

俺は素直な気持ちで

「俺は美代子の事が好きだ。でも梨絵を傷つけない」

と美代子に告げた。

「うん。それが勝弥君の正直な気持ちだと思うよ。それでいいと思う」

美代子が俺に言ったが、これでは結論が出ていないのではないのか？

「結論は出ているよ。勝弥君は私が好きなんですよ？…でも梨絵ちゃんの傍に居なければいけないんでしょ？」

俺は頷く。

「それが結論だよ。私と勝弥君は両想いなの。でも勝弥君は梨絵ちゃんの傍に居てあげるの。…それが私達の両想いを壊したとしても。…私はそうならない為にここに、貴方の傍にいるの」

これでいいのか？

俺は梨絵と美代子と一緒に居ても…

美代子は納得して居るみたいだが、梨絵は納得してくれらるだろうか？

俺はこの結論で納得するのか？

この答えはまだ見つからない…

第78話 大切な人 5 (前書き)

ども!

第78話 大切な人 5

こんな結論の出し方で梨絵も俺も納得するのだろうか？

そんな疑問を持ちながら眠りについた。

隣で眠る美代子は話してすっきりしたのか、小さい寝息を立てて眠っている。

美代子を見つめながら、あんな事が無かったら…と後悔をする。

梨絵とあんな形で出会わなければ今頃、美代子と幸せに暮らしていたのかな？

否、今一緒に暮らして一緒に寝ているのだから幸せなのかな？

俺はこのまま梨絵の傍にしながら美代子と一緒に住んでいいのか？

納得出来ないでいる俺に残ったのは疑問だけだった。

次の日の朝、いつものように梨絵を迎えに行く。

あんなに泣き崩した顔を俺に見せた梨絵は、昨日とは違って、晴れ渡る笑顔を向けてくれた。

元気いっぱい梨絵を横に学校へ向かう。

「あれからどうした？」

「美代ちゃんとの話しは？」

とか聞いてくるが、何にも解決していないと思っている俺には答えられない。

でも昨日、美代子が言った事を梨絵が納得してくれたら全て解決する……？

だから、梨絵に伝えなければならない。

「梨絵……俺は梨絵の傍に居ると約束した。…でも、美代子の事を好きなんだ……これが俺が出した結論なんだけど……」

俺達の横を通り過ぎる車や学校へ向かって歩く人達の歩道で立ち止まって梨絵に告げた。

梨絵を傷つけないかと思っっている俺だが自分の気持ちには正直になりたい。

だから俺は梨絵に正直に告げた。

「いいんじゃない？それで。それが今の勝弥君の気持ちでしょ？」

…美代ちゃんとの仲を壊すつもりは無いよ？私も友達になつたし。
…でも、今の私には勝弥君が必要なの。自分でも解っている。私の中
で何かが起こる事を。…だから…しばらくは…傍にいて。私も勝
弥君が好きだから…」
「そんなのでいいの？」

美代子と一緒にいてもいいの？

俺が疑問を抱えていると

「昨日、勝弥君が帰った後で美代ちゃんと電話で話したの。全部
聞いた。美代ちゃんの勝弥君への想いは私よりも重くなって思った
けど、私も勝弥君の事が好きだし、今は一緒に居てほしいと言った
ら、少なからず貸してあげるって言うてくれたよ。」

「……」

「…俺って…一人で悩んでいたの？」

「だね」

「……」

「そう言う訳でこれからもよろしくね」

歩道を歩く梨絵は何処かすつきりした顔で学校へ向かい始めた。

昨日あんなに悩んでいた事は梨絵と美代子が話し合った事で全て
解決してしまっただけらしい。

というより俺を物扱いしている一人にはきちんとしなければなら
ない。

今後、二人に踊らせられないように……

第79話 決意(前書き)

ん！
どうも。昨日更新しなかったのに遅くなりまして申し訳ありません。

第79話 決意

美代子と梨絵の間でどんな話し合いがされたのかは解らない。ただ、今の状況においては二人共納得している。

だからこのままでいいのだろう。

この時はそう思っていた。

学校に着いてHR前の時間、梨絵と話していると美代子と友美が登校してきた。

二人共すぐに俺達が居る所まで来て軽く挨拶を交わした後、3人で喋り始めた。

そんな女の子3人の会話についていけるはずもない俺は自分の席に着いた。

3人の否、美代子と梨絵の姿を見ると不思議と昔からの友達のように見える。

つい最近仲良くなった友達には見えない。

普通ならまだギクシャクしている所が全くないのだ。

美代子と梨絵の共通点である俺としては嬉しい反面複雑な気持ちになる。

美代子と梨絵は納得していても俺にはスッキリしない所があるからだ。

原因は俺の優柔不断な所だと言うのは認めるがなんとなくスッキリしない。

そんな事を思っていると友美が俺の所に来た。

「いつまで悩んでるの？」

友美は俺の気持ちを察したかのように問いかけてきた。

「恋する男心は複雑なのさ……」

俺は少しふざけながら答える。

「……勝弥には似合わないね。……二人とも納得してるからいいんじゃないの？美代ちゃんが好きなんだから美代ちゃんと付き合えばいいじゃん」

「そんな簡単には行かないだろ？」

「そうかな？梨絵は納得してるんだからさ…それに…付き合ってもいないのにベッド一緒なんてありえないけど？」

「おっ、お前…美代子に聞いたな？」

「へへっ…まっ、頑張っつてね」

友美は舌をペラッと少し出しながら自分の席に向かった。

どうやら美代子は仲の良い子には全て話してしまう癖があるようだ。

前の学校の時も緑に色々話していたみたいだし。

俺が淳やヒロには言わない事を美代子は緑達に言う。

結局、俺が責められる羽目になるのだが…

美代子にはもう少し自重するように言わないと。

それにハッキリと言おう。

俺は美代子が好きだと…

第80話 距離(前書き)

おはようございます。では、さあー。

第80話 距離

俺は美代子の事が好きだ。
小さい頃からの気持ちは変わらない。

否、むしろ今の方が想いは強いかもしれない。

美代子にもう一度伝えよう。

冷める事の無い想いを…

いつものように授業が始まったが、全く身に入らない。

美代子にいつ伝えようとソワソワしているのが自分でも解る程だった。

休み時間の美代子の周りは相変わらず人集りが出来るので呼び出

す事は困難だ。

残ったのは昼食時間でしかない。

幸い友美達も含めて五人で食べる事は決まっているので、食べ終わったら何処かに呼び出そうと考えていた。

早く伝えたい。

早く伝えないと。

と、焦る気持ちを抑えていた。

午前中の授業も終わり昼休みになった。

ヒロが俺達の教室に来て五人での昼食が始まる。

俺は当たり前のように美代子から弁当を貰い、ヒロは友美から受け取る。

五人での昼食と言っても基本的には女は女同士で話して、俺はヒロと話してみたいな感じだった。

女同士が話ししながらの食事は長い。

俺やヒロはもう食べ終わっているのに美代子達を見るとまだ半分くらい残っている。

いつもならヒロとそのまま話しているから気にならなかったが、今日だけは早くして欲しいと願いながら待っている。

そんな俺の願いも虚しく美代子の弁当は一向に無くならない。

少しイライラしてきた俺はトイレと言って教室を後にした。

そしてトイレから美代子にメールする。

【食べ終わったら中庭に来て】

と。

美代子にメールした後、俺も外靴に履き替え中庭に向かう。

やっと俺達は結ばれるのか？

小さい頃交わした約束を果たす為の第一歩を踏み出す事が出来るのか？

中庭のベンチに腰かけながら空を見上げると、雲一つ無い青空が俺達を祝賀してくれているように見えた。

この先の二人を祝うかのように。

そして、見上げていた視線を下げると、とびっきりの笑顔を俺に向けながら歩いて来る美代子が見えた。

まだ俺達の距離は遠いのが、美代子が俺に向かって歩いて来る距離と、ベンチから立ち上がって美代子に向かって歩き始めた俺の距離は、今まで縮まる事の無かった距離が今日初めて縮まった感じがした。

そして、俺達の間には距離は無くなった。

第81話 唇（前書き）

やっと…長かったです。

第81話 唇

俺と美代子の間には殆んど距離は無い。

手を挙げれば触れてしまうほどに。

美代子はいつも俺に満面の笑顔を向けてくれる。

それは小さい頃から変わらずに。

そして俺の言葉を待っている。

一つ大きく息を吐いた俺は

「俺は梨絵が1人でも過ごせるようになるまで傍にいたいと言った。でも、梨絵に対しては恋愛感情はない。俺は美代子が好きだから」

ここまででは昨日言った事と同じだった。

だけでももう一度ハッキリさせる為には同じ事を言う必要があったからその後が続けた。

「これから先どんな事が合っても俺の傍にいて欲しい。今は傍に

いる時間はあまり取れないけど、俺の気持ちは美代子だけだから。……だから付き合つとかもそうなのかもしれないけど……今は梨絵の傍にいななければいけないし……」

美代子は黙つたまま聞いていた。

「……なんか上手く言えないけど……でも、これだけはハッキリ言える。俺は美代子の事が好きだ。小さい頃から変わらないしこれからも変わらない！」

途中、何が言いたかったのか解らなくなったが、最後はハッキリと自分の気持ちを伝えられた。

「うん。私も勝弥君が好きだよ。」

美代子も昨日と同じ事を言う。

だけど、俺の気持ちが違つたせいかな昨日とは全然違つる感覚に陥る。

昨日聞いた好きと今日聞いた好きは意味は同じでも俺には美代子から初めて告白されたような感じであった。

緊張していた顔が揺るんでくるのが解る。

俺は自分の右手で美代子の左手を取り、引つ張る形で抱き寄せた。

ちょうど俺の胸の辺りに顔を埋める形になった美代子は下から俺を見上げる。

校舎の中から聞こえていた騒がしい声やグラウンドの砂を巻き上げる風の音も聞こえない。

お互いの心臓の音が聞こえてしまう程、時間が止まっているようだった。

そして一陣の風が頬を当てた時、今まで見つめ合っていた俺と美代子はどちらかともなく顔を近づけ初めて唇を重ねた。

どれくらいの時間が立ったのだろうか。

実際は数秒間だったのかもしれないが、初めてキスをした俺にとっては物凄く長い時間に感じた。

上手く出来たのかは解らない。

でも俺と美代子は初めてキスをした。

これからの二人の出发点として…

第82話 幸せ（前書き）

おはようございます。

第82話 幸せ

初めてキスを交わした俺達は昼休みが終わるチャイムの音で教室に戻った。

よくファーストキスの味はどんな味？とか耳にするけど、俺にとってはいまいち解らない。

それに初めてのキスが学校って…

こんなので良かったのかな？
などと今更ながら自分のシチュエーションの無さにがっかりする。

でも、やっと出発出来た俺達にとってはそんな関係はないかなと思う。

これから色々な場面で二人で積み重ねて行けばいいだけなんだから。
5。

午前中の授業は美代子にどう告げようと考えていた為、殆んど授業の事なんか頭に入っていない。

午後の授業も美代子とキスした事を思い出していて身に入っていない。

こんな事で期末試験大丈夫か？

まあ、解らなかつたら美代子に聞けばいいだけだし。

と窓際の席に座る美代子を見るとポツと外を見ていた。

しばらく見ていると視線を感じたのか美代子が俺の方に目を向けた。

重なり合う視線はお互いに恥ずかしさと気まずさですぐにずらしてしまった。

でも、またすぐに視線を美代子に向けると彼女も視線を合わせてくれて、お互いに頬を紅くした。

多分…

否、世界一幸せの瞬間だと思っていた。

散々、淳と緑のカップルや友美とヒロのカップルをバカにしていたけど、実際俺達も他から見たらバカカップルに見えるだろう。

それくらい周りも見えず幸せな気持ちだった。

授業が終わり、学校をいつもの五人で出る。

俺は梨絵を送って行くので途中で美代子達と別れた。

梨絵と二人で歩いていると

「何か良い事あった？」

「梨絵が聞いてきた。」

緩みつぱなしの顔に気付いたらしい。

俺にとっては初めての経験なのだから無理もない。

「いや、別に」

覚られないように答ても今の俺には難しい。

「ふん。昨日とは全然違うけど？」

そんな事言われても嬉しい事は嬉しいのだからしょうがないじゃん。

とは言えず

「まっ、いいじゃん 早く帰ろつぜー」

と、先を歩き出した。

梨絵の家に着いてからも何があったの？としつこく聞いてきたが俺は話しをずらしたりして惚けていた。

梨絵には言わない。

否、言えない。

梨絵は俺の事を好きだと言ってくれたのだから尚更だ。

でも、梨絵には悪いけど今の俺は美代子の事しか考えられない。

やっと、

やっと結ばれたのだから。

幸せになれる

と思っていたのだから…

第83話 俺の家(前書き)

ね、眠い！おやすみなさい…

第83話 俺の家

なんとか梨絵を誤魔化して家を後にした。

有難い事に最近の梨絵はあまり引き留めはしなかった。

昌子さんが帰ってくるまで居るよ！と言っても大丈夫だからと言う。

確かに俺は美代子が待っている自分の家に早く帰りたいたいと思っている。

そんな態度がつついっ出してしまうのだろう。

だから気付かなかった。

俺を玄関で送る梨絵の寂しそうな顔に。

バスターミナルでバスを待っている間つくづく嫌になる。

バスを待つている時間もバスに乗っている時間も長い。

田舎だからしょうがないが、急いでいる時なんかは非常にイライラする。

今の俺は急いで帰らなければいけない訳でもないが、早く美代子に会いたい。

それだけの理由でいつまで待っても来ないバスにイラついていた。

やっと来たバスに乗って家へ帰る。

あと30分で美代子に会える。

さっきまで学校で一緒だったのに隣に美代子が居ないと変な感じがした。

お互いの気持ちを受け止め合った今は自分自身止められない程に暴走している。

小さい頃から思っていた事が今現実で起きているのだからしかたの無い事だと自分で納得する。

バスから降りても普段は走らないのに家まで走って帰る。

息を切らしながら庭を通り過ぎ、玄関を開けると

出迎えてくれたのはヒロだった…

「…」

「…どうしたんだよ？」

ヒロが学校帰りに俺の家に来るのは珍しい。

普段のヒロは帰ったら友和さんと明日の漁の準備をした後、酒盛りを付き合わなければいけないはずだ。

「まあ、上がれよ！」

とヒロが言う。

否、違うだろ？俺の家だから勝手に上がるし。

と思っていたらヒロはリビングに向かい出した。

何度も言うけど俺の家だからね？

リビングに入るとパーティーでも初めるのか？という程の料理が

テーブルに並んでいた。

そして睦美さんや友美が忙しそうに料理を並べている横にはただ1人酒盛りをしている友和さんがいた。

「……………」

（何があつた？）

酒を飲んでいる友和さんの前では下手な事は言えないのでアイコンタクトでヒロに聞いた。

「とりあえず座れよ」

アイコンタクトした意味がねえよ!!!

それに何度も何度も言うが俺の家だからな!!!!

第84話 風呂(前書き)

なんか幸せそうで…

第84話 風呂

パーティーでも始めるかのように料理が並べられていた。

ヒロに託されとりあえずテーブルの真ん中の位置に座った。

嫌がらせかのように友和さんの前だが…

俺の隣にはヒロと美代子が座り、そして友和さんの

「おめでとう!」

との掛け声でパーティーと言う名の宴会が始まった。

「……」

とりあえず乾杯するが、何故におめでとうなのか？
俺が不思議に思っていると

「勝弥と美代ちゃんのファーストキス記念パーティーだよ」

と、友和さんの隣に座る友美が言う。

その言葉に驚いて美代子を見ると

…頬を紅く照らしている。

「……」

「紅くなってる場合じゃないんだけど？」

「なんですぐに喋るわけ？」

「怒るに怒れない俺はこの怒りをヒロにぶつける。」

「ほら！飲めよ！」

とヒロのグラスに友和さんの日本酒を注ぐ。

友和さんと同じペースで飲ませてやる。

どうせ美代子は友美や睦美さんと喋っているから、俺はヒロを友和さんと一緒に酔わせようと考えていた。

酒を注いだら注がれ返される常識を忘れていた俺が、逆に痛い目に合わされたのは美代子達が片付け始めた頃の事だった。

そういえばヒロは毎日友和さんと酒を飲んでいるのだから俺よりは強いハズだった……

美代子が片付けている間そのまま横になっていた俺に

「お風呂入ってくれば？」

と美代子が言う。

少しダルい体を起こして風呂へ向かう。

洗い物をしている美代子に、酔っていたせいか

「一緒に入るうか？」

と普段なら考えられない事を言う。

男だったら一緒の風呂に入るのは永遠のテーマだろう。

付き合っても恥ずかしくて一緒に入らない人もいるのに、まだキスしか経験が無い俺が言うのには無理がある。

驚いたような顔で俺を見ている美代子を見るとそう思う。

「…酒の力ってスゲーな」

思わず口にしてしまった俺は苦笑いしながら風呂に入った。

湯船に浸かり、入るよ〜と言って入ってくる事を少し期待しながらいつもより長い風呂に入る。

少し望みにかけたが美代子が入ってくるわけも無くのぼせ気味に風呂を出た。

そんな俺に

「長かったね。入ってくると思ってた？」

と美代子が聞いてきた。

「す、少し…」

俺は頭を掻きながら答える。

「…迷ってたんだけどね…また今度ね」

美代子が照れながら風呂場へ向かった。

今度？

俺の望みが叶うのか？

今日1日緩みっぱなしの顔が更に緩んでいく感じがしていた。

第85話 期待(前書き)

どうも！遅くなりました。

第85話 期待

今日1日で俺達は随分進歩した。

でも、これで終わりじゃない…

と思う。

風呂上がりで濡れた髪を部屋で乾かす。

もう冬に入ろうとしている季節は髪の毛を乾かすのにも時間がかかる。

部屋の温度は低い筈なのに俺の体は高温状態だ。

風呂から上がったせいでは無い。

これから起きるであろう状況に期待しているからだ。

いつもの一緒に寝る状況とは違う。

キスをしたカップルが一緒に寝るのだから普通の男だったらその先を期待するだろう。

俺だって健全な高校生だ。

はつきり言って美代子は俺を受け入れてくれると思っている。

そして美代子が風呂から出て来た。

まだ濡れている髪の毛をタオルで拭いている姿を見ていると胸がドキドキしているのがわかる。

そんな俺の姿に

「どうしたの？」

と聞いてくる美代子は少し天然気味かもしれない。

ドライヤーを美代子に貸して俺は颯爽とベッドに潜り込む。

いつもなら壁際に寝る美代子からベッドに入るのだが今日は俺から先に入った。

そしてベッドの中からまた美代子を見ている。

早く来いという焦る気持ちとまだシミュレーションの途中だからもう少し時間が欲しいという気持ちが入り交じっている。

他のヤツ等はどっぴり気持ちで迎えるのだろうか？

当たり前的事だが俺は初めての状況だし、美代子も多分初めてだろう。

ヒロに聞いておけば良かったと今更ながら後悔している。

やはり男がリードしなければいけないのだから、昼休みにキスしたみたいにもう大事か？

否、いつもなら美代子が先に寝る体制に入るのに、今日に限っては俺がベッドで待っている状況はムードも何も無いだろう。

下心丸出しな状況かもしれない。

そんな俺の心配も他所に髪の毛を乾かし終わった美代子が

「ふう〜」

と大きく溜め息を吐き

「今日はお祖母ちゃんの所で寝るね」

とベッドで待つ俺に言って部屋を出ていった。

「……」

言葉にならない俺は布団で身体中を覆った。

下心丸出しが美代子にバレた事の恥ずかしさが身にしみる。

期待値100で迎え待っていた俺に残されたのは、久しぶりに一人で眠るベッドの大きさだけだった。

第86話 手(前書き)

じゃ、アハハハ！

第86話 手

期待していた俺がバカだったのかこの日は何も起きなかった。

1人寂しく寝た俺は、次の日の朝ダルそうに起きてきた。

美代子は梨絵を向かえに行く為、早く家を出る俺の朝食の準備を始めていた。

「おはよう〜」

典型的な朝の挨拶までダルくなる。

「おう〜」

しか答えられない。

「……………」

そして昨日とは変わって無言での食事時間となる。
何があったの？

とかも聞いてこない。

聞かれても答えられないが少しは心配して欲しい。
否、俺が一人で先走っていたのは分かるけど…

まあ、幾らでもチャンス？はあるからね！

朝食を終えた俺は梨絵を迎えに美代子より早いバスに乗る。

昨日1日で美代子との仲が親密になった俺としてはやっぱり今日も顔がにやけている。

夜の事は忘れて。

梨絵の家に着くと玄関先で俺を迎えてくれてそのまま学校へ向かい歩き出した。

途中、他愛も無い話しをしながら向かっていると梨絵の足取りが重いのか、歩くペースがいつもより遅く感じる。

後ろから他の生徒が俺達の事を抜き去って行くのを見ても分かるほど俺達のペースは遅い。

また足が痛み出したのか心配した俺は

「足、大丈夫か？」

と梨絵に聞く。

梨絵は俺の隣では無く一步下がった位置で手を振りながら

「大丈夫、大丈夫」

と言った。

大丈夫と言っても梨絵のペースに合わせていると遅刻は免れない。

別に俺は遅刻したからと言っても問題ないが、事故の影響でかなりの日数を休んでいる梨絵はキツいかもしれない。

幾らテストで良い点数を取っているといっても学校に復帰した今では通用しないだろう。

だから俺は梨絵に手を差し出した。

俺が引つ張る形で梨絵を学校まで連れて行く為に。

「…ありがとう」

と言って梨絵は俺の手を取る。

前にも思った事だが梨絵とは自然と手が繋げる。

逆に美代子とは手を繋いだ事が無いことを思いだす。

今までの俺だったら恥ずかしくて繋げないかもしれない。

でも今は美代子と手を繋いで街を歩いてみたい。

美代子とデートというものをしてみたい。

この時の俺は梨絵と手を繋ぎながら美代子の事ばかり考えていた。

第87話 ライバル（前書き）

久しぶりに美代子視点です。

第87話 ライバル

私が転校して来たのにはあまり感心を寄せなかった勝弥君は、さすがに自分の家、しかも一緒の部屋に住む事には驚いたみたい。

勝弥君の傍に居たいと思って、お母さんから勝弥君のお父さんに言ってもらった。

親同士が認めてくれたのだから後は私達の問題だけだった。

勝弥君がこの街に戻ってきた理由を聞いたら私もジツとしてられない。

だから私も勝弥君の傍に来た。

梨絵ちゃんとは友美ちゃんが紹介してくれてすぐ仲良くなった。

恋のライバルだけど。

梨絵ちゃんの原因を聞けば私も梨絵ちゃんには勝弥君が必要だと思っ。

でも勝弥君は言ってくれた。

私の事が好きだと。

あの日…

私が勝弥君に答えた日から私達の想いは変わらない。

小さい頃から変わらない。

だから私達が一緒に居る事は不自然でも何でも無い。

当たり前前の事だった。

そんな私の気持ちを勝弥君は分かっているでも梨絵ちゃんに遠慮して受け入れてくれなかった。

私も分かっている。

でも私達は好き同士なんだから…

そして梨絵ちゃんと始めて会った日、梨絵ちゃんに私達の事を聞かれた。

勝弥君は答えてくれなかった。

答えられなかったのかもしれない。

梨絵ちゃんは勝弥君の事が好きだから。

帰り道、勝弥君は梨絵ちゃんを送って行くから途中で私達と別れた。

なんて答えるのか気になってしょうがなかったから梨絵ちゃんに電話した。

少し泣き声の梨絵ちゃんは勝弥君から全て聞いたみたいだった。

だから私も梨絵ちゃんに言った。

「私達は今日友達になったけど、恋愛は別だよ？私は勝弥君が好きだから。ずっと…」

すると梨絵ちゃんは

「分かってる。お互い好き同士なのに邪魔するつもりは無いよ。でも今の私には勝弥君が必要だから…」
と言った。

梨絵ちゃんの後遺症の事は私も分かる。

だから治るまで貸してあげる…と

治るのがいつなのかは誰にも解らない。

勝弥君も言っていたけど一生なのかもしれない。

でも私と梨絵ちゃんの間では勝弥君への想いを伝えた。

後は勝弥君が決断してくればいい。

私は貴方の傍にいたい。

私は一生貴方を好きでいます。

この想いは誰にも壊せない。

第88話 道（前書き）

美代子視点続きます。

第88話 道

私の想いは伝えた。

だから後は勝弥君が素直になれるかどうかだけだった。

次の日の昼食の時間、勝弥君は食べ終わると何処かに行ってしまった。

しばらくすると勝弥君から中庭に来て欲しいとメールが入ってきた。

私は残りのお弁当を急いで食べ終え中庭に向かった。

勝弥君から呼び出されるのは珍しい。メールも滅多に来ないのに。

話して昨日の続きかな？

それとも…

私は少し期待しながら勝弥君の下に歩いて行く。

少し歩くと勝弥君が見えて勝弥君も私に気付いたみたい。

少しづつ二人のあった距離が無くなっていく。

勝弥君の歩く姿がスローモーションのようにゆっくりと見える。

そして私達は寄り添うような形で向き合った。

その時の勝弥君は今までに見たことの無いような雰囲気私に勝弥君の想いを伝えてきた。

口下手な勝弥君の言いたい事は分かる。

やっと私達は…

結ばれる。

今まで体験した事の無かった男の人の胸に抱かれる感触は一生忘れる事の無い思い出になる。

そして

私にとっても初めてのキスをした。

午後の授業中も胸がドキドキしっぱなしで先生が言っている事など頭に入らなかった。

時々、勝弥君と視線が合うけど、まともに合わせてなれないほど恥ずかしい。

ずっと願っていた事が叶えられた事の素晴らしさは私の心を大きく開かせた。

このままでもいい。

これからもずっと。

嬉しい事とかは私は直ぐ友達に言っちゃう癖がある。

私の顔に聞いて欲しいと出ちゃてるのもあるから。

だから友美ちゃんや緑には直ぐに報告しちゃう。

二人共、良かったねと言ってくれて、特に私の想いをずっと知っていてくれた緑は随分喜んでくれた。

冬休み入ったら直ぐに遊びに行くから、それまでにもって親密な関係になっときなさい。

だって…

私にも分かっている。

私だって好きな人とずっと一緒に居たいし、その先だって…

でも慌てる事も無いと思う。

私達は長い時間をかけてやっとここまで来たのだから。

この先まだ長い時間を一緒に過ごして行く想いは変わらない。

だから慌てることは無い。

「私達は歩き始めたばかりだから。」

第89話 異変（前書き）

勝弥視点に戻ります。

第89話 異変

梨絵の手を引きながら学校まで向かった。

運よくHRには間に合い何とか遅刻は免れた。

冬に入った季節は制服だけだと肌寒い。

それは教室に入っても同じで、多少の暖房が入っていても冷たさを感じる。

多分、温かくすると眠気を襲ってくるのを避ける為だろう。

そんな事はお構い無しで暑くても寒くても学校の授業中には睡魔が襲ってくるのが当たり前だ。

だから何時ものように机に覆いさる。

軽い眠りにつく俺は朝の出来事を思い出す。

昨日は俺にとって人生で最高の日だったが、そのせいで梨絵の異変には気付かなかった。

引きずるように歩いていた足は当事者でない俺から見てもかなり痛そうなのが分かる。

当然、事故の後遺症だろう。

本来なら俺が気付いてあげべきはずなのに…

有頂天な俺には無理な話だった。

学校が終わって帰り道、また足を引きずっている梨絵に

「病院…行くか？」

と聞いてみた。

聞く前に連れて行く事は可能だが、自己主張が強い梨絵を強引に連れて行く事は出来ない。

「大丈夫だよ…」

少し息を乱しながら答える。

今は帰りの途中なので、朝と違って急ぐ必要はない。

でも辛そうに歩く梨絵を1人で歩かせる訳にも行かないので手を繋いでいる。

大丈夫と答える梨絵を心配しながら梨絵の家に向かう。

はつきり言えば大丈夫な訳がない。

歩くのも辛いはずだ。

でも、今の俺は梨絵の言葉を信じるしかない。

梨絵の身内でも彼氏でもないのだから。

梨絵の家に着いてリビングにあるソファに座らせる。

冷蔵庫にあったオレンジジュースをコップに注ぎ梨絵に手渡す。

「ありがとう」

と梨絵は言っただけジュースを一気に飲み干した。

足の痛みからくる疲れだろう、喉も渴いていたみたいだった。

ふと、足がどういふ状況なのか気になった。

事故で入院した時は昌子さんが足をマッサージしていた。

俺の担当は腕だったが。

今は昌子さんが仕事でいない。

梨絵が良いなら俺が…

「足どうなんだよ？マッサージするか？」

俺はイヤらしさとかの意味では無く、純粹に良くしてあげたい気
持ちだけで聞いてみた。

「……太いからヤダ」

痛いからとか恥ずかしいからとかでは無く、太いからと返事が帰
ってくるとは思わなかった。

「……」

少し固まった俺はまた口を開く。

第90話 足（前書き）

最近幸せそうな勝弥がムカつきます。

第90話 足

太いからヤダと返事を受けた俺はもう一度梨絵に尋ねた。

「そういう事じゃなくて、痛いならマッサージするけど…」
と。

実際、梨絵は細身だから足も太くない。

梨絵が太いと言ったら他の女の子達はどうなるんだ？

などと思っていると

しばらく黙っていた梨絵が

「…じゃあ、お願いします」

と言って、ソファーに寝そべった。

普段は恥ずかしさで良く見る事が出来なかった梨絵の足は、白く綺麗な足をしていた。

改まって思う事は女の子ほど神秘的な生きモノはいないだろうと。

例外も居るが……

ソファーに寝そべっている梨絵のふくらはぎを中心にマッサージする。

確か右足を引きずっていたので右足は少し強めに揉む。

時折、痛いと言って足をバタ突かせると男の嵯峨かどうしても視線は横にズレてしまう。

その先には短いスカートからチラつく白いパンツが見え隠れしていた。

好きとか嫌いとかは関係ない。

男として当然の行為だろう……

と、少しニヤついて意識が飛んでいる俺は梨絵の一言で現世に戻ってくる。

「…なんか考えてる？」

「えっ!?!…いや…大丈夫かな…足…って…」

変な想像をしていた俺は梨絵にバレないかとビクついている。

昨日からこんな事ばかり考えている俺はどうしたんだろう?と思っ

確かに男としては当たり前前の考えかもしれないが、今の現状では

普通考えられないだろう。

梨絵の事を思ったら…

反省している俺に梨絵は

「やりずらそうだから着替えてくるね」

と言って自分の部屋に行ってしまった。

やっぱり分かってしまっていたんだろう。

梨絵に対しての申し訳なさや恥ずかしさで俺は自己嫌悪に陥る。

確かに梨絵は性格も良く可愛らしさも有り男としては付き合いやすいレベルが高いだろう。

何より俺の事を好きだと言ってくれる。

でも今の俺には美代子がいる。

裏切ることはしたくないし自分もされたくない。

だから我慢するとかではなく何も考えないようにする。

今、着替えが終わってスエット姿の梨絵を見ても残念という気持ち
ちが起きなかったと思いたい。

俺は梨絵の支えにはなると決めたが、俺の愛している人は美代子
だけだから。

第91話 母親（前書き）

お母さん、お父さん。お母さん。お母さん...

第91話 母親

しばらく梨絵の足をマツサージしていると右足が左足より太い感じがした。

微妙な差かもしれないが両足を触っていると良く解る。

足の色は両足とも白い綺麗なままなので腫れているとかではない。気になっている右足を摘まむ形で触ってみた。

「痛い、痛い……」

と今にも泣き出しそうな梨絵が大声で喚く。

他はなんともないので登校時に足を引きずっていた原因はここだと確信した。

でも俺は医者知識もないのでどうすればいいのかわからない。

とりあえずこのままだと日常に影響あるので病院に行こうと梨絵をソファから起こす。

「やだ！」

と頑固して動こうとしない梨絵を抱きあげ身体全体を引っ張るように家を出る。

途中まで抵抗していた梨絵は諦めたのか今は俺の腰に手を回しながら足を引きずり歩いている。

痛いなら痛いとはつきり言えば今日学校休んで病院に連れて行つたのに…

と思っていた俺の気持ちを悟ったのか

「黙っててごめんなさい。…昨日の夜から……」
と梨絵が誤ってきた。

昨日からという事はもう大分時間が立つ。

特に気になるような事がない事を祈りなが病院へ向かう。

病院の待合室で梨絵の症状を簡単に看護婦さんに話す。

看護婦さんによると梨絵の担当医は今、他の患者さんを見ているのでもう少し待つ事になると言う。

他の医者よりは梨絵の事を詳しく分かっている担当医の方が良かったので、俺達は迷わず待つ事にした。

その間、昌子さんに病院に来てもらえるように連絡した。

病院に着いてから1時間は立ったのだろうか、まだ俺達は待合室で名前を呼ばれるのを待っている。

それからしばらくして昌子さんが仕事場から直接病院にきた。

「どうしたの？」

俺と梨絵の姿を見て駆けるように寄ってきた昌子さんが最初に口にした言葉だった。

「梨絵の右足が…痛いみたいで…」

梨絵に代わり俺が答える。

「いつから？」

医者のように次々に質問してくる昌子さんは本当に娘を心配している姿だった。

親が子供を心配するのは当たり前の話のだが、小学生の頃に母親を亡くしている俺にとっては、改めて母親の存在の大きさに気付く。

こういう所では男なんかまったく役に立たないのだとも。

第92話 罪（前書き）

どうも！ 評価、感想よろしく！

第92話 罪

病院に着いてから俺は全くと言っていいほど役に立っていない事に気付く。

そして梨絵の担当医である先生から名前を呼ばれ、梨絵と昌子さんは治療室に入って行った。

俺は入らなかった。

梨絵の足の状況を本人が俺に隠していたのなら聞けるはずもない。

否、聞くのが怖かったのかもしれない…

もし梨絵の足が最悪の場合は……

考えたくもないが考えてしまう。

あの時の…

あの事故の時の事が走馬灯のように甦る。

後遺症が残るかもしれない……

と言う医者言葉。

あの時は思ったより梨絵の体調や足の状態も良かったので比較的早く退院出来たから後遺症なんか考えてもなかった。

それが今になって出てきてしまったのだろうか？

そうしたら俺はどうすればいいのか？

俺がどうすれば梨絵にとって一番いいのか？

俺の思い過ごしであってほしい。

この時の俺は一人残された治療室の前で、時間が止まったのかように佇んでいた。

499

どれくらいの時間が立ったのかは解らない。

治療室から出てきた昌子さんは青ざめた顔をしていた。

昌子さんに言葉をかけなくても想像出来る。

俺の最悪の予想が当たってしまったのだろう。

でも勘違いで有って欲しいと願いを込めて俺は昌子さんに聞いた。

「梨絵…どうでした？」

俺が発した言葉に我に帰ったように俺を見た昌子さんは

「……また……また、しばらく入院だって……」
と言った。

「入院すれば……入院したら、また良くなるんですよ？」

梨絵の足の状況は解ったつもりだった。

だから今後良くなるのか？

ただそれだけが知りたかった。

「……解らない……って」

昌子さんは担当医に俺と同じ質問をしたのだろう。

担当医にもこれからの梨絵の足の状況は解らなかった。

その後、病室に移された梨絵は痛み止めを打っているせいかな普段の元気な梨絵だった。

「なんで入院しなきゃいけないの？」

とか叫んでいる。

梨絵には知らされていないのかもしれない。

昌子さん1人で背負うつもりなのか？

今更ながらあの時一緒に担当医から聞いておけば良かったと後悔している。

第93話 不甲斐なさ(前書き)

ども！ 今日もよろしくお願いします。

第93話 不甲斐なさ

あれから昌子さんに送ってもらい家に帰った。

帰り道の車の中では何も話さなかった。

否、喋れなかった。

この後、梨絵の足がどうなるのか解らないと言う医者言葉を、信じたくない気持ちがお互いにあったからだった。

入院したとなると、俺と昌子さんは殆んど病院に付きつきりになる。

特に昌子さんは仕事もあって大変だろう。

俺も学校があるが、梨絵の為に転校した学校には特別な思いはない。少しは俺も梨絵の役に立ちたい気持ちがある。

全ての原因は俺にあるのだから。

家に入るといつものように美代子が食事の用意をして待っていた。

俺の雰囲気違ったのか心配そうな声で

「何かあったの？」

と美代子が聞いてきた。

美代子に隠していても明日には解ってしまうので梨絵の事を正直に話した。

俺が全て話すと

「…勝弥君はどうするの？」

俺？

俺はどうしたいのか？

美代子に聞かれても答えられなかった。

昨日までは美代子とやっと結ばれたと思っていたのに……

梨絵の傍に居てあげても俺は美代子の事が好きだと再確認したのに……

もし、梨絵の足が最悪の場合はそれも叶わないのか？

家に帰ってからの俺は昨日とは違って浮かれた気持ちもなく、美代子とは会話も出来ずに眠りについた。

今は梨絵の足が良くなることを願う。

そして明日、昌子さんともう一度担当医に聞いてみよう。

俺には何も出来ないのだから。

霜が降りた次の日の朝、俺は梨絵の家に向かう。

昌子さんにもう一度聞く為だ。

朝練なのか学校へ向かう学生の姿やサラリーマンの人達の姿が何人か見える。

まだ早い時間帯なのでいつもの登校する時間よりは少ないが、それでも寒い手をポケットに突っ込みながら歩いている。

この人達には悩みがあるのだろうか？

と、ふと思う。

色んな人達が居て、色んな世界があって、色んな人生があって、色んな悩みがある。

皆、少なからず悩みはあるだろう。

それをどう解決するのか？

俺はどう解決すればいいのか？

梨絵と美代子に振り回されているのではない。

俺には悩みを解決するほどの勇気と経験が無いからだ。

と、今更ながら自分の不甲斐なさにっかりしている。

第94話 ポストンバック(前書き)

おはようございます。では今日も...

第94話 ポストンバック

いつもの朝より早い時間、梨絵の家に着いた。

チャイムを鳴らすと昌子さんが玄関から顔を出し、上がりなさいと俺を家の中へ招く。

家の中へ入ると梨絵の入院の準備が大きなポストンバックが目につく。

「これって梨絵の？」

「こんなに必要なの？」

俺は昌子さんに立て続けに質問する。

いつ退院出来るか解らない程、衣類などが詰まれているポストンバックを指しながら。

「……長くなりそうみたい……だから」

消えるような声で答える昌子さんは、寝不足なのかいつもより老けて見える。

梨絵のお母さんだから年齢も俺の親父と同じくらいだが、母娘の二人暮らしの時はそんな事感じた事が無い。でも今は若々しさも見

られない程であった。

長くなりそう…

その言葉の意味は何を指しているのか？

やっぱり昌子さんは担当医から何か聞いているのか？

疑問だらけの俺は、また昌子さんに聞く

「先生に何て言われたんですか？」

あの場に居なかった俺としては昌子さんに聞く事でしか真意は解らない。

家族でも無い俺が梨絵の担当医に聞いても教えてくれるはずもないからだ。

「……だから、まだ…解らない…って」

昌子さんも俺に言いたくないのか、解らないと繰り返すだけだった。

梨絵の家を出て、昌子さんの車で病院に向かう。

当然の事ながら学校は休んだ。

行っても梨絵の事が気になってしょうがないし、昌子さんからも一緒に来て欲しいと言われていた。

車の中では昨日の帰り道同様、一言も話さなかった。

まるで、身内が危篤のような感じがした。

病院に着く頃には、太陽も登り日が差してきた。

しかし、もう本格的な冬に入ろうとしている季節は日が差しても制服一枚だと肌寒い。

せめて気分だけでも暖かいと、また違った顔を梨絵に見せられるのだが、今の俺には無理な注文だった。

そして、気分が晴れないまま病室の扉をノックする。

「はい」

と、元気な声が帰ってきた。

昌子さんと一緒に入ると、ちょうど朝食の時間だったみたいで、梨絵はベッドに腰かけていた。

そんな梨絵に俺は

「大丈夫か？」

と聞く。

「大丈夫、大丈夫。先生も大袈裟なんだって！」

と梨絵は足の痛みなど忘れたかのように元気よく答える。

しかし、

梨絵の荷物を整理していた昌子さんの顔を、俺は見逃さなかった。

第95話 最悪（前書き）

今日も頑張りましょう。

第95話 最悪

元気に振り回っている梨絵の横で昌子さんの顔が青ざめていたのを感じた。

昨日の診断の後から昌子さんの様子がおかしい。

梨絵の大丈夫と言う声に俺は少しも安心する事が出来なかった。

朝食を食べ終えた梨絵の検診が始まる。

ベッドから立ち上がった梨絵は昨日ほどではないが多少、右足を引きずっている。

俺は手を貸そうと左手を差し出したが、本当に大丈夫だから！と言っで自力で診察室まで歩いている。

そんな俺達の後ろを歩いている昌子さんは、相変わらず何も話さない。

梨絵が診察室に入って行くのを見てから

「本当の事を教えて下さい」

と昌子さんに迫った。

しばらく立ち往生の形となった昌子さんは

「あとで…ちゃんと話すから…」

と残して診察室に入っていった。

1人残された俺は朝だというのに薄暗い廊下の椅子に腰かけ事故の時の事を思い出す。

あの時は昌子さんと一緒に梨絵の手術が終わるのを待っていた。

今みたいに1人ではなかった。

1人で待つ寂しさは小学生の頃に卒業している俺にとっては何も感じなかったはずだ。

だけど、今ほど誰かに傍にいて欲しい気持ちはない。

不安でしようがない俺を誰か支えて欲しい。

誰か傍にいて欲しい。

誰か話しかけて欲しい。

梨絵もそうなのだろう。

今ほど梨絵の気持ちが解った瞬間はない。

そんな事を考えていると梨絵の診察が終わった。

診察室から出てきたのは梨絵1人だった。

「昌子さんは？」

と訪ねると

「何か話しがあるって」

梨絵はそう言うと自分の部屋に向かって歩き出した。

診察に向かう時よりも帰る時の方が足を引きずって見えるのは気のせいではなかった…

昌子さんが部屋に帰ってきて、「これから仕事に向かつと言っ。

この調子で仕事になるハズも無いと考えている俺は昌子さんに

「ちゃんと話してからにして下さい」

と、出て行くこうとする昌子さんを制した。

「梨絵の前では…」

昌子さんは小声で俺に言う。

それなら俺も外に出ればいい。

梨絵に昌子さんを送ってくると言って外に出た。

病院の駐車場で車のロックを外した時、昌子さんは

「最悪…本当に最悪の事だけど……足の…切断も考えといて…くださ…」

最後まで言えず昌子さんはその場で泣き崩れた。

第96話 つまらない男(前書き)

おはようございます。 サブタイトルの通りの内容だった！

第96話 つまらない男

病院の薄暗い地下駐車場で泣き崩れている昌子さんを俺にはどうする事も出来なかった。

出来る事なら俺も一緒に泣き崩れたい程の衝撃だった。

足の切断……

確かに昌子さんはそう言った。

それほど悪いと言う事だろう。

治る確率は少ないのか？

切断しなくても済む方法は無いのか？

出来る事なら代わってあげたい。

それが今の俺の気持ちだった。

しばらくして立ち上がった昌子さんは

「じゃあ、仕事行くから…お願いします」

と言って車を走らせた。

去って行く昌子さんの車を目で追うように眺めている。

まだ何か言いたい事があるのだと感じている。

それは、すべての原因である俺を罵倒したいのかも知れない。

否、してくれた方が俺に取っても多少は気分が和む。

結果は変えられないが、今の俺は美代子との事で浮かれ過ぎてた罰がある。

梨絵の、昌子さんの気持ちを無視して。

もう迷わない。

迷ってはいけない。

俺は強い気持ちで梨絵と昌子さんに接しようと思心に決めた。

病室に戻ると、退屈なのか梨絵が

「暇」

と叫ぶ。

入院1日目から暇と言われたらこの先が思いやられる。

かと言って、俺が梨絵の退屈しのぎになる訳でも無いので今は一人でテレビを見ている。

毎日の出来事や芸能人の噂話などのニュースを見ている、全く興味が無い俺にとっては拷問に近い。

こんな時に、もう少し俺も話し上手だったら梨絵も退屈しないのだろうなと考える。

テレビに飽きている梨絵は凄い早さでメールしてるし。

女の子同士なら梨絵もこの雰囲気は苦痛ではないだろう。

だから俺も友美に学校終わったら来い！とメールする。

すると、まだ授業中であるにも関わらず直ぐに返信がくる。

【今、梨絵とメールしてたんだけど、勝弥何も話さ無いんだって？暇だってさ！】

と。

どうやら梨絵も友美とメールしていたらしい。

と同時に、やっぱり梨絵も何も話さない俺を退屈だなと思っ
たんだと気付く。

でも、こういう場面って何話すんだろ？

やっぱり二人が解っている共通な話題だろうか？

まあ、学校の話しになってしまっけど。

ふと、美代子の時も考えて見るけど、美代子ともあまり話しは
ないかな？

一緒に居ても必要最低限な事でしか話さないと思う。

美代子もそんな俺につまらない男だとか感じないのだろうか？

感じた上で諦めているのか？

二人が俺の事、どう思っけていても俺は変わらないけど。

やっぱり俺ってつまらない男？

もう訳解らなくなってきた……

第97話 マイナス(前書き)

全然進まない。

第97話 マイナス

梨絵も美代子も俺は口ベタだと思っているだろう。

そんな事で悩んでいる俺は余計に憂鬱な気分である。

友美とのメールが終わったのか、携帯を閉じた梨絵は

「学校終わったら友美ちゃん達が来るって！」

と俺に言う。

俺も友美とメールしてたから解っていたんだが…

ちよつとまで…

友美ちゃん達？

友美の他に誰が来るのか？

考えられるのはヒロと美代子だが…

ヒロは友和さんと明日の準備があるはずだから、基本的に寄り道

は余りしない……出来ないハズなので、そうすると友美と一緒に来るのは美代子か。

出来れば今は美代子と会いたくない。

今は梨絵の事しか考えられない。

もう迷わないと決めたのだから。

昼食の時間となり、梨絵は病院食が出るが、当然な事ながら俺には出ない。病院の売店で買ったのだが、さっきまで重苦しい雰囲気だったので少し外の空気も吸いたく、梨絵に断って外に出た。

外に出ると、冷たい風が俺の頬に突きささる。

もうすぐ冬休みとなり恋人達のイベントであるクリスマスが控えている。

まだ昼間だというのに、クリスマスイルミが輝いている街中を一人で歩く。

今年も俺にはクリスマスなんて縁がなかったみたいだ。

所詮俺なんて……と、すぐマイナスな事を考えてしまうのは俺の癖だ。

ロベタでマイナス思考の俺の事をよく好きになってくれたな！と
変な意味で感謝する。

自分で言うのも可笑しいが、俺の何処がいいのか？
と思う。

病院から少し離れたラーメン屋で1人食事を取る。

1人で食べる事に馴れてる俺は、改めて朝の出来事を思い出す。

昌子さんは、お願いします！と言った。

多分…

…すべての想いを込めて俺に言ったのだろう。

俺にも解っている。

だから俺は迷わないと決めたんだ。

俺が梨絵の足になる為に……

梨絵が俺を必要としてくれてるよつに……

昌子さんの気持ちを裏切らないよつに……

すべては梨絵の為に……

第98話 心変わり(前書き)

今日もよろしく！

第98話 心変わり

昼食を食べ終えた俺は、早足で病院に向かう。

外に食べに行った俺が言うのも可笑しいが、梨絵を1人にしたくなかった。

病室に戻ると梨絵はベッドに腰かけ足を擦っていた。

俺の前では余り見せたことが無かった苦痛な顔をしている。

かなり痛そうなのが解る。

俺はどうする事も出来ないもどかしさで自分自身イラついている。

情けなくて悔しい。

…そんな俺は病室に入っても梨絵に声をかける事も出来ずに佇んでいる。

何て声をかければ良いのかも解らない。

ただ、大丈夫か？と言つても大丈夫な訳が無いのに大丈夫と答える子だから。

だから俺はそつと梨絵に近づいて、梨絵の足を擦ってやる。

俺が帰ってきたのに多少は驚いたみたいだが

「ありがとう」

と、さつきとは別人のような笑顔を俺に向ける。

その笑顔が俺にはもどかしく

「梨絵……痛いなら痛いと言つてくれ……俺には隠し事しないでほしい……俺は梨絵と変わってあげる事は出来ないけど……梨絵の足になるから……梨絵の言う事は何でも聞くから……」

梨絵の足を擦っていた手を止めて、俺はそう告げた。

すると梨絵は驚いた顔をして

「勝弥君にはちゃんと言つよ。さつきはちょっと痛みがしたただけだから。今はもう大丈夫……そんなに思い詰めたような事言わないでよ……」

と、やはり俺が予想していたように梨絵は平然を装っている。

「いい加減にしろ！」

病室だというのも忘れて俺は梨絵に怒鳴ってしまった。

でも今は本当に梨絵の事しか考えていなかった。

普段、温厚な俺が怒鳴った事で梨絵はかなり驚き言葉を失っている。

そんな梨絵に俺は続ける。

「どうして俺に隠すんだよ！俺がどういう気持ちで梨絵に接してるか解るか？俺は本当にお前の事が心配なんだよ！」

梨絵の足の上に置いた手を強め握りこぶしを作る。

「本当に…俺だけにはちゃんと行ってほしい…俺は梨絵の痛みが解るから…」

すると梨絵は目に涙を浮かべ

「ありがとう……でも…私…大丈夫だから……美代ちゃんと…仲良くして……こんな事で…勝弥君を縛りたくない……」

と。

自分の事よりも俺と美代子の事を想っていてくれる梨絵が愛しく見えた。

第99話 もし…(前書き)

評価、感想お待ちしております。

第99話 もし…

こんな時にでも俺達の事を想っていてくれる梨絵が可愛いらしい。

梨絵の前で片膝付いていた俺は、静かに立ち上がりそのまま前から梨絵を抱き締めた。

そして

「俺と美代子の事は梨絵には関係ないから…梨絵は…今は足が治る事だけ考えていてくれればいい…きつと…必ず良くなるから」

と言い、梨絵の背中に回した手を少し強めた。

しばらく呆然としていた梨絵は

「うん。ありがとう」

と言った梨絵は俺の背中に手を回し顔を胸に埋めた。

時折梨絵の頭が上下している。

多分、泣いているのだろう。

俺は梨絵の顔を少し上に持ち上げ、梨絵と視線を合わせた。

やはり目には大粒の涙を溜めている。

そつと涙を拭いた俺は

「落ち着いたか？」

梨絵に聞くと

「もう少し…いい？」

と、少し俺に微笑み返してまた胸に顔を埋める。

どれくらいの時間、抱き締めあっていただろう。

異性と抱き締め合うと本来ならイヤらしさを感じるが、今は全くそんな気持ちは無い。

ただ純粹に梨絵を守りたい気持ちでしか無かった。

しばらくすると梨絵は顔を上げて

「一つだけ聞いてもいい？」

俺に質問する。

何の事か全く検討が付かなかった俺は

「いいよ」

と簡単に答える。

俺を見上げる格好になっている梨絵は

「もし……もし、私が事故に合っていなかったら勝弥君はどうしてた？」

「どうしてたって…俺が事故に合ってたんじゃないの？」

梨絵の質問の意味が解らない。

梨絵は俺を庇って事故に合ったのだから、俺を庇わなければ事故に合っていないのは誰に聞いても解っている事だ。

「そうじゃなくて……あの時、私も勝弥君も事故が無かったら…勝弥君は今頃どうしてたのかな？って…」

やっと質問の意味が解った俺は

「……………」

答えられなかった。

もし、事故が無かったら俺は此所には居ない。

否、この街には居ない。
多分……

前の学校で淳や美代子なんかと仲良く過ごしていたはずだ。

梨絵の事も特に気にしていなかったはずだ。

ただ、昔の同級生に会ったぐらいでしか。

何も答えられない俺に梨絵は

「変な事言うけど…私やっぱり事故に合ってたのかもね」

と笑いながら俺に言った。

第100話 運命(前書き)

昨日、更新したはずが…

第100話 運命

梨絵が俺の為に事故に合ったから俺がここにいる。

これは紛れもない事実だった。

もし…

と言う言葉を使うのなら俺はここにはいない。

いる理由がなかった。

でも人との出会いなどこういう物だと思っている。

出会いと別れは人それぞれ持っているものなのだから。

梨絵と出会ったのが偶然ならば美代子と出会ったのも偶然だ。

ただ親同士が仲良くして子供も仲良くなっただけの理由でしかない。

それから愛が芽生えたとしてもそれが続くのか終わるのかは本人次第。

結局は人との触れ合いは本人の気持ち次第でしかないのだから、もし…とかとは考えたくない。

考えてはいけない。

全てはその人の運命なのだから。

美代子と愛が芽生えたのも梨絵と出会ったのも全て俺の運命なのだ。

これから俺が進む道すべてが俺の運命だ。

「…そうやって考え込む時があるけど、いつも考えてることって美代ちゃんのこと？」

ふと、俺の止まった時間を梨絵が進める。

「…それもあるけど…今は梨絵の事も考えていたよ」

俺は梨絵に隠し事するなど言ったのだから俺も梨絵に正直に話した。

「へえ〜どんなこと？」

俺が梨絵の事も考えていると言ったら梨絵は嬉しそうにまた聞いてきた。

「んゝ運命…かな」

「運命？」

「そう…梨絵と出会ったのも運命だしね…梨絵には悪いけど、こ
ういう風になったのも変えられる事が出来ない運命だろ？さっき梨
絵が言った、もし…は使いたくても現実には使えられないし。俺が
ここに居る理由は運命なんだよ。これから俺達は何処に進んで行っ
たとしても、それが運命なんだ」

俺は自分の考えを梨絵に伝えた。

それは自分のせいで梨絵が事故に合ったのではなくすべて運命の
せいにしようとしている自分がいるのが解る。

そうしないとこれから先が進まないと感じていたからだ。

多分…

梨絵の足は相当悪いハズ。

自分がどれほど酷いことをしたかは解っている。

だから梨絵の足になりたい。

運命のせいにしてでも…

運命のせいになりたい…

もう、戻れない所まで来てしまったのだから……

第101話 未練(前書き)

おはようございます。感想などよろしく。

第101話 未練

もう戻れない所まで来てしまっている。

それは勝弥にとって梨絵の足よりも痛い決断をした時だった。

あれから他愛もない話しを梨絵としていた。

昼食前には全然話せなかったのが嘘のように。

しばらくするとドアをノックする音が聞こえた。

「はい」

梨絵が元気良く返事すると開かれたドアの先には友美と美代子がいた。

「やっほ」

と元気良く入って来る友美に続いて美代子が入ってきた。

梨絵の事情を詳しく知らない二人は入院している患者を目の前にしたのが不思議なくらいテンションが高かった。

女の子三人が集まれば騒がしくなるのは当たり前なので話しに夢中になってる間、俺は廊下に出た。

夜の病院とは違って昼間の病院は多少騒がしい。

入院患者が出歩いていたり、その見舞い客や外来患者が大勢いる。

そんな中俺は一人長椅子に腰かけている。

さっきまでの雑音が耳に入らないかのように、どう伝えようか考えている。

美代子にどう伝えればいいのか？

何を伝えれば納得するのか？

誰が納得するのか？

全ては俺の問題なのに…

自分が下した決断が正しいのか正しくないのかは解らない。

俺がこんな気持ちで美代子と居ても美代子が幸せになれるわけがない。

それどころか不幸にするかも知れない。

傷は浅い方がいいに決まっている。

好きな人には幸せになってほしいから。

誰もが考えていることだ。

抑を言うなら……

傍にいてほしい。

願うなら……

このまま時間が過ぎ去ってほしい。

人間誰でも自分は可愛いものなのだから……

叶う事のない願いを胸に美代子に伝えようと長椅子から腰をあげる。

考えごとをしていた時には聞こえる事の無かった騒がしい音が聞こえ始めた。

大きく息を吐き出した俺は膨らんでいる頬つぺたを戻せないでいた。

もう決めたハズなのに…

端から見たら未練たらしいかもしれない。

でも…

それでも…

俺は美代子が好きだから幸せになってほしい。

俺では美代子の期待に答えられないから。

頬つぺたが小さくなった時、息を飲み込むように三人が待つ病室へ歩き出そうと後ろを振り替えると

美代子一人が佇んでいた。

第102話 海岸線（前書き）

今日もよろしく。

第102話 海岸線

病室に戻ろうと振り替えたら美代子の姿があった。

さっきまで美代子の事を考えていた俺は美代子を目の前にして言葉が出なかった。

なぜ美代子がここに居るのだろうか？

さっきまで友美や梨絵と楽しく話していたはずなのに。

お互い見つめ合ったまま言葉が出ない。

数秒たっただろうか美代子が沈黙を破った。

「こんな所で何してたの？」

「…別に」

「……」

会話が続かない。

話したい事は沢山あるはずなのに。

「梨絵ちゃんの所、戻る？」

「ああ」

美代子と短い会話が終わり二人で病室に戻る。

長い廊下は俺達だけの足音しか聞こえない。

まるで周り中の時間が止まったのかのように……

病室に戻りしばらくすると昌子さんが仕事から帰ってきた。

初対面である美代子と軽く挨拶をした後、俺達は家に帰る事にした。

元気よく挨拶する梨絵はどこかしら強がっているのが解る。

友美や美代子の前では全くと言っていいほど痛がる素振りを見せなかった。

でも、俺には解る。

梨絵の痛みが…

三人でバスに乗るとよく飽きないなと感心する程、友美と美代子は喋り続けている。

そしてまた一人残されている俺は窓越しに写る海を眺めていた。

駅から俺達の家に向かうバスは海岸線を走るので海を眺める事が出来る。

小さい頃から見飽きていたハズなのに、夕日が照らされている海岸を見ていると、あの日の事を思い出す。

小学校に入る前に交わした美代子との約束。

今、全てが崩れ落ちようとしている。

もうあの頃には戻れない。

沈み行く夕日を見て俺は、美代子達に解らないように目尻に溜まった涙を拭いた。

バスを降りて途中の曲がり角で友美と別れる。

美代子と二人で家へ向かい歩き出すと

ふと美代子の足が止まる。

俺が振り替えると

「話し……が、あるんでしょ？」

と聞いてきた。

「……ああ」

美代子に答えた俺はまた歩き出す。

それは家の方向ではなく、小さい頃良く遊んだ砂浜に向かって……

第103話 別れ(前書き)

どは、まじりゃー！

第103話 別れ

俺が何か言いたそうな顔をしていたのか、美代子は俺に話があるんでしょ？と訪ねてきた。

どう切り出そうか悩んでいた俺にとっては好都合で短く返事した後、俺達は砂浜に降りて行った。

真冬となった季節は潮の香りの強さより凍えるような北風の方が強い。

辺りを見渡すと騒がしい夏の夜の浜辺とは違い俺達以外の人影は見あたらなかった。

この浜辺には思い出がいっぱいつまっている。
その全てを今にも壊そうとしていた。

波の音しか聞こえない波打ち際で俺はゆっくり口を開く。

「…今更だけど…やっぱり俺は梨絵の傍にいないといけないん

だ。多分…梨絵の足は相当悪い…元々の原因が俺だからとかではな
くて…このまま美代子と一緒に居る訳にはいかない…」

相変わらず上手く言えない俺は美代子にはつきりとは伝えられな
かった。

そんな口ベタな俺の言いたい事がある程度は伝わったのか

「この間も聞いたけど勝弥君はどうしたいの？勝弥君次第なんだ
よ？」

そうなんだ。俺次第なんだ。

ハッキリと言わないとまた同じ事の繰り返しだ。

「…………俺は…………俺は梨絵を守って行く。だから美代子とは一緒
に居られない！」

冷たい風が吹くなか今度はハッキリと伝えた。

「それって、私と別れる…って事？」

俺達の関係は付き合っていたのかいないのか解らなかったがキス
もしたのだから一応付き合っていたのかな？

だとしたらこれからの為にも…

「ああ……」

また短い返事を返した俺は美代子の顔を見上げる。

泣き出すのかと思っていたら何か想いついたような顔をして

「だから昨日言ったでしょ？梨絵ちゃんが治るまで傍に居ても良いし、私も傍に居るよって……だから……」

「それじゃ、ダメなんだよ！」

美代子の話しを中断させて俺は大声を張り上げた。

「……それじゃ何も変わらない……俺達と一緒に居ちゃダメ……なんだよ」

「…………ここで始まったんだから…………ここで終わりにしよう」

今度は波の音に書き消される程の声で美代子にハッキリと伝えた。

それは静かな海に二人の哀しい呼吸音が重なりあった時だった。

第104話 巡る(前書き)

ちよつと飛びます。

第104話 巡る

この場所から始まった恋はここで終わった。

季節は過ぎてまた寒い冬の季節となった。

あの日から1年が過ぎ俺は今、小さい頃から変わらない砂浜に降り立っている。

当たり前的事だが隣に美代子は居ない。

俺の為に転校してきてくれた美代子は俺のせいでまた元の学校に戻って行った。

あの後、何か言いたそうな美代子の言葉を俺は遮断した。

自分なりにケジメを付けたつもりだったが1日足りとも忘れる事は出来なかった。

今もこうして思い出しているのだから。

梨絵と居るときには表情を悟られないようにしているが1人の時は寂しさが溢れ出てくる。

どうしよつもないほどの愛しさが。

波は同じペースで砂浜に何度も何度も打ち付けてくるが、あの日海に返した貝殻は2度と帰ってくることは出来ない。

それは俺と美代子の関係を写しているかのように。

後悔と言つ言葉が使えるなら使いたい。

それほど美代子の事を愛していたと確認するには十分な時間だった。

あれから梨絵の足は悪くなる一方で今では車椅子の生活を余儀なくされていた。

どうにか切断は免れたているが殆んど動かせない状況になっている為、少しでも筋肉などをほぐさないと切断する事になっていた。

痛み止めの薬も手離せず家や街中では不自由な生活を強いられている。

俺は学校を辞め夜のアルバイトをして昼間は梨絵と居る生活を送っていた。

そんな俺にこの街で唯一の友達である友美やヒロは何も言わない。

否、美代子がここを離れる時は物凄い勢いで怒られたが、勝弥の好きにしろと言われた今では昔から変わらない俺の親友達だった。

高校2年となった友美達の生活も変わらない。

唯一上げるとするとこの間の進路調査でヒロは漁師、友美は花嫁修行を出したそうだ。

この二人には些細な喧嘩などしても変わる事の無い永遠の愛がある。

俺には、俺達には叶えられなかった約束が。

いつものまにか潮が満ちてきて波打ち際に居た俺の足を濡らし始めた。

冷たい海水が足から全身に巡って寒さが身にしみる。

真冬の北風のせいでは無い。

それは隣に美代子が居ない寂しさからくる寒さだった。

第105話 1年(前書き)

おはようございます。

第105話 1年

1年間もの長い間、美代子の姿も声も聞いていない。

触れたいと思っけていても触れられない。

会いたいと願っても会えない。

自分が決めた事なのになんて理不尽なのだろうか。

今、美代子がどう思っけているか、何を感じているかは美代子にしか解らない。

あの日以来、淳とか向こうの街の友達とは一切連絡を取っけていないので美代子の現状は解らない。

俺の事なんか忘れてしまっけているのか？

美代子に相応し彼氏でも出来ているのか？

全ては謎で、真実を知ようとも知る事の勇氣も俺には無い。

美代子が今、幸せなら…

久しぶりにバイトが休みの日の夜はこうして海を眺めながら美代子の事ばかり考えている。梨絵の前では決して見せる事が出来ない表情で。

この日確認したのは俺はやっぱり美代子が好きだと言うこと。

忘れることが出来ないこと。

美代子に幸せになってほしいこと。

携帯を握り締め美代子から連絡が来ることを期待している。

知りたい。

今、美代子が何をしているのか？

何を感じているのか？

少しの勇気で全て叶うのに今の俺にはそれさえも持ちあせていなかった。

冷たい海を背に家へ向かって歩き出す。

砂浜を歩く度に濡れた足に砂がつく。

一歩一歩砂が絡みつく度に足取りが重くなっていくのが感じる。

それはあの日美代子と別れた日にも感じた重さだった。

家に入りこれも毎日の日課である明日の確認をする。

明日は朝から梨絵の検診があるので、いつもより早めに行かなければいけない。

病院の車が梨絵の家まで迎えに来てくれて、車の乗り降りも車椅子ごと出来るようになっていてる。

便利な世の中になったなと思えばそれほど身体の不自由な人が多
くなったのだろうとも思う。

梨絵もその1人だが…

身近にそういう人がいる気持ちがこの1年で分かったような気が
した。

第106話 鍵(前書き)

アハハ。アハハ。アハハ。

第106話 鍵

久しぶりにゆっくりと眠った俺は起きてすぐに梨絵の家に向かった。

いつものように揺られながら海岸線を走らせるバスの中では学校へ向かう学生達から梨絵の状況や美代子の事なんかを質問される。答えようが無い俺にとっては苦笑いしながら誤魔化すしかないが、中には二人の事を好きだったヤツ等から睨まれる感じも覚える。

改めて二人の人気はすごいなと感じると、何故二人とも俺だったのかの不思議さが入り交じっていた。

駅前に着いたバスを降りて学校へ向かう学生達とは逆方向の梨絵の家に行く。

梨絵の家に着くとポケットから鍵を取り出して家の中に入って行く。

鍵は昌子さんから貰っていた。

母娘の二人暮らしの為、昌子さんはどうしても仕事が欠かせない。

これでも仕事の時間を減らしていた。でも完全に辞めて看病に専念出来る程の余裕は無いらしい。多少の補償金が入るらしいが…

昼間の時間帯梨絵に何か合ったら困ると言われて鍵を預かっている。

今となっては勝手知ってる梨絵の家なので、玄関で軽く梨絵を呼んで室内まで上がって行った。

リビングに入った俺はソファに座っていた梨絵に朝の挨拶をする。

病院の車が迎えに来るまでまだ多少の時間は残っていた。準備はすべて完了していたみたいで可愛いらしい笑顔を俺に向けてくれたが、梨絵の右足は殆んど感覚が無いらしい。

また、外で走り回ったりは出来ないので殆んど家の中で過ごす梨絵の身体はだんだんと細々くなっていくような気がした。

家の中とかは松葉杖で動いたりするが外では掴まる所も余りないので殆んどが車椅子での外出だった。

そんな不自由さを感じさせない程の元気良さは変わらなくいつも傍にいる俺の事をまだ好きだと言ってくれる。

でも、まだ俺には梨絵の気持ちに答えられる事は出来なかった。

人を本気で好きになったのは美代子しかいなかったし、多分これからも……

情で梨絵と付き合う事は出来ない。

そんな事は梨絵に対して失礼だし美代子に対しても失礼だ。

俺はそんな事はしたくない。

美代子の事が完全に忘れる事が出来たら。

梨絵の事を愛せるようになったら。

次に進む事が出来る。

現実によく聴く、初恋は結ばれないという話を昔は信じていなかったが、今考えるとそうだったのかなと信じようとしている俺は、心の何処かで梨絵の事を愛したいと感じているのかも知れない。

第107話 雲（前書き）

おはようございます。評価、感想よろしく！

第107話 雲

病院の車が家に着き梨絵と一緒に乗り込んだ。

車の中から外を見上げると今にも雪が降りそうな薄暗い雲が架かっていた。

この街は比較的暖かい地域な為、雪が降っても積もる事は少ない。

しかし今日の天候は大雪を降らせるかのような厳しい寒さと雪雲で覆っていた。

病院に着くと看護婦さんに案内されていつもの検診とりハビリを受ける。

もう何度も通っているこの病院では看護婦さんや担当医師意外の医者とも面識は深くなっている。

当然のことながら俺と梨絵の関係はこの病院ではちょっとした噂になっている。

梨絵の傍にいる為に学校を辞めた俺の事を美談として病院中に伝わっている。

だからここの病院の医者達は俺達の事を本当に良くしてくれてい

た。

梨絵の診察中などで待ってる間、休憩中の看護婦さんが一緒にお茶しようと誘ってくれたり、身内では無い俺が梨絵の診察に一緒に入らせてくれたりと都会の病院では考えられない事をしてくれた。た。

その行為自体は法に触れるのかもしれないが、俺にはこの人達の優しさが十分に伝わってきた。

もし梨絵が事故に会わなかったら感じる事の出来なかった優しさ。

俺はこの優しさに触れた時、美代子と別れてから身体中に溜まっていた醜心が離れて行くのが感じた。そして人と人はこうやって繋がって行くのだと再確認をした。

リハビリが終わると何時もは散歩の意味も込めて俺が車椅子を押しながら帰るのだが、今日の天候だといつ雪が降ってくるか解らないので病院の車に甘えようと提案すると

「…やだ。雪の中で歩きたい…」

滅多に降らない雪を身体で感じたい梨絵の言うことを聞いてあげたいが、もし大雪になった場合、俺1人では車椅子を押せない。

ましてや梨絵の身体は1年前に比べれば体力的にも相当弱くなっている。

そんな時に風邪など引かれたら。

思っではいた。

感じてはいた。

梨絵が俺の言うことなど素直には聞かないってことは。

俺は深い溜め息を尽きながら病院の外に出て、昼間だというのに真っ暗くなっている空を見上げながら、いつもよりも強めに車椅子を押し始めた。

前には同じように空を見上げ、早く雪が降って来ないかなと楽しそうに笑う梨絵がいる。

第108話 雪（前書き）

季節外れですみません。

第108話 雪

今にも雪が降りそうな雲空の下を車椅子を押しながら歩いている。

梨絵と他愛もない会話をしていると冷たい雫が頬を伝わった。

梨絵にも感じたようで二人一緒に空を見上げると

「雪だ〜」

と梨絵が可愛いらしい大きな声を出した。

まだパラパラと降ってくる雪を見ながら積もる前に帰らないと心配している俺を他所に梨絵は久しぶりに見る雪を心から楽しんでるかのようだった。

確かに雪と言うのは乙女心を擦るのかもしれない。

しかし、車椅子を押しながら歩いている俺にとっては街中がどんな綺麗に雪化粧をしても苦痛以外の何者でもない。

車などを運転する大人の気持ち解った感じがした。

早く帰らなければと焦る気持ちとは裏腹に、少しずつアスファルトが見えなくなり車椅子の進みが悪くなってきた。

それまでは雪を楽しんでいた梨絵もようやく状況を理解し始めたのか

「家まで大丈夫かな？」
と心配してくれた。

梨絵の家までは普通に帰ればあと5分ぐらいの所まで来ていたが、車椅子のタイヤが雪に絡み付く今の状況だとまだまだかかりそうな雰囲気だった。

「梨絵：オンブして行く」

静かに答えた俺は車椅子の前にしゃがみ込み梨絵を背中に乗せた。

少し恥ずかしかがっていた梨絵が俺の言う事を素直に聞いたのは早く家に帰りたかったのか、俺が車椅子を押す辛さが解ったのか、それともただ単に俺の背中に乗りたかったのか：は梨絵しか解らない。

さつきよりも進みは早くなったが二人分の体重がかかる足は降り積もっている雪の中にのめり込んでいく。

一歩一歩慎重に進ませる俺に梨絵は肩に置いていた手を首に巻き

付けてきた。

一瞬驚いたが振り落としてしまうよりはマシなので余り気にはしなかった。

否、背中に当たるモノを気にしないように努力していた。

なんとか理性を保りつつ梨絵の家までたどり着いた。

肩で息する俺に梨絵は

「わがまま言ってゴメンね」

と俺に謝ってきた。

車で帰ろうと提案した俺の意見を遮った事を謝っているのだから、無事にたどり着いた今となってはどうでもいい事だった。

「大丈夫だから。それより早く身体拭けよ」

と洗面所から持ってきたタオルを梨絵に手渡す。

雪とはいえ触れば雨と一緒に身体は濡れる。

頭の前から足の先まで濡れている身体を拭いていると梨絵の携帯が音を鳴らした。

第109話 泊（前書き）

とまーどは、とんぱ。

第109話 泊

濡れた髪の毛などを拭いていると梨絵の携帯が音を鳴らした。

頭にタオルを巻いたままポケットから携帯を取り出した梨絵は

「うん…解った。勝弥君も居るから大丈夫だよ…うん。ちょっと待って」

「はい…お母さん」

と言って手渡された携帯に出た俺に昌子さんは、この雪の為に帰れないから一晩泊まって行って欲しいとのお願いだった。

昌子さんから言われた俺はリビングから窓の外を見た。降りだした雪は休む事も知らずに降り続き、辺り一面白くなっているのが解る。

俺が車椅子を諦めたほどのだから昌子さんが雪が積もっている道路を運転するなど無理がある。

ましてや雪など滅多に降らないこの街では雪道の運転など慣れていない訳もないので、俺が自分の家に帰る手段もなかった。

「解りました。俺も家に帰れないので、こっちからお願いしよう
と思っていましたので」

じゃ、よろしくね！つと言って携帯を切った昌子さんの声は何処
か弾んでいるように聞こえた。

携帯を梨絵に渡すと

「泊まるんでしょ？先にお風呂入ってくれば？」

俺の濡れた身体を見て梨絵が言った。

梨絵も結構濡れているので

「俺は大丈夫だから、梨絵が先に入れよ」

と先に入るように託す。

「じゃあ、一緒に入ろうか？」

何処か赤みを帯びた満面の笑顔をした梨絵が俺に聞いてきた。

ちょうど1年前：俺が美代子に聞いた事がある言葉だった。

あの頃は……今離れて過ごしているとは思っても見なかった。

でも…これが現実なんだと自分の中で割り切る。

そんな事を考えながら半分冗談半分本気で

「いいよ…」

と梨絵に答える。

目を大きくさせて驚く梨絵は

「じよ…冗談にき…決まってるでしょ！」

と玄関脇に置いてあつた松葉杖を突いて風呂場に向かつて行つてしまつた。

そんな梨絵の後ろ姿を見ながら俺も成長したのかな？と感じる。

今までだと、こんな冗談なんか言える訳がなかった。

美代子に言った時は酒の力が大きかつたし、愛する人だつたからだ。

じゃ、梨絵の場合はどうだろう？

俺は梨絵の事を愛してはない……と思う。

今は友和さんも居ないので酒も飲んでいない。

俺の心が冗談を言える程に落ちついてきた証拠なのだろう。

第110話 ドラマ(前書き)

朝からブルーです…

第110話 ドラマ

梨絵が風呂から上がり続いて俺が入った。

雪で濡れた冷えきった身体は熱い湯船に浸かると白い肌が赤身を帯びてくる。

元々長風呂ではない俺はすぐに逆上せてきて風呂を出た。

風呂を出ると梨絵がキッチンに立ち料理をしている。

松葉杖をつきながら料理をしているとは思えない程の手際よさは見ていて感心したほどだった。

料理をテーブルなどに運ぶのは手伝ったがそれ以外は全て梨絵が行った。

並べられたのは鶏の唐揚げとサラダなどといった普通の料理だったが、美代子が居なくなっただけからばあちゃんの料理しか食べて来なかった俺にとっては新鮮な感じがした。

味も美味く家では滅多に御代わりなどしないのにここでは御代わりした程であった。

食べ終わった食器などの片付けは俺が行い、その間梨絵には休んでもらっている。

梨絵もやると言ったのだが、さすがに松葉杖をついてでは見ていて痛々しい。

この1年家事はばあちゃん任せだった俺にとって久々の洗いものだった。

食器の片付けが終わり、梨絵が休んでいるリビングに行く。

テレビを見ていた梨絵は俺が来たのが解ったのか、ふと振り返り

「ありがとう」

と短い言葉を発した。

俺は軽く頷き梨絵の隣に座る。

梨絵が見ていたテレビは今人気の恋愛ドラマだった。

普段のこの時間は仕事に追われてる俺はドラマのタイトルは知っていても内容はいまいちよく解らない。
すると梨絵が

「勝弥君は見た事ないかも知れないけど、このドラマは1人の男の子を2人の女の子が取り合うドラマだよ。何処かで聞いたことある話しだね?」

可愛いらしく笑いながら俺に言う。

その言葉に一言も返せない俺はただ苦笑いすることしか出来なかった。

それは俺と美代子と梨絵の事を意味していることなのだから。

でも、美代子が居なくなっただけからの梨絵は美代子の事を俺との会話の中では出さなかった。

梨絵も何処かで美代子の事を気にしているのだろうか?

そんな事を考えるとまた心がマイナスになってくるので、俺は梨絵に聞いて見た。

「それは美代子を含めた俺達の事を言っているのか?」

俺は横にいる梨絵を見ないで、前に映し出されているドラマを見ながら梨絵に聞いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1138g/>

約束

2010年10月15日21時46分発行